モグラ叩き（一）　～課題提示編～

じょーもん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
モグラ叩き（一）　～課題提示編～

【Ｎコード】
Ｎ２４００Ｉ

【作者名】
じょーもん

【あらすじ】
　曰く付き採用の一般軍属である斉藤歩は、宇宙船操船学校の管制技術科を首席で卒業するも、なぜか、統合幕僚本部に置かれた情報本部に配属させられる。一応のデスク研修を済ませた後に紛争地区である月自治区へ調査員として派遣させられる。
　一方、月には、宇宙軍基地で微細重力下での訓練のために高柳優美がいた。そして会社の新人研修という名目での雑用、マスドライバー・メンテナンスに霧島飛竜もやってきた。

しかし、静まりかえっている月は、斉藤の風化することない記憶が刻まれた場所であった。

☆ルビ多め　ＩＥｏｒＣｈｒｏｍｅ又は縦書き推奨です。
☆空想科学祭り２００８参加の『ザ・ライダー・プール』続編
時系列的には、「まぜまぜノベル」公開中の『たまごどんぶり』制作予定の『トラブル・バーゲン』の後に位置するお話です。その辺のことがないと、作品として分からないかもしれません。

三人が活躍する、活劇調の本編は、別の機会に長々とおしゃべりしたいと思いして、今回は斉藤君の昔話ということで、雰囲気だけでも楽しんでいただけたらなぁと思います。
タイトルが、滑っているのはご容赦くださいませ。

※※ＰＤＦで読まれる方へ。２００９年１１月現在、「たてさき」を使っている樺崎氏の「サキ」表示できず、「樺？」で表記されています。２０１０年３月「おおさき」に変更しましたが、残っている箇所があるかもしれません。「樺崎」と脳内変換して読みいただけるとうれしいです。
２０１０年３月やっぱり「樺崎」に変更。訂正漏れ箇所はやはり脳内変換でよろしくお願いします。ご一報いただけると助かります。

序――紅い花

ごくごく小さなころ。

世の中には、余りにも馬鹿ばかりが溢れていると思っていた。

鬱陶しいと、思っていた。

そして、馬鹿の自覚も無く生きている人たちが、なんで、自分が愚かなことに、我慢できるんだろうか不思議だった。

ざるで水を汲むぐらいしか、さまざまなことを覚えていることができないでいて、何故、みんな不安にならないのだろうか。

そんなに簡単にいろんなことを忘れて行って、流してしまって、なんで、みんな平気なんだろうか。

大切なことだけじゃない、毎日毎日をどんどん忘れていってしまったら、みんなも自分も、ここにいる意味がないじゃないか。

自分もいろんなことをどんどん忘れる。

自分が何かしたとき、一緒にいた人のことすらも、どんどん忘れていく。

たしかに見えるすべてのことは、一瞬先はどうなっているか分からない。

――歩ちゃん、大好きよ。
――ずっと、ずっと、そばにいるからね。

そんな言葉を紡いだ優しい唇があった頭だって、弾けてしまった。
――みんな忘れてしまったら、その人はいなかったのと、どう違うんだろう。

暖かい、ふっくらした腕が、包むように自分を抱き取る。たまらなく気持ちがいい。

「泣いてあげよ……。いっぱい、いっぱい泣いてあげようよ……」
耳元で切れ切れにささやかれる言葉。そんな言葉を紡ぐ頬には本当にたくさんの涙が、まるで留まることを知らないかのように後から後から溢れては伝い落ちて、抱えられた頭に落っこちてくる。

花で埋め尽くされた柩に、当たり前のようにある扉をあけようとするものは誰もいない。その中に眠る人には、その関わりの中で当然、その人であると証明できる顔そのものを、もうなくしてしまっているのだから。取り返せないほどの喪失。

「ねえ、泣いても……いいんだよ」

少年の唇が僅かに開く。
けれど、そこから漏れる息は言葉になる前に空気に溶けてしまう。

あのね、瑠璃子さん、あのとき。
紅い花が壁に咲いたんだ。
だけど……きれいなんかじゃ……なかった。

どうやって泣いたらいいのだろうか。
大好きな人の血肉で咲いた花が、気持ち悪く、怖く、おぞましいと思ってしまった自分はどうしたらいいんだろう。

生臭くて、どうしょうもなく温くて、蠢く塊をいっぱい含んだ、その紅い花を、嫌悪してしまった自分がいたことを、どうやって忘れたらいいんだろう。

——僕ね……泣き方が、思い出せない……よ……

1．卒業式

ネオ・シャンガンの宇宙船操船専門学校。基礎過程2年、専門課程4年の長い時間を、斉藤歩(さいとうあゆむ)はここで過ごした。
今日で、いわゆる執行猶予が切れる。この先、彼はプライベートを除く全ての時間を軍人として過ごす。
斉藤自身、そういう人生を歩むことに、全く悩まなかったとは言わない。何たって、合法か非合法かの違いだけであって、暴力に対する洗練と、鍛錬度が、結局はものを言う世界だ。ということは、あれだけ嫌っていた父と同じルールの言語を使う人間になるということだ。自虐なんていうのは、自分のみてくれに似合いすぎていて、できればそんなものと無縁でいたい。だけど、もともと身から出た錆(さび)。自分に他の選択肢はない。

コンパートメントを出て歩きだすと、後から聞き慣れた声がした。
「歩(あゆみ)ちゃん。それ、結構マズくね？」
振り返ると珍しく第一種礼装で、白手袋まで着用した高柳優美(たかやなぎゆうび)――タカの姿があった。背が高く、鍛えて絞り込まれた体と、ちょっと甘めの童顔というちぐはぐな見てくれの友人が、格式張った軍服を着ている。普通、二十歳前後の大柄の青年が軍装なんか、それも盛装でいれば、文句なく格好いいと言うべきなんだろうけれど、結婚式に参列するためにスーツをお仕着せられた子どものようで、むしろ、かわいいといった言葉が似合いそうだ。
「学校の卒業式だから、いいと思うけど」
彼がなにを心配しているのかは分かるけど、軽くいなしてみる。
タカが、困ったような、とまどったような、曖昧な苦笑顔になった。

「でも、こっちに並ぶんでしょ？　勿論」

　卒業式の並び方は、普通は専攻科ごとだが、こと、軍から技術研修目的での出向組みは、専攻科にかかわらず一塊として扱われる。技術研修に航空宇宙（エアロスペース）学校に来ている面子は、基本的に航空宇宙軍の人間だから、所属はまちまちなもの、服装的にはまあ、統一されていて、ちぐはぐな印象は全くない。

　かつて極東アジア国の本体が、いわゆるテラの地上いたときの海軍の伝統を汲む婦人用式服は今どき珍しいロングドレスで、絶対数が少ないだけに目立ちまくるし、ちょっと外見が可愛い娘（こ）なら、写真一緒に撮って下さい攻撃のターゲットと化すのは恒例だ。

　ともかく、そうでなくても女友達が異常に多い高柳だから、この軍服姿が可愛いと、きっと式の後は多忙をきわめるに違いない。

「読み方は、歩（あゆむ）だよって、言ってるでしょう。優美ちゃん。」

　いつもの決まりきった返事を儀式のように繰り返す。女みたいな名前で呼ばれるのを嫌っているタカと、女の名前に読まれるのが嫌いな斉藤。お互いに聞き慣れすぎて、言う方も間違っていることを承知、応えに抗議という味が添加されているわけでもない。定番というか、そうでなくてはしっくりこない、彼ら二人の間だけの『ハロー』。

「それは、もちろん税金泥棒組みとしては、当然そうなるな」

　軍からの出向組みの塊に並ぶのか、普通の連中のように管制技術科の塊に並ぶのかというタカの問いかけに、遅ればせながら簡単に答える。

「あゆみちゃん、名前で呼ぶの止めてね」

　高柳も斉藤の答えに反応するより先に、律儀に定番ともいうべき名前を呼ぶことへの拒否を表明することばを挟む。ここのところは、阿吽の呼吸。それから、本題。

「で、最前列でしょ……、ミスタ・グレー・スター。管制技術科の不動のトップで、ＣＦＤ（チーフフライトディレクター）だったんだから」
　高柳の問いに、斉藤は軽く頷いた。
「うん、そう聞いてる」
「めちゃくちゃ、目立つよ……それ」

＊＊＊

　目立つのは、まあ、間違いないだろうと、斉藤は思う。どっちかというと機能性を排除してあるごてごてした印象の盛装軍団（といっても、訓練期間中の彼らの身分では、勲章なんぞの類も、所属部隊の徽章があるわけでもないので、適度に地味なもんだけど）の前では、星入り青ジャケでもシンプルの具現者みたいに見えるだろう。

　斉藤が着ているスター青ジャケと呼ばれているこれは、学年で一人しか着られない特別なものだ。
　白いワイシャツに管制技術科のシンボルでもある赤いネクタイを締め、フライトディレクターを務めた者に許される、襟の縁取りに白いラインがクッキリ入った、鮮やかな青のジャケットが通称青ジャケ。こいつを着ているのは毎年１０名前後。

　フライトディレクター、通称ＦＤ。宇宙空間での物資や人の輸送に使われる、いわゆる宇宙船の運行に関する管制業務には、宇宙港管制と、飛行管制の2種類が存在する。フライトディレクターの出番はもちろん、各宇宙船ごとのフライトに関わる全てに責任を持つ業務で、管制室はそれぞれの船主が所有する建造物に置かれることが多い。
　全くないとは言えない重大事故に備えて、宇宙では宇宙貨物船などの離着桟（りちゃくさん）は、いわゆる居住区とは構造物として別のユニットになっているものだ。だから、その部分がいわゆる宙港と皆が呼ぶもの

で、そこにあって個々の宇宙船と、それぞれの運行者（運送会社であったり、軍などであったり、大金持ちの個人であったり）の飛行管制室と連絡をとりながら、宇宙港の滞りない運用を司るのがタワー管制、ＴＷＲということになる。

普通どの飛行管制室でも管制官は１チーム最低２０人はいる。離(り)桟(さん)を０：００：００時としてカウントが始まるそれぞれの航宙は、原則、ディスティネーション（目的地）の宇宙港の桟橋(ピア)に着桟するまで全航程をウォッチするから、通常飛行管制１チームごとに複数の宇宙船を監視しつつ、それぞれが三交代で運用されている。その飛行管制チームを実質上纏め上げて、一つの機能とするのがフライトディレクターの仕事だ。

実務に極力近い状況で訓練できるというのがうたい文句のネオシャンガン操船学校では、管制チームの制服はグレーのジャケットということになっている。「実務に近い」の言葉通り、管制チームも固定した顔触れでやるというよりは、それぞれの専門を生かしつつ、かなり流動性が高く運用されている。それで、どの管制チームに急遽のヘルプで入っても、現場の統括者を見間違えることがないように、ＦＤだけは空色に近い明るい青のジャケットということになっている。これがいわゆるＦＤの青ジャケというやつだ。

学校名物であり、学生にとっては年間カリキュラムの総決算でもあり、メインイベントでもある、総力を上げての宇宙船操船実習訓練を行う全校挙げての行事がある。

実際の宇宙船運行の現場でも、その一航宙ごとを統括する管制業務は必要なものだ。その総合演習時においても、もちろんそのミッションごとを管制するチームは存在する。それぞれの管制チームからの情報を統括してまとめて、実際に現在使われているそれぞれの宇宙港のタワーにとっての、それぞれの船会社等の飛行管制室にあたる役割を果たさねばならないのが、その統括たるチーフフライト

ディレクター、ＣＦＤ——もちろん、各年度一人だ。
そして、そのＣＦＤの青ジャケの胸には大きな星マークを入れることになっている。
実は、ほかにもう二人、青ジャケの胸に星が入っている人間がいる。ＣＦＤの副官2人で（２４時間勤務は基本人間には無理なので、非常時招集を除けばＣＦＤ、飛行管制統括官も3交代だ）、彼らの通称はリトルスター。
チーフと付かない普通のフライトディレクターだって、並大抵の情報処理能力ではおいつかない。１０００種類は優に超える管制手順書の中から、今の状況に最適なものを選択し、的確に指示していくことができる種類の人間たちなのだ。しかも学生だから、当然にそれぞれ、まだ青い季節をやっとこさっとこ生きてるひよっこ達に過ぎない。能力は中途半端で、折れることに十分に慣れていない。万能感と、自己嫌悪のジェットコースターの乗客（パッセンジャー）。
自分の方がＣＦＤとして立派な仕事ができると信じて疑ってない連中。だけど、いざというときの肝の座りが中途半端な僕ら。そんな集団相手に滞りなく業務を進め、すべての手順を円滑に纏め上げるというのは、なかなかに難しいことになる。

大体がバックアップという種類の仕事は地味だ。ちゃんとできて、当たり前。ちょっとのミスで、人間性ごと否定されるような批判の嵐にさらされる。割があわないことこの上ない。
その年に一度だけ開催される大がかりな総合演習の時、管制技術科の学生たちが運用するのが第一管制。
学生と、一般の港の双方の安全のために、第一管制と同じく全ての運行をウォッチしつつ、第一管制もしっかり監督しているのが、教官達によって構成されている第二管制だ。
星ジャケとして、第二管の介入は、その圧倒的な経験の差ゆえに致し方ないこととはいえ紛れもない屈辱で、歴代ＣＦＤはどれだけ第二管の介入を許さなかったかで、その実力を評価される。それぞ

れの管制官に、それぞれの専門分野での暗黙の了解事項があるように、自分たちＣＦＤにもそれぞれの意地と矜持をかける、実務上はぶっちゃけ不必要なそういうものが、まあ、それでもこだわりとしてある。

斉藤歩は、この学校の、この管制技術科に居て、星ジャケを着ることができた。それは、他専攻の人間には決して分からない、本当に特別なことなのだ。ジャケットの左胸についている星型の飾りは変哲もないエムブレムだけれども、斉藤の心の中で光彩を放って輝いている。

他科の学生には分からない。管制技官を目指すものなら誰しも羨望し、一度その星を掲げたとたんに発生する想像を絶する重圧感と闘い、判断をくだす立場であることの恐怖を知ることになる。

そしてこの星を得られなかった、やはり優れている人材。星に対するこだわりを持つゆえに敵対者となりがちな彼らを、いかに信頼できるチームメイトにするか、という問題もある。自らも十分でない経験という貯金と自身も未熟であるという困難と戦いつつ、がんばった挙げ句に滞りなく演習が済んでも、事故は起こらずに済んで当然なのだ。

管制という業務に携わるものは、その一瞬の判断に他人の命を握っていることを知っている。だから、総合演習が終わって、当たり前のように母港の桟橋には帰還した実習船が並んだ後も、達成感や高揚感より、ただひたすらに安堵感に支配される。

青いジャケットに地味に縫いつけられたエンブレムは、単に目印のマークにすぎないけれど、管制技術科にとっては紛れもない星なのだ。だから、人生の節目たる卒業式に、斉藤は自身の勲章としてあるスター青ジャケを着る。斉藤としては、当然のことだ。

——どこが悪い？

＊＊＊

高柳が、繰り返す。
「だって、卒業式には、幕僚監部のお偉いさんがくるんだろ？　やっぱり、端くれであっても税金泥棒組みとしてはだね、第一礼装の方が、受けがいいんじゃない？」
「卒業式に星付き青ジャケ着なかったCFDが、いるとでも思う？」
「そりゃ、居ないだろうけど……」
「私は常識にへつらうタイプだからね、ちゃんと伝統に従ってる。世の中、個人主張を通す方がうまくいく場面と、長いものに巻かれるべきシーンとがあって、卒業式が後者だということはちゃんと分かっているよ」
「俺たち、税金泥棒組みの方の伝統はどうする？」
珍しく困ったような顔をしている高柳――タカをみると、心配してくれているということが手にとるように分かって……、斉藤はなんだかむず痒くなってくる。しみじみと思う。いろいろあったけど、楽しかったなぁと。
友人たちと過ごしたこの数年間は、いわゆる青春時代として人生に刻まれたのだという確信がある。このまま、うまく互いの関係が続いたのならば、きっと棺桶に片足突っ込むころには、「かけがえない」という言葉が自然と似合っていくのだろう。

「体は一つだからね。どちらかを立てるしかないよ」
「珍しく、立てる方の選択が、間違ってやしませんか。データマン。ことは今日でさよならだけど、少なくとも軍で飯食ってくつもりなんでしょ」
確かにその通り。人生を長くお世話になる方の顔色をみる方が、理に適っていることは間違いない。
「前から、一度聞いてみたかったんだけど」

――ん？
いつになく、目が笑っていない。高柳――タカという男は、基本形が笑顔のポーカーフェース。だから、しんどいときでも、追い詰められたときでも、悲しいときでも微笑んでいる。だから、深く付き合わないと、繊細でタフで、明るくて、冷めている複雑な奴に気付くことは難しい。斉藤も最初は、高柳を単純に明るいだけの人間だと思っていた。
最近ようやく、彼がしんどいときもしんどいと言えない性分で、しかも自分がいっぱいいっぱいの時も、他の人間を優先できるという希有な魂に慣れてきた。けれど、やっぱりどこまでも自分が一番可愛い、『人間だもの』の自分がいることを斉藤は自覚している。だから、そんな自分がはしたなく感じられるのは、ちょっと辛い。
そんな高柳が、本当に時たま見せる笑顔でない瞬間の表情は、彼の童顔と相まって、天使だの神だのから本質を問いかけられているような、そんな気がしてきて、斉藤はつい構えてしまう。
だから、つい無言のままでいたけれど、自分の注目がちゃんと己にあることを確信した様子で、高柳は言葉を続けた。
「お前、何で軍に入ったんだ？」
――へ？
予期せぬ問いとはこのことだ。
「斉藤、お前、力が強いものが、やっぱり強いってのも、人殺しも嫌いだろ」
「……まあ、普通には」
「いいや、嫌いだよ」
この断言。子どもの思い込みにも似た、揺るぎない確信。勘弁してくれ、自分はおまえみたいにピュアじゃないと、斉藤は思う。己の口から出た指示で、誰かが人殺しになってしまうのを承知で、ヘッドセットマイクを下ろさせる程度の感性しか持ち合わせちゃいない。
「……そうか？」

間が抜けた問いかけ。
「当たり前でしょ」
迷わない答えは信頼という名前の軛（くびき）。彼と話していると本当に引き締まる。この信頼に応えるためだけにでも、自分は魂まで腐ってはいけないと思えるのだから。
「……うん、じゃあ、大嫌いだ」
多分、もう一人の親友、我等が先鋒（リーダー）霧島飛竜だったら、『人を喰ったような態度は気に入らない』と、アタマから湯気を噴くだろう、おちょくりにもとられかねないこんな答えで、タカの瞳はいつもの満面の笑みに一瞬なった。それから、思いなおしたように真剣を取り戻す。
「究極として、軍ってところがそいつで動いてるのも、お前なら知ってたはずだよな、データマンは一日にしてならずだろう？」
高柳の妙な言い回しは、実は冗談でも何でもなく、かなりの部分本気なのだ。だからここで笑っちゃいけない。斉藤は高柳を真似て微笑んでみる。
「……うん、知ってたよ」
「何でさ。俺、結局、あゆみちゃんの家族の事とか知らないままで来ちゃったけど、俺みたいに金がなかったとしてもさ、あゆみちゃんのアタマがあれば、どこの大学でも濡れ手に粟で来てくれって言うだろ？」
——普通、濡れ手に粟は、そういう時には使わない。
と、いつもならレクチャーモードに入るのだけれど、今日の高柳のまじめモードは、卒業記念の取って置きだろう。斉藤も、久しぶりに心からの真面目を呼んできた。
「お前と基本的に一緒だ。他に選択肢がなかった」
一瞬だけ——、珍しくくの瞳に怒りの色が滲んだ。それから刹那で

諦めと苦笑のない交ぜになったものに変わり、そしてゆっくりといつもの万能の微笑みモードにもどった。斉藤は思う。
（しまったなぁ。せっかくの卒業式なのに、タカを怒らせちまった）
斉藤も、自分としては、ごくごく真面目に答えたんだし、おちょくってもいないんだけどなぁと、心の中で言い訳する。でもまあ、高柳が怒りの色を浮かべたり滲ませたりすることは実際滅多にはない。怒らせたのは、当然のこと久しぶりな気がして、斉藤は思う。
――こんなのも、ひょっとしていい一コマなのかな。
「もういい、お前のことは、俺には一生分からね～」
タカが微笑む。諦めと、許容と、それから、心地よい怒り。斉藤は思う。うん、ここにきて、本当によかったなぁ。

「斉藤～、何考えてるの？　それ」
本当に自分には他に選択肢がなかったのだということを、斉藤がちゃんと言い訳しようとした刹那、背後から聞き慣れた呆れたような色の、女の子の声が突き刺さってきた。
振り返ると、同じ管制技術科の青ジャケ（胸に星は、輝くリトルスター）を着た、どちらかというと小柄な姿が、だけど偉そうに腕組みをして立っていた。第一管（うち）のクルー、頭の切れと、打てば響くように回転がいい毒舌には、誰でもちょっと一目置きたくなる女の子、崔春花（チェ・チュンファ）がそこに居た。
「今日は、名物、税金泥棒礼装の二人と一緒に写真撮るつもりなのに、なんで青ジャケなのよ。スター斉藤」
挑み掛かるような口調は、多分彼女の中国系のなせる技で、別に

特別彼女が怒っているとか、不機嫌とかそういうわけではない。だから、斉藤もいつも通り。
「スター不在の卒業式なんて、締まらないでしょ？」
「まあ、そういう見方もあるけど、みんな、今日のスターは税ドロルックに違いないって、私もそっちに賭けたんだけど」
　高柳が呆れたというように目を丸くした。
「タワーの連中って、自分のところのスターをネタに賭博（かけ）るの？」
「そりゃ、ネタがあれば、何でもよ。管制としては、我等のスターと最後に青ジャケで並びたいとは思ってるけど、斉藤が税ドロなのもみんな知ってるし。税ドロがここで礼服着ないと多分、上から余計な目をつけられることになるんだろうし。結局、これからの人生の方が、後ろ足で砂かけて去っていく母校よりも長い付き合いじゃない。まあ、スター不在も仕方ないかな、なんて、常識人の私は思ってたわけよ」
　常識のスタンダードは、春花じゃないことだけは確信があるが、敢えて突っ込むまでもない。本人がそれは自覚している筈だ。だからいつもの口調で答える。
「……まぁね、だけど、私は、基本目立ちたがり屋なんだ……」
　一瞬の沈黙。それから、ぷっと小さく春花が噴き出す。可愛い。
「さすが、私たちのスターは、いい度胸してるわ」
　春花が、自然な仕種で、その腕を絡ませてくる。ちょっと肘が柔らかい胸に当たって、友達で間違いない存在ではあるけれど、ちょっと胸が踊ってくるのは、まあ、自分だって若い男だという証拠だよなと、どこか他人事のように斉藤は思う。彼女は、そんなことに気付きもせず、ぐいぐいと有無をいわせない勢いで、斉藤を引っ張る。式典が行われる講堂に向かっているのは分かるけど、まあ、春花と腕を組んで式場入りというのも卒業記念ぐらいにはなるだろう。
　斉藤がされるがままに仕方なく連行されると、春花は講堂に入っ

てもそのままの勢いで、見慣れた顔が屯している青ジャケ軍団のところまで、ぐいぐいと斉藤を曳航し、それから、講堂中に響きわたるような美声を響かせて叫んだ。
「スターがきたわよっ、税ドロルックの列には、並ばないって」

——う……ん。春花さん、僕はそこまで大胆なことはするつもりは。

斉藤がそんなことを言いかたようとした、次の瞬間、青ジャケだけじゃなくて、管制科のドブネ組み（グレーのジャケットの俗称、基本形はどぶねずみと思われる）の塊から、炎のような歓声が噴き上がった。天上からも歓声が跳ね返って斉藤に突き刺さってくる。
あちこちから手が延びてきて、ちゃんと櫛を入れた髪は揉みくちゃにされ、肩を叩かれ、次から次へと荒っぽく抱きしめられる。珍しく、櫛をいれただけじゃなくて整髪料で整えた髪も、クリーニングに出したジャケットも台無しになったが、抱擁の嵐はやむことがない。

——えっと……歓迎？　……されてる？

そう思った瞬間、斉藤の良識は吹き飛んだ。
「親愛なるチーム・タワーの諸君、落ち着きたまえ。整列するぞ」

あーあ、やっちまったよ……。

2. 跳ねっ返り組

「斉藤君というのは、噂以上の跳ねっ返りみたいですね」

——嬉しそうな響きに聞こえるのは、気のせいに違いない。

隣にすわっている『情報の岸』の声に、香山宇宙軍幕僚長代理は思った。門戸広き、安全極まりない三食年金権利付きの職業として、一時期は低所得層のヒラ隊員の軍人志願に事欠かなかった時代もあったが、機械相手とはいえ、紛れもない本当の戦争勃発後、一番最初に命を取られかねない危うい職場として、一般公募枠は露骨に閑古鳥が泣いている。徴兵制度が一般的な他県と違って、日本県はなぜか相変わらずの志願制度。騒擾状態になった直後、一時的に全17歳以上の男子に兵役義務を設けた政権は、あっという間に瓦解した。筋金入りの軍アレルギー疾患。

だから優秀な人間は基本的にマニアか世襲しか志願してこないから、万年人材不足に泣いている。一般公募の方は、閑古鳥が啼く前からと相変わらずで、ミリタリーオタクか、食い詰めた貧乏人か、適応障害で普通の教育ルートから脱落したものばかり。

県総予算における軍事費の割合が1%枠(これを恐怖の1パーと呼ぶ)から毛先でもはみ出しそうなものなら、軍事力放棄派からどつきまわされる独特な県民性。普通の軍人なら、久しぶりに配属される新人が、少しでも『マトモな常識の持ち主』であることを神に祈るものだ。だから、隣にすわっている岸二佐のところに配属が決まっている、何かと曰(いわ)く付きの斉藤歩が伝統の式服ではなく、たかが操船学校の管制科の制服を着て、しかもそっちの塊の最前列にいけしゃあしゃあと並んでいるのを見て、それで嬉しそうな声というのは、全くありえない。

（まあ、変人の最右翼の岸なら、それもあるかな）
香山は、溜息混じりに思う。本来なら、自分のように各軍幕僚長代理クラスしか、ここ――ネオ・シャンガン宇宙船操船学校、卒業式の来賓席――には座れない筈だが、さまざまな分野でのトップ技術者をデータベース化して管理するシステム、『スキルズ』の、その構成員の選定委員をしている関係で、種々の新兵教育協力機関の終了式や卒業式などには参列することは職掌上許されている。しかし、多忙をきわめる岸が代理を寄越さないのは珍しい。

――まあ、幾ら変人でも、自分が欲しがった新人の顔ぐらい見に来るということか。

香山としては残念なような、まあ岸も人間だったということなのかと、若干複雑に思う。斉藤歩そのものを、元々は、岸が欲しがっていたのは間違いない。あの前科持ちなら情報の岸が涎（よだれ）を垂らすのも無理ない話だった。
なのに、跳ねっ返りという性分がとことん抜けないガキらしく、斉藤歩が操船学校の入試に遊びにいって、あのハッカー気質全開であそこのマザーコンピューターとのトークをして帰ってくるという暴挙をやらかして、例のメグ・ウィンスレイの目に留まってしまった。

ネオ・シャンガン宇宙船操船学校の教官陣には、退役軍人が少なからずいる。一番の有名人はもちろん、エアロスペース（空宙軍、空軍と宙軍の隙間的存在）のエース・パイロットだった川瀬志保（かわせしほ）だが、メグ・ウィンスレイも元々は軍に所属し、艦隊管制技官を勤めていた人間だ。本来は岸たたき上げとして、情報街道まっしぐらな筈の斉藤の軍歴は、彼女が、是非にと望んで譲らなかった為に管制技官としての職業訓練だへと軌道修正された筈だった。軍から操船学校なんかで初期教育を受けることになる人間は、制服組への梯子は当然外されたことになる。つまり判断を下す側たる総合職ではな

く、使い捨て可の兵卒でもなく、いわゆる『職人さん』への切符を渡しているに他ならないからだ。しかし、当然、優秀な管制官を目指して自腹を切ってくる一般の学生と、適正審査後、使い捨て可では惜しいという判断で振り分けられて、命令で学校へ出向している学生ではモチベーションからして、勝負にならないのが普通だ。管制技術科に限らず、各種職業訓練提携校で、軍属が首席などというのは類を見ない。（軍に来る優秀な人材は、基本的に防衛学校にかたまってるのだから、無理もないのだが）

斉藤歩が、ネオ・シャンガン宇宙船操船学校開校以来初の４年次履修生でＣＦＤに抜擢されただけでも、管制部隊の部隊長は色めき立った。それが、二回目となる５年次履修生時のＣＦＤの時、彼ら学生にとっては補助機能、一般宇宙港の管制塔にとっては紛れもない主管制である教官陣が敷く『第二管』の介入を一度も受けずに総合演習を仕切りぬくという快挙をなし遂げ、その化け物ぶりを見せたことで、防衛学校出のＣＦＤ候補生と互角以上に渡り合える出向教育組み出の希望の星になるだろうというのが、斉藤歩の昨年までの下馬評だった。

それが、再び、岸の横槍。６年間も斉藤を諦めなかったというのは、たかが未成年犯罪者上がりの一兵卒に対して穏やかでない。往生際が悪いと評判の岸にしてもやりすぎだ。それに短い期間でない時間をかけて管制技術を磨いてきた斉藤にしても、不本意に違いない。まあ、まず間違いなく、メグ・ウィンスレイへの当てつけだろう。恐らく斉藤本人が感知するところでないゆえに、気の毒極まりない。痴話喧嘩に巻き込まれて、ビリヤードの手玉よろしく、あっちこっちにど突かれる斉藤こそ災難だ。

香山としては気の毒に思わないでもなかったのだが、幕僚長が参列するということは分かっている式典（まあ、代理だけど…）に、学校の方の制服を着て一般学生の塊の真ん前で堂々と悪びれずに落ち着いているのを見れば、軍人としては不愉快に思って当然だろう。

式が終わって、岸が遺憾の意を表すようなコメントを漏らすことを期待していた香山だったが、しかし、岸の口から漏れたのは嬉しそうな色のある短い言葉で、拍子抜けといった気分だ。
「けしからんとは、思いませんか。岸二佐」
一応、紋切り型は承知で聞いてみる。
「やつが、けしからんのは、最初からじゃないですか。いやだな、香山さん」
たとえ相手が幕僚総長であろうとも、階級名で呼ばないのは岸スタイルで徹底している。
こういう組織で自分のやり方を押し通して、それを認めさせせるまでの非難攻撃に耐えられる太い神経があれば、さぞ世の中生き易いだろう。同じことを他に人間がそうそうやれるものではないが、岸は『岸だから』という理由とも思えない理由で、誰もが破天荒を認めてしまっている。
やっかいな御仁が、やっかいな素質満点な若者を、掌中に収める。何か、有り難くない厄災の前触れというか、轟々と燃え盛っている火にロケット燃料を振りかけるような、そんな図柄が思い浮かんでしまい、香山は慌てて頭を振って妄想を振り払った。
彼の前で、こういう唐突なふるまいに出る人間は珍しくないということだろう、岸は眉毛一本余分には動かさず、接待係の教頭に促されるままに控室へと自分より先立って歩きだす。一応、自分は幕僚長の代理なのだから（階級的にも）、たかが佐階級の現場親方ならば、どうあったって自分を先に歩かせるように譲ってしかるべきなのに、全く、岸は仕方がない。本当に、岸は仕方がない。

＊　＊　＊

極東アジア国の国防総省は、政府の主要機関が集まる都市新京にある。ルナG準拠の普通の宇宙都市は、少し重力値を高めに設定している（地球に仕事で往復する人を育成しているから）ネオシャンガンから来ると、どうも足元がふわふわして、足の裏の使い心地が悪かった。どうも、足裏で構造物を踏んづけてる感覚がないのは、頼りない気がするものだ。

ここで長く住んでいる人たちの足どりは、ゼロGにいるときにやるような、接地したときに行きたい方向にキモチ強めに蹴りだして距離を稼ぎつつ移動しているというもので、なかなかスマートだ。狭い空間で無駄にぴょこぴょこ上下運動になっている自分と違って、滑るような「なめらかさ」で、その多くが着ている颯爽とした軍服によく似合っている。

民間レベルでの機材でも艦隊管制ができる技術を身につけるというのが、自分の適正から割り出された任命で、軍属でありながら民間の操船専門学校で6年間過ごしてきた。その前に通っていた防衛専門大学でも、専攻は情報技術だったから、はっきり言って軍服というものは支給はされていたけれど、碌に袖を通したこともなかった。

自分が行っていたネオ・シャンガンの操船専門学校の、管制技術科というところでは、実際の宇宙船管制室並の装備があり、それを使って操船技術部の学生たちが行う実務操船訓練に合せて、総合管制実習が行われる。そこで、名誉と重責あるチーフフライトディレクターという立場を経験してきている。

その自分に、なぜ、情報をかじったことがあるものなら誰でも耳にしたことがある、天下御免のスキルズ・リスト、トップランカー岸二佐率いる、統合幕僚監部の情報部に配属という辞令がくだったのか。考えたところで結局、よくわからない。

まあ、軍人の世界というものは、辞令にノーと言わないのが一般常識だ。情報部の中枢というものは楽しそうではあるし、元々、切ったはったよかデータを扱う方が断然嗜好に合っている。そういうわけで、この辞令に文句を言うつもりは取り敢えずないけれど、それにしても違和感は拭えない。

けれど、管制室が一望できる最後尾に立って、全ての情報が上がってくる現場にいるとき。熟考する暇もない、即座の判断を強いられるその待ったなしの緊張感。それを捌いていき、当然その指令がどういう結果をもたらすのかをダイレクトに感じることができる立場。よい結果も、悪い結果も、誰かのせいにできない。その、やりようによっては万能感を味わえるものの、やりようによっては後悔することすら憚られるほどの悲劇を招きかねないという独特の立ち位置が持つ圧倒的な重圧感。それが、どうやら自分の嗜好に馴染んで心地よかったのだ。つまり自分の性分ってやつは、考えていたより余程勤勉で真面目だということだろう。

緊張感も、高揚感も、冷静さをコントロールする一種のマゾ加減も、支配しているという陶酔となって、多分麻薬のように自分を魅了する。管制業務というものから離れるのは寂しいし、肩すかしを喰らった気もする。その一方で、学校でのごっこ遊びとはいえ、チーフフライトディレクターという万能感を味わえる場所の居心地を知ってしまった今となっては、全く畑が違うところでないと、ペーペーとしての謙虚さが保持できないような気もして、それはそれでストレスだろうという予感もあった。見方を変えれば一種の恩寵。それってだれが言ってた言葉だったろうか。

――歩ちゃんは、頭よすぎるのよねぇ。かわいそうだわぁ。

舌っ足らずな、瑠璃子さんの声が一瞬、耳に甦ってきて、苦笑する。そうか、物事には見る方向によって、全く違う色彩があるもの

なのだと教えてくれたのはあの人だった。唇に瑠璃子さんの舌の甘すぎる感触が甦ってくる。こんなところを歩いている時でも、瑠璃子さんを思い出すと、一応、枯れるには爪先すらもまだ掛かりようがない若いオスである自分が、ノウテンキにおどりだしそうになる。

（配属先に行く前に、何やってんだ……）

まぁ、直接目の前に現物がなくても、妄想だけで数回はいけるお年頃だ。この年齢独自のやっかいさで、体の一部が、ＴＰＯを全く弁えずに勝手に張り切るのは困ったものだ。物理的に出してやれば落ち着くのは分かっているが、何が悲しくて、県防衛本部への配属第一日目に、任務先にたどり着く前にトイレに駆け込まなきゃいけないのだ。

好きと言ってはいけない人ゆえに、燃え上がることも出来ず、かといって捨てることもできない思い。心が思い通りにならないのを、思い通りにしようとしなくていいことも、瑠璃子さんが教えてくれた。だからといって、それに甘えて手綱をつけずに暴走させることの見苦しさも。だから、焼いてしまえない思いはいつも澱のように、沈ませるしかなく、捌け口不在だから、たまっていく一方でしかない。この澱が貯まりきる前に、自分の殻を弾け散らしてしまう前に、煩悩が元気に健全な同年代の若い体辺りに向かってくれる幸運を祈るしかない。

一瞬、崔春花の笑顔が目の前に浮かんだ。

――まさかね。

取り急ぎ否定する。あれは、学生時代の大事な仲間だ。第一管では自分と交代でＦＤ達を総括できる立場だった。青ジャケの胸に小さな星のワッペンを付けた、自分たちの言うところの『リトルスター』。男でさえ、という言い方は時代錯誤なのかもしれないけれど、

男でさえ自分がする決断が他人の安全を左右するとなると、その重圧感に身がすくむ。あいつは、カツンカツンにとんがった言葉で、だけどそれを遥かに上回る細やかな思いやりで、ＦＤ達の弱腰を足蹴にする。

——できないなんて泣き言いう暇あったら、歌でも歌ったらどうよ。

けだし名言というか。彼女の発破は、人によっては勘弁だろうけど、自分は好きだった。待ったなしで乗船クルーの生死に関わる判断を下さなければならないという、タイトな位置に、全然怯まない度胸。打てば響くどころか、怒濤の言葉を塊でガンガン打ち返してくる。彼女豊富な語彙は、一目置くべきレベルにある。

だからこそ、余りにきつい局面で対策協議になった場合に、彼女の判断が自分の考えと一致したときは、肩からふっと力が抜けていく気がしたものだ。これで間違いない（だろう）という確信がなければ、言葉は震えて頼りなく縮こまってしまうだろう。

あのとき……。脳味噌が完全に手詰まりだった自分は、ヘッドセットマイクを下ろして、本当に歌った。ばかなことをしたものだ。

「どんな場合でも何とかする」ために自分たちがいる。自分たちがついていれば大丈夫という錯覚を、運転手さんたちに与えるためには、やせ我慢も道化も芸のうち。そんなことを教えてくれた仲間。身近な異性の女というだけで、そういう対象にできるほど、自分たちはすれた関係じゃない。というか、そういう関係に自分が心からなりたかったのだとしたら、卒業前にそりゃ、玉砕覚悟で突撃してるでしょう。何といったって、そういう方面ではやる気十分なお年頃なのだから。

飛竜もそうだけど、自分は自分の力を少しゆるめて、多少遠くても楽な労力でいける道筋を探してしまうタイプだから、ああやって、

自分の勢いで森林をなぎ倒していくような、まがりくねった道をむりやり一直線で突き進むような人間が好きみたいだ。折れた方が楽なところで折れない依怙地さが、気持ちいい。
もし暴力に訴えられて、誰かを身代わりにせよと強制されたら、多分、自分の脳味噌はあっさり誰を犠牲したら惜しくないか算段を始めるだろう。
――弱い人間が保身に突っ走るときが、一番残酷なことしやがるんだ。

（だまれ、オヤジ）

当然だけど、瑠璃子さんとオヤジは自分の頭の中で完全にセットになっている。あの人たちのことを考えている場合ではない。人間、生活環境がガラリと変わろうとしている時は、誰でも過去に今を乗り切る知恵だのヒントだのが転がっていることを、無意識のうちに望むのだろうか。

気を取り直して、もとへ。
配属初日だから、まあ、支給された軍服を軍人の常識として着てきたけれど、どうも肩幅のか弱い自分にはあんまり似合っていない気がする。制服類は男の見てくれを5割増上げてくれるという説があるが、本当のところどうなんだろう。
ゲートを一つ通るたびに、人が少なくなっていく。ゲートは少ない人材をやり繰りしている組織の定番の無人監視だ。
国防総省に務める事務官（思いっきり後衛職だな）の独身寮に越してきた日に、さまざまな官給品が寝台の上に山積みされた（寝る前に片付けろということだろう）部屋に、まだちょっと面食らっている時、いかにもお座なりという雰囲気の白衣姿のおねーさんがやってきて、「同意書は提出してるな」と、言っただけでピストル方

式の簡素な機械で皮下に打ち込んで行ったＩＤカプセルが、自分をこんなところで暢気に歩かせてくれる。

施設のゲートをくぐったときに、どこからともなくやってきて目の前にふわふわと浮かんでいる案内球。商業施設や遊園地などの娯楽施設、街などで道案内を求めたときに、いそいそと出現する機能限定型のロボット。ふだん当たり前に見慣れたそれが、国防総省本部こんなところでも使っているのかと、なんだかたまらなく可笑しくなる。半重力など、重力制御は今でもＳＦの中のおとぎ話だから、一応こんなのでも人間の技術でできているはずだけど、如何せん、機械そのものについては音痴を標榜するしかない自分には、その仕組みは到底分からない。

宇宙で人間が群れとして暮らすというのは、自分たちにとっては当たり前のはずなのに、ふとした拍子に空恐ろしくなる。何か一つ歯車が狂えば、あとかたもなく崩れて奇怪しくないのに。一世代か二世代前に地球に住んでいた子どもたちは、多分、連綿とした単細胞生物からの系譜の末尾に自分がいることに気がついて、その奇跡に感動もし、恐れも抱いただろう。

今、自分は小さい石ころを握りしめて小動物をぶん殴ることから始まった技術の系譜の末に、この巨大な街があることに、時折呆然となる。普段口にすることがない、そんな青い感嘆がふとこぼれたとき、たまたま傍らに居た、いつも笑顔のタカは、「へんなやつ」と、もう一つ深く微笑んだっけ……。

いけない、いけない、どうも思考がノスタルジアチックな方面に傾いている。未経験の事態に備えて、脳味噌が過去データを効率よく引き出せるように構えまくっているということなんだろうけど、これじゃあ、注意力まで削がれてしまう。

一つの扉の前で案内球が色を変える。「ああ、ここか」と思う前に扉が開いた。

心の中で、気合を入れて用意ドン。スタートを切った。

――Ready! Get set! Go!

と、低重力を忘れてうっかり床を蹴りすぎた。不格好に高く浮きすぎた自分は、はしゃいでいる子どものような、ほほえましいといえば言えなくもないが、はっきりいえばかなり間抜けている状態で、配属先となるオフィスに突っ込んで行った。

ともあれ、遊びと犯罪の区別がつかないほどに幼かった日にやらかした不始末で、心ならずもまっとうな生き方をしたかったら軍人になるしかないという、判断を迫られることになってしまってから何だかんだで12年目。10歳の時に逮捕されて、裁判が済んだ2年後に言い渡された量刑が、無期懲役が妥当だけれど、その能力を惜しみ、逃亡と再犯を防ぐための自律神経に直接作用する機械を体内に入れた上で、軍か、警察かで労働することもできるという選択肢を与えられた。なるほど無期懲役囚を一人抱えることは、それだけ国庫を圧迫するということだろう。

まあ、斉藤の犯した罪の種類から言って、自分でも死刑などを恐れていたとは言えないけれど、それでも生涯を刑務所暮らしなどというのはまったく嬉しくない。今同じようにどれかを選べと言われても、まあ多分、今と同じ選択をしただろう。それでも、そんな選択を、あの年の子供自身にさせるのは、やっぱり人道的にどうかと今でも思う。役立たずの警察ではなく軍を選んで、防衛大に突っ込まれたのが12歳の夏。

それから4年間防衛大学で自己流ではなく専門的にデータ蓄積型コンピュータについて学んだ。そのまま高等防衛専門大学に行くの

も、実際の現場に配属になるのもピンと来なかったけれど、如何せん、自分には前科がある。このまま軍が自分を手放すつもりがないなら、長いものに巻かれてしまう方が楽だ。だけど、ずっとこの組織の空気だけを吸ってあり続けたくはなかった。ノンキャリアとして、外の教育機関の空気を吸いにいけるかどうか。そんな、単純な一か八かの賭け。そうして得たしがらみというものがない学生時代は、まぎれもなく自分にとっての宝物だ。

自分が、この組織から給料をもらうようになって随分経つが、実際には何もしていない。税金泥棒、その通りです。弁解もできないし、する気もない。だから、この一蹴りが、本当の意味での社会人の第一歩だった。

3．銀砂万頃（前書き）

万頃（ばんけい）

頃は中国で使われていた地積の単位。１００畝のこと。
水面や地面が、広々と展開している様子を表す。

3．銀砂万頃

昔のいわゆるＳＦアニメーションを見ていると、話は上手く出来ていると思うものの、設定や道具だてが随分陳腐に感じることが多く、高柳優美（たかやなぎゆうび）は、よくストーリーとは別の次元で受けている。

実際のところ、見掛けは単純に服だけれど、機能的には小さな宇宙船そのものと言える気密服を着て母船から出るのは、一般の人が考えるより遥かに面倒なものだ。

一回のミッションが実質六、七時間として、その準備には二時間近くを必要とする。まず、酸素マスクを装着し、１００％濃度のまじりっけなし酸素で呼吸している間に、１気圧から０．７気圧まで減圧をする。Ｐｒｅ－ｂｒｅａｔｈｅ（プレブリーズ）と呼ばれる第一段階だ。

それから第二段階として、約十分かけて、体内の窒素を完全に追い出す。宇宙服内の気圧は０．３気圧。血管に窒素が溶け込んでいる状態で、何の配慮もせずに一気に減圧すると、窒素が気泡になって血管を詰まらせる。

かつてその海に潜るダイバーというジャンルの人たちが発見したのと同じ、減圧症という状態になり、下手を打つと命に関わる深刻なダメージを人体にもたらす。毛細血管の隅の隅に至るまで、窒素を抜くのだが、機械じゃあるまいし、一発交換などという乱暴なことはできない。代謝で自然に排出されるのを待つしかないのだ。

いかにも若者といった張りのある肉体が五つほど、フィットネス・ジムにあるのと同じごく普通のエアロバイクをこいでいる。どの体もそれぞれに鍛え抜かれていることが、汗が浮きでた薄手のシャツを通してでも窺（うかが）える。宇宙生まれの宇宙育ちである、ごく一般的に生い立ってきた彼らは、もちろん、だれ一人として本物の海を見たことはないが、微細重力下作業従事者というものは、紛れもなくダ

イバーの末裔（すえ）なのだ。

果敢にもその生物を拒絶する海に泳ぎだすべく準備をしている彼らの体は、継続して課される過酷といえる訓練によって絞り込んまれ、一様に、まるで地球重力圏で生活している人間のように見事に引き締まっている。人間の体というものは低重力においては当たり前に膨らみがちになるものだが、この男たちは肥満という言葉からは遠い場所に住んでいる。この男たちの中に、高柳優美はいる。

本人にしては不本意な、可愛いと女性陣に評される童顔が酸素マスクで隠れていると、実際のところは逞しい男であるという事実が、男たちの中でも長身の部類に入る高柳を彩っていた。

人間が宇宙に初めて出た当時は、暢気なことに宇宙船（多分スペース・シャトル・オービターだったはず）全体を減圧して丸一日かけて窒素を追い出してから、純酸素で満たされた宇宙服を着込み、そこで45分から75分も呼吸して窒素を追い出して、徐ろにどっこいしょとエアロックに入っていたようだが、今は違う。

代謝速度を上げるために、プレブリーズの間に、純酸素が出てくるマスクを着用してエアロバイクをこがされるのだ。まあ、自転車こぎそのものは10分少々の時間だが、命の安全がかかっているのだから、窒素が残らないようにがんばって手抜きをせずにペダルを踏む。80分の純酸素呼吸期間をおいて、ようやく0．7気圧まで減圧されたエアロックに入る。

ここでようやく宇宙服に入る。完全に密閉して宇宙服内を純酸素で満たし、宇宙服内を0．3気圧、エアロックそのものを0．03気圧まで減圧する。

それから、ようやくエアロック内の残りの空気を放出して完全に宇宙空間と等質にして、初めて自分たちは小型宇宙船として船外に出るのだ。

ぼうっと待つことが苦痛な人間には、アストロノウツは務まらな

い。とにかく、どこまでも宇宙空間に馴染むことができない人間の体を、無理くそ宇宙に置こうと思えば、何かと省く事のできない厄介な手順と付き合わなければならない。

本格的なミッションの場合は、このプレブリーズの間に、任務をおさらいしたりする時間として使う場合も多いが、ただ、体が宇宙で活動するという感覚を磨くための訓練中は、別に船外に特別な何かをすることもない。

酸素マスクと一体になっているゴーグル型の液晶画面に、古典アニメを再生させながらエアロバイクのペダルを踏んでいた高柳は、Tシャツ一枚で操船司令室のようなところにいた少年が、指令を受けた勢いで、めちゃくちゃに薄い宇宙服をさっと自力で着込み、かぽっとヘルメットを付けるが早いか宇宙空間に飛び出していったところで、ぷっと小さく噴き出した。

彼は何事もなかったかのように、光線銃みたいなもので悪役と闘い始めたけれど、同じことをやったら間違いなくお陀仏だ。宇宙服の生地の開発は、この時代の人たちが想定していたほど進んではいない。「スペースジャケット素材」という、非熱電導性、気密性に優れた生地のお陰で、短時間であれば殆ど普通の作業服と変わらない形状で活動はできるが、さすがのスペースジャケット生地も、零気圧の中で爆発したがる1気圧をなだめられるほどの強度はない。1気圧に耐えられる素材は、やはり現在でも金属の右に出るものはないのだ。だから、いかな短時間な船外活動でも、中にはいるのが自分たち人間である以上は大急ぎに急ぎまくって1時間半は必要なのだ。

思考でき、繊細な作業もできる器用さをもったもので、この時間を必要としないのは、機械のみだ。

あんなふうに、宇宙が手軽にいける場所だったら、どんなに楽だろうかと高柳は思う。所定時間エアロバイクをこいでいる間、ただ無為に浸っていることも多いけれど、睡眠は足りていて疲れてもい

なかったし、先週から空き時間にぶっ続けで見ているシリーズもののアニメの続きが気になったので、仮想大画面にもなるゴーグル内部に再生させていた。Ｒ－１８規制に引っかからないメディアの再生は、許可されているので新聞や雑誌を投影させている人間も多いが、如何せん、文字を読むことに対する苦手意識が強い高柳が、自らそんなことを好んですることは普通にない。

画面の中で、恋人だったはずの女が銃口を青年に向ける。ここでも一発苦笑。銃火器の類も、宇宙では滅多にみかけない。自分たちを包んでくれている人工物は、堅牢だけれども、やはり壊れることもあり、かすり傷であってもその容れ物が瑕疵を負おうものなら、そいつがもたらす惨憺たる結果は明らかである。そんなことで、一般人はともかく、軍用までも、こと火薬を使った武器の類は手放して久しい。

地球は今や、みんなの大切にして、大切にして、大切にしなければならない、人命より大事な宝物だから、あそこの上での火薬の使用は真っ先に規制された。もちろん、銃火器とは相性が抜群の環境だから、あそこがキナ臭くなるときは、どうしてもそういうものがどこからともなく復権するから、その意味で廃絶されたわけではないが、まあ、一般的ではないことは確かだ。

一方、人口密度がみっちり高い、宇宙植民用建造物では、そいつらは見事に廃絶されている。火薬を使った銃は、今や博物館の中でしか見ることはできず、実際にも、派手な爆発は火力が必要な太陽系天体のテラフォーミング現場でしかお目にかかることはない。男という生き物の遺伝子に、そういう野蛮でも組み込まれているのか、レトロな映画に溢れている爆発の爽快感（不謹慎だけど）は、マニア達が存在するほどに魅惑的だ。特に高柳のように生まれに恵まれず、学びという子供がもつ筈の権利を行使することなく食いっぱぐ

れた挙げ句に志願して兵隊になってるような連中には、同好の士も多く、こんなときに見るべき映画に困ることはない。
もっぱら官は生体細胞だけ過熱する熱光線銃（ヒートレイガン）を出力調整して使い、(戦意喪失から、生命剥奪までは、その場その場で)、民では、それに加えて、刃物や鈍器といった直接のど突き合いの武器が、完全復権している。実際、軍籍の末尾を穢している高柳にしても、真面目を追求したシリアスなアニメの銃撃シーンよりも、むしろ滑稽度の高いニンジャものなんかの武器の方が、ずっと馴染みが深い。
人類が宇宙に本格的に移転して、小競り合いは当然、人間の集団のこととて避けようもないが、大がかりな国対国の戦争は棚上げされているのが実情だ。宇宙という人間が住むのに徹底して向かない空間に立ち向かうには、国家といえども対立よりも協調の方が有意義なのだ。
ただ一つ、地球のでかすぎる衛星、月のルナ自治区を除いて。

ルナ自治区は、現在の人類の生息圏において、唯一大っぴらなドンパチが繰り広げられている紛争地区だ。月というのは、恐ろしく複雑なことになっている。やはり、生き物の本能として、大地と呼べる星に住みたいというのは、確かな欲求としてあるらしく、このまま人類が野放しに地球（テラ）に寄生し続けると、地球と共倒れになるという事実が紛れもない現実問題として突きつけられたとき、人類というものの大多数を地球から駆除するべきコンセンサスが出来上がった。
科学者や思想家のエリート集団が、そうでなくては、地球という宿主の死と共に、人類というものは滅んでいくしかないと決めつけて、拙い、不十分だった技術を総動員してでも、一刻も早く、宇宙に建造物を造りそこに移住するという巨大プロジェクトを立ち上げ

た。結局、人類初の試みになった超国家単位でなし遂げた仕事成果として作られた、夥（おびただ）しい数の巨大で、未熟な宇宙植民人工衛星（スペースコロニー）。国連の常任理事国が中心になり、近隣の国家を乱暴に纏め上げてグループにして、そこに新しい国名を課し、その名の下に作られていったそれらは、名前をきめる手間さえ惜しまれて、乱暴に付けられた通し番号で呼ばれている。

　現在多くの人々が住んでいる、安定した技術をもって作られているコロニーは、ネームド（名前をもった）と呼ばれ、人類が持続して住み続けることが可能だろうという目算が立っている。ナンバーズ（番付き）と呼ばれるそれらのコロニーは、過渡期にのみ存在する幻のようなものになる筈だったのが、次々に建造される快適なネームド・コロニーに移住できるだけの資力を持たない貧困層が、継続した居住を余儀なくされていて、劣化とスラム化という、器と中身の双方の腐敗で苦しんでいる。

　そのときに、単民族国家が理想の在り方であるかのように、際限なく続く紛争という名の戦争を続けながら細分化しつつあった国家というものが、乱暴に国家という形にグループ分けされたものが現在の国である。アメリカは、カナダを飲み込んで北アメリカ国というものになり、南米諸国もそのままがっつりと一まとめにされてしまった。ヨーロッパ言わずもがなで、ＥＵを中心とした塊と、ロシアを中心にした塊と二つの国家になった。アフリカは然りでアフリカとして、人口が多すぎて、どことも合せることが不可能だったインド、そして中国は、逆に切り分けられてグループわけされた。といっても、旧国家は県という単位で健在で、逆に国家の中でも自治が完全に認められている場合が多い。

　高柳が生まれながらに組み込まれている極東アジア国という国は、日本、台湾、韓国にＡＳＥＡＮという名前だったアジア諸国、それから、東端に位置していた中国の一部を飲み込んで成立している。政治の力で母語を駆逐することは不可能だから、もちろん、他言語

はそのまま生き残り、同じ国民でも県が違えば言葉はまず違うと思って間違いない。だから、同じ国に住んでいても、違う県の人たちとは、主にコミュニケーションのための簡易言語である、旧米語をベースにした、ＧＣＬ——Ｇｌｏｂａｌ　Ｃｏｍｍｕｎｉｃａｔｉｏｎ　Ｌａｎｇｕａｇｅのお世話になることになる。国連の推奨する共通語だから、語彙数の少なさが致命的なＧＣＬだって、全く意志疎通ができないよかマシである。

話がルナから逸れた。元に戻そう。月、ルナ自治区は作りも、運営も、そして在り方も人も混沌としている。曲がりなりにも残っていた緑と水色という恵みの自然と、浸食し容赦なくそれらを蝕んでいく砂漠化の象徴でなる赤褐色。その人間が触媒になって増殖していた赤い不毛の色の印象にこそ、ルナの銀灰色の砂礫の大地は似ていた。そこにおいての自然故に、保護されるべき環境だという感慨を、人類はその大地に見出さなかった。

大気の保護がない、荒れ果てた印象の月。しかし、そこには紛れもなく複数の国家が寄り掛かれるだけの表面積だけはあった。

月は常に同じ面を地球に向けている。つまり、超絶ゆっくりな、地球時間にして２９．５日にも及ぶゆっくりとした月の自転周期と、地球の公転周期が完全に一致しているから起こる現象であるだけで、別に自転していないわけではない。大気と、水という温度変化を緩和してくれる恵みに徹底的に見放された月は、約地球日にして１５日間の昼に赤道付近で摂氏１１０度に達し（地球では水が液体でいられる最高温度よりも更に高い）、同じだけ続く夜の間は摂氏マイナス１７０度にもなる。宇宙において物質は往々にしてまばらだが、それでも飛来物がぶつかって来ることは珍しくない。どんな小さな飛来物も、月とぶつかるときは燃え尽きたり減速したりすることなく、突っ込んで来る。並の構造物では、一時的には凌げても長期的に太刀打ちできない。そんなこんなで、長期的に人が住むことは不

可能だという予測の上に、国連常任理事国会議は月を果物でも切り分けるように切り分けて、丁度ミカンの一房一房のような形のそれぞれを、その人口比において度数をきめて、国連加盟国の所有とした。

　水が存在しない月に鉱脈はないが、チタンを初めとした金属資源は豊富であり、片や人類の新たなる棲息地であるコロニーは、作り上げるや容赦なく劣化していく運命にある。

　だから巨大人造物を、次々に新しく建造しては、古いものを捨てていかなければならない予測があったことから、その豊富な金属資源は平等に分け合おうという理想の下にその境界線は引かれたと言える。しかも月の低重力は、その質量圏から金属を搬出するのに必要な速度は2．387km／s。地球で採集できる金属資源を宇宙に打ち上げるよりも遥かにローコストで済む。みんなの金属鉱山として、仲よく使っていくはずだった月。

　しかし、金属採集が本格的に始まる前に、本格的な調査が行われていく間に、新しい可能性が開けていった。現在、マントル対流もなく完全に地質学的に死んでいる月だが、太古において、火山活動があったため、そののっぺりとした砂（レゴリス）に覆われた地表の下に、夥しい溶岩洞が存在していたのだ。月のコアは地球と同じように、固まりきる前という段階であることを示すように液体なのだが、地殻は約60キロの厚さがある。ついでに、月の砂（レゴリス）の成分の約半分は酸素なのだ。

　減速せずに突っ込んで来る飛来物をブロックできる物質はいまだ作れていないが、地表を天然のシェルターにして、溶岩洞を拡張してレゴリス由来の酸素を充填して、そこに人間の吐き出す二酸化炭素を酸素に還元してくれる光合成できるシステムを導入できれば、ローコストで居住可能な巨大空間が確保できることになる。

　国連は、平等に人口比で表面積を分けたが、地下溶岩洞の比率は、

全く平等ではなかった。宇宙植民衛星の建造を牽引した北アメリカ国の予測居住可能空間は、人口一人当たりの面積で最低から数えて３番目。ロシアが中心になった北欧連合国は真ん中辺。最高面積を有することになったのが、もと中国が中心になっている中央アジア国であり、次に多くを保有できたのがアフリカ国。

ルナの国連調査団を指揮していたアフリカ国出身のケネス・バンダ博士が、その地下溶岩洞の存在を秘匿して自国に有利になるよう細工して、月の領有地域を決めたのだろうと主張して、北アメリカと北欧連合が、現在の国境を無効とする異議申し立てを国連常任理事国会議に提出した。その直後に、バンダ博士が暗殺されるという事件が起こり、公正な審判に異議を唱える2国こそが、地球時代でその国力の上にあぐらをかいている横暴だとして、異議申し立てそのものが無効であるという提訴を中央アジアとアフリカが申立てるという事態になった。

そうやって所有権で国家がまだのんびりもめている最中にも、資力のある個人がどんどん居住可能に改造される端から買い占めて、そこにアパートメントをばかすか建てて高額で売りに出し、地に足をつけて住みたいという欲求をもつ個人が、その恐ろしく高額なアパートメントに飛びつき、土地投機家は更に高額な資力を元手に空間を買い占めていくという、持っているもの勝ち、早い者勝ちという有り様になった。

掘削機などというものは、当然、人類は持っていたし、６０キロというのは、そこそこの厚みであるから、月に入植したもの達が旗を振るようにして、月地下溶岩洞は横と、それから下に掘り広げられていった。掘り出したものは抽出して種類ごとの金属塊にすれば、次々と劣化に負けない勢いで建造しなければならない新しい宇宙植民衛星を作る原料となる。

やがて、地下に居住していった金持ち達は、自分たちは月(ルナ)の居住権を持つものが、自分たちが掘削を行って抽出した金属に関しては、

その所有権は自分たちにあり、それらを国家が必要とするときは、自分たちから購入すべきであるという主張をしだした。

資力があるということは、その原資が枯れさえしなければ反則的なまでに強い。取り締まり方を買収するのにも、火器をかき集めるのも、それを使いこなす人間を集めるのも思いのままだ。月はその豊富な資源を武器に、その処女地を一番乗りで穢したもの達の横暴を許容した。

月は、持てるもの、力の強いもの、貪欲なもの、他者を出し抜くものの天国になった。地上からは監督、制御不可能なまま、地下の空間は無秩序に拡大していき、出会い頭で空間が繋がった場所では、縄張り主張争いが絶えず、しかし、ひとたび対月外となると、特に資力が傑出した個人が音頭を取る形で作り上げた『自治組合』が固く結束してその自治を主張し、物事をごり押ししていくというあらゆる意味で力が全てである場所になっていった。『パワー　イズ　パワー』、力は力である。今の月の状態を表す言葉として、よく知られたものだ。

人々が地下に潜って生活するルナ自治区は、そうだからこそ、表面は相変わらず静かに冷たく澄んでいる。その静謐な砂の海(レゴリス)の水面下で、どれほど悲惨な紛争が繰り広げられていようと、月面地図上にだけ存在するまっすぐな国境線をめぐって、どれほど堂々巡りの議論に無為の時間が費やされようと、そんなことは素知らぬ素振りで、ただ冴々と輝いている。

ごくごく近寄れば、掘削した資源を輸出するためのコンテナを打ち上げるためのマスドライバーが少なくない数散見され、そこに寄り添うようにして存在するドーム状の施設が見えるだろう。月クレーターによって、もともとが吹き出物だらけの顔みたいな地表をさらにでこぼこにして張り付いているこの半球型の建造物は、カオスな月地下世界への出入り口であり、地下から運び出される土塊(つちくれ)から金属を抽出する施設でもある。インフレータブル・ドームと呼ばれるこれらは、空気圧で膨らんでいるだけの、強度的にはそれほど強

いとは言えない設備だが、言ってみれば宇宙船月号のエアロックに相当する役割を果たしているので、衝突コースで突き進んでくる飛来物が観測されると、地下都市はそのインフレータブルへのハッチを閉じることで、安全に引きこもれるようになっている。つまり、月面にある全ての施設は、飛来物が運悪く直撃コースでやってきたら、基本的には諦めて人間だけが避難すればいいという、大胆なコンセプトで貫かれている。

高柳が減圧症で殉職しないように、必死こいてエアロバイクを漕いでいるのは、ルナ自治区の極東アジア県領の地表に張り付いている極東アジア国軍保有のインフレータブル・ドーム内にある。このドームは、コンテナを地球重力圏から打ち上げるマスドライバー・システムの運営・管理を行っている。貴重な地球産の物資と、必要な金属資源がどのようなシステムと理論で交換されているかなんてことは、一兵卒でしかない高柳には知るよしもないが、少なくとも運用されている人工物にはメンテナンスが必要だということぐらいは分かっている。

そろそろ息が上がってくる時間だが、思い切り濃い——供給濃度は１００％だから——酸素が、心地よく体にめぐっていくために、全体としてどっぷりとした疲労感はやってこない。逆にアイドリングすることで、ゆっくりと覚醒していくような気分だ。

と、画面の端に携帯端末にリンクしているアイコンが点灯して、メールの受信を知らせてきた。職務に関係ない私信であることは、緑色になっているアイコンが示していたので、別に急いで開封する必要もなかった。けれど徐々に短くなっていくことで、自転車こぎ終了時間までを表示してくれるゲージの赤バーは、まだそこそこの長さを残していた。

高柳はメッセージを読むことにして、アイコンを注視。それから瞬きを３回規則正しくした。この瞬きのパターンで実行とキャンセ

ルを確実に行うには、そこそこの訓練と慣れがいる。これができないと、金魚鉢（ヘルメット）の内側に投影されるさまざまな指示や、迷ったときのアンチョコの照会に手間取ることになる。しっかり注視が認識されてアイコンが点滅開始するまで間を『瞬きしないこと』と、必要でないときアイコンを両目で『まじまじと見ないこと』が無意識でできるようになるまで、不用意に開いてしまうさまざまな画面に悩まされることになる。

　普通のこういったゴーグル型の投影装置の操作は、リモコンや本体についたボタンでするものなのだが、誰もが見事に不器用になる宇宙作業服の手袋越しに、手で小さいボタンを押すなんていう細かい作業ができる訳がない。

　もともと、注視型のアイコン操作は、肢体不自由者のために開発されたやり方なので、慣れさえすれば、それほど努力が必要な動作ではない。同じ手順を繰り返すというのは、素晴らしい。困難だったことが無意識に落ち着くというのが、つまりは熟練するということだ。訓練を始めたばかりのころ、ひどく厄介で面倒なさまざまだった手順が、考えないでもできるようになるまで繰り返す。ひとたび何か起こったとき、下手な考えを打つ間に、体が勝手に危険に対処できるようになることは、地球大気圏外では生死分岐点において、生存への道幅を広げ、死へのそいつを隘路（あいろ）となせるということだ。

　振り分け作業や、不要になったメールをまめに消す手間を惜しんでしまう高柳のメールボックスに表示される未読メールの件数はものすごいが、新着のメールは一番上に積まれていくから、別に探すのに困ることでもない。今回、一番上にすわりこんでいたメールの発信人をみて、口の端がついほほえんだ。

——歩（あゆみ）ちゃんだ。何だろ。

　高柳の操船学校の同期生である斉藤歩（さいとうあゆむ）は、自分と同じ軍属として

出向して学んでいた口で、給料をもらいながら、就職を視野に入れないで済むという優雅な学生生活を満喫していた仲間だ。

頭の作りという点で、自分と斉藤はいわゆる対極にある。十歳そこそこでスカウトされたかなんだかで軍に取り込まれて、勢いで既に防衛大学を一回さらっとこなしてきている才人である斉藤と、初等教育も満足に受けていない自分。戦闘要員以外であれば、訓練は民間委託が一般的な極東アジア国軍で、少なくない数がいる操船学校出向組みの中で、よりによって飛び切りの明晰さを誇る頭脳の持ち主と、これといって取り柄がない自分が何でウマが合ったのか、未だに頭の悪さには自信がある高柳にはわからない。

ついでに、忘却力には自信がある高柳には、そもそもの馴れ初めすら思い出せない。本当に、いつのまにか気付いたら隣にいることが当たり前になっていた。簡単であることはお墨付きのＧＣＬでさえ綴りを間違える高柳がそこそこの成績を維持できていたのは、一重にも、二重にも、最初から最後まで斉藤の力に寄り掛かって可能だったことだけは疑い得ない。だけど、向うがボスで、こっちがへつらうという関係では決してなかった。いつだって、やつがそばにいることは普通だったし、当たり前に心地いいことだった。

――たぶん月にいく。

――着いたら連絡する。

――飲みに行こうな。

三行だけの短い手紙。同じ軍属であるから、斉藤は添付ファイル付きの私信はシステムで振り分けられて、コンパートメント（独身寮の自室）の端末に問答無用で転送されてしまうことを知っている。ついでに、高柳が寝袋一つでどこででも野宿する性癖があって、気が向かなければ部屋に帰らない人間であることもよく知っている。だから斉藤は文字が苦手な自分にも、安直にムービーメールを送り

つけてくることはない。
その代わり読解に熟練がいる漢字混じりの日本語も使ってこない。普通の人間なら、母語が同じ友人への私信にＧＣＬを使うなんて野暮はしないだろう。だけどそのぶっきらぼうなＧＣＬが、何よりも自分に配慮してくれている証だ。
高柳にとって、斉藤への返信はだれに書くのより楽だ。何の配慮も感じられない単語を並べただけの手紙でも、絶対に気持ちまで汲み取ってくれる。返信のアイコンに視線を固定して、ロックしたところで瞬きクリック。

――読んだ。
――楽しみ。
――いつぐらい？

予測変換がきっと正しく綴ってくれているだろう。高柳は、アールとイー、それからダブリュを瞬きで選んだだけで出来上がった短い手紙を速攻で返信した。
『いつ』というのは大切だ。来訪を予告するというこの種の手紙に、「いつぐらいに」というのがないというのは、全く不完全だ。どの位の時間を気長にまったらいいのか、全く親切すぎて笑えてくる。頭が回りすぎて、ほどよく間抜けるのが斉藤という男の愛嬌だ。
もちろん、漫然と待つことができないで、宇宙飛行士なんかやってられないのを知っていて手抜きをしたのかもしれないし、こっちに当然の疑問を与えることで、返信しようというモチベーション喚起機能を持たせてくれたのかもしれない。
嫌いな作文作業をやっつけた高柳がアニメの続きに意識を戻そうとすると、もう一度着信アイコンが点滅した。

——歩の返信にしちゃ、早すぎるよなぁ。

発信人の欄には、霧島飛竜という、斉藤に対するのと同じぐらい親しんだ、もう一つの名前が煌めいていた。

4．岸的七宝（前書き）

七宝　「しちほう」あるいは「しっぽう」。
「七種（ななくさ）の宝」「七珍（しっちん）」ということも。

仏様がこれらを用いてお浄土作られたとされる、有り難いお宝。

浄土宗の聖典である『無量寿経（むりょうじゅきょう）』では、
金、銀、瑠璃、玻璃（はり）、シャコ、珊瑚（さんご）、瑪瑙（めのう）。

法華経では、玻璃（ガラス）と珊瑚が落っこちて、真珠とマイ瑰（まいかい）が参入している。シャコは貝。聞き慣れない、マイ瑰（まいかい）とは、野バラやハイビスカスを指すこともあるが、この場合は、宝として中国で珍重された赤い石のこと。ルビーではありませんので、念の為。

工芸手法の一つであるクロワゾネ　（ｃｌｏｉｓｏｎｎｅ）の一種である七宝（しっぽう）は、ここでいう七宝には含まれないので、もう一つだけ、念の為。

4．岸的七宝

「へぃ、らっしゃい〜」

案内球に導かれてたどり着いた部屋に、斉藤歩が不格好に突っ込んで行った途端のことだった。場違いに甲高い、だけど紛れもなく男声の持ち物とわかる種類の声が、寿司バーの職人さんかという勢いで、彼の耳に飛び込んできた。

ピンクのTシャツが、三段腹に醜く食い込んでいる小柄な男が、ひらひらと手を振っていた。低重力に、不摂生を重ね、美容に拘らないという三拍子が揃うと、宇宙ではものの見事に膨らんでしまうから、まあ、ありがちな体型ではあるのだが、極東アジア国日本県の情報本部（自分が配属されたのは、そういう名前だった）の軍人というには、予想外にもほどがある外見だ。そのピンクの胸には、漢字で『月に願いを』という文字がクッキリと浮いている。その字ときたら、どう見ても、無地のシャツに油性マジックで手書きしたとしか思えない。

——えっと、ここはどこだったっけ。

軍というのは、えっと、軍服を着た人間がうぞうぞいるはずのところだ。よしんば、職業上の必要で私服がいたとしても、ピンクのTシャツというのは、いくらなんでも有り得ない。ここは異世界であるという生理的な直感が斉藤を襲った。

一応、腐っても軍人。斉藤はとりあえず、背中に一本棒を差し込んだような見事な起立姿勢をとって敬礼をしておくことにした。

「斉藤歩、本日をもって着任しました。」

ぶーっと下品な音を立てて、ピンクのTシャツ男が噴き出した。
「ほっ、本日をもってだって。可愛い、可愛い、めっちゃくちゃ、初々し……」
足音に促されて視線をやると、女か男かちょっと判断に迷う容貌をした人物が、Tシャツ男にツカツカと歩み寄ってくるところだった。かの人物は、手に持っていたファイルの束でTシャツ男の頭を勢いよく叩いた。
「だまれ、新人が驚くだろ」
言葉使いこそオトコマエだが、その声は紛れもなく女性のものだ。
「はい、こんにちは、斉藤君。初めまして、楽しみにしてたのよ。伏魔殿にようこそ」

——伏魔殿?

「るりちゃん、そのおぞましげな匂いがする単語持ち出す方が、新人イジメだ〜」
ルリちゃんという響きが、斉藤の心臓を掴んだ。この人は、瑠璃子さんと同じ名前なのかなと少しだけ、斉藤の心臓が跳ねた。

「うちは、本来マトモな最先端をいかなきゃいけない部署なのに、シャコみたいに怪しいというか、奇怪しいおじさんがいるから、そんな呼ばれ方しちゃうんじゃないの」
女性が抗議口調というよりは、面白がっているような調子で言う。るりときて、しゃこだと、七宝シリーズかなと、斉藤は一瞬で思い当たる。
「……じゃあ、岸二佐は、ゴールドになるのかな……」
ぽっつりと、つい、口からこぼれる。シャコと呼ばれた男から「るり」と呼ばれた中性的な外見の女性が、ちょっと目を丸くする。少しの間、じっと斉藤の表情を見定める風になる。四つの瞳に凝視された方の斉藤は、仕方なしに微笑んだ。困ったときは、取りあえ

ず、穏やかな微笑みで穏やかそうにしておくのをホームポジションにすることにしている。そんなささいなことで、結構、対人関係などというものはまろやかになるのだということを、いつも笑顔を絶やさない友人に学んだ。だから、これは一つの財産。曖昧で中途半端な、いわゆる卑屈が滲む笑顔との境界が微妙なので、これはこれで訓練がいるのだけれど、などと、斉藤は思う。

「ふぅ……ん。親父とシャコがずっと目をつけてただけあるわ」
少し長い観察のあとで、るりと呼ばれた女性が破顔した。
「自己紹介が遅れたわ。私は、池内雅（いけうちみやび）よ。これでも一応情報部だから、コードネーム（秘匿名）があるの。由来はお祭しの通りの七宝シリーズよ。この部屋から一歩でも出たら、池内三佐と呼んでもらいたいものだけど、ここではルリと呼んでもらって構わないわ。
「つまりＨＵＭＩＮＴ（ヒューミント）の元締めだって、ルリちゃんは。取りあえずしばらくは君の直接上になるみたいだから、ちゃんとコミュとっときや。ほんと、僕がずっと欲しいってお願いしてたのに、金玉親父は君をうちら電波部にはくれないそうなんだって。まったく酷いとおもうよね。僕としてはめっちゃくちゃ不本意なわけ」
「シャコ、親父からちゃんと辞令として言われる前に、あんたがそれ言ったら不味いでしょ。第一、本当に、うちに貰えるかどうかは、今日、親父がちゃんと斉藤君に言うまで、１００％の確率とは言えないでしょ」
「まあ、斉藤君の場合は、五、六年かけてうちの全部の班を回る可能性もあるからね。私等は、自己紹介だけでやめとかない？」
「ま、そだね」
ピンクのＴシャツ男が、肩をひょいとすくめる。
「んじゃ、こんど僕。電波部統括本部員で、いわゆる金玉チーム」
「チーム岸と言いましょうよ。外部の人間がどう呼ぼうと、ここだけでもせめて」

金玉という響きが気に入らないのか、ルリこと池内三佐が口を挟む。

「はいはい、人がしゃべってるの邪魔しないの。一応、HUMINTの親玉なんだからさ、そういうコミュの機微には敏感になってよ」

男が文句を言う。分かりましたというようにルリがあごで頷いた。

「じゃ、気を取り直して。僕はチーム岸、つまり別名情報管制室に出向しているんだ。一応、採用は警察官だから軍人としての階級はないよ。一応、地区警察本部長クラスぐらいのはずなんだけど、こご長いからね、もう向うに帰っても机用意して貰えるかわからないや」

ピンクのTシャツなどという奇矯な服装の所為で年齢不詳に見えるが、そう言われてみれば、白髪まじり始めた頭のてっぺんは、ちっとだけ寂しくなって地肌が透けて見える。相応の年ということだろう、と、斉藤は当たりを付けた。斉藤は心の中で、年長者に対する敬意を弁えた態度で接するべきだろうときめた。向うがどれほど気さくな態度できても、自分は同輩に対する態度でいくべきではないだろう。多分、こういうささいなことで、人は自分を判断する。そのささいな積み重ねが、結局は流れをつくるのだ。

情報統括本部のチーム岸といったら、まあ、知る人ぞ知るというやつだ。斉藤にしてもそのメンバーをあなどる気などそもそもないが、それにしても、韜晦してるというにしても限度というものはありそうなものだ。このピンク男が警察官とは、軍人であるということよりも、もっと驚いた方がいいことかもしれない。

斉藤歩が配属された、統合幕僚部統合情報部というのは、日本県が地球にまだ独立した国として地球上にあったころ設立されて以来の伝統を汲む特別機関である。便宜上、本部を軍に置くが（ここに帰着するまでにも、いろいろとすったもんだがあったようだ）内閣

府、外交府、警察庁、公安調査庁、そして我等が県軍の中でも、陸・海・空・宙の各情報部から流れ込む全ての情報が集積される場所となっている。

それ以外にも、マスコミや知識人や研究者などからもたらされる情報や、外国から公式、非公式に流れてくる情報なども貪欲にかきあつめ、取りあえず集積させる。そして、それらを仕分けし、篩(ふるい)にかけて川底の砂の中に本の僅か含まれる砂金をすくい上げるような気の遠くなる作業の末に絞り込まれた一級の情報に文脈を与え、国を運営していく立場の政治家や官僚に提供するところまでを職分とする場所である。

インテリジェンスという言葉は、実際のところ捉えどころがない。ただ、物凄く乱暴に言ってしまえば、政治や治安、経済や軍事上の目的などのために、相手国や対象組織の情報を収集する活動のことで、諜報(ちょうほう)活動ともいう。一般にはスパイという言葉が耳慣れているが、スパイというのはエスピオナージ(Ｅｓｐｉｏｎａｇｅ)が語源であり、主に非合法な手段をもってする諜報活動に対して使われる言葉だ。もちろん、国が仕切っていることが全てリーガル(合法的)であるというわけでもないので、スパイ活動とインテリジェンスが無関係とは言わないが、主権国家という自負をもった国が表立ってスパイ活動をしていると言えるわけもない。

インテリジェンスというものは、情報そのものを、積極的に収集し、分析・評価し、使える資料として纏め上げることを以て本分とする。非合法、または非合法に限りなく近い手段で持ってかき集められた、極秘の情報だけがあっても、今まさに起こっている事象が分析できるわけもない。新聞や雑誌、テレビから始まって、専門家しか読まない論文集まで、とてつもなく多く巷に溢れ返っている情報も、決して蔑ろにはできない。

直接、現地に足を運び、その当事者に直接接し、表向きに発する

意見だけでなく、口にし難い秘められた真相までを追い詰める、ハンターのような仕事に直接携わるものをＨｕｍａｎ　Ｉｎｔｅｌｌｉｇｅｎｃｅ――ＨＵＭＩＮＴ（ヒューミント）と呼ぶ。娯楽映画なんかでよく目にする、女スパイをたらしこんだり、男心につけ入って性も単なる手段にしてかき集めるやり方を、一般にハニートラップと呼んだりするが、俳優のように別にイケてる男女でなくても、健康な成人男女なら、秘密を手っとり早く得るために使おうと思えば簡単に使えるものだ。もちろん、肌を直接摺り合わせて生まれる親密感は、情報への垣根を低くするかもしれないが、余程、精神的にタフでない限り、湧いてしまう情に翻弄されてしまいがちなのが俗人というものだ。

　いわゆるミイラ採りがミイラは勘弁してほしい健全な諜報活動従事者なら、そんなものに近寄るよりは、同性の要人を食事やプレゼントで取り込んだり、そういうぐちゃぐちゃな人間関係で人とたらしあいをするのが好きな人間を爆弾にして、あてがったりする方を選ぶものだ。

　もう一つ、もっとも斉藤にしても、情報としてそういう知識を持っているだけで、実際、どのような場所で、どういうやり方をもって、それがなされていくのかまでは、知る由（よし）もない。ただ「ＨＵＭＩＮＴの親玉」という、ピンクのＴシャツ男の発言で、コードネーム・ルリが、日本県のそれに、ハブ（中枢軸）的立場を担っているのだろうと、漠然と当たりを付けたにすぎない。

　対して、ピンクのＴシャツ男は、自分のことを電波部員と呼んだので、こちらはまずＳｉｇｎａｌ　Ｉｎｔｅｌｌｉｇｅｎｃｅ――ＳＩＧＩＮＴ（シギント）の、多分チーム岸にいるのだから、こんな見てくれでも、かなりのプロに違いない。ＳＩＧＩＮＴには、通信傍受によって得られる交信記録を分析したり、それが暗号化されていた場合は、その解析に挑んだりする、Ｃｏｍｍｕｎｉｃａｔｉｏｎ　Ｓｉｇｎａｌ　Ｉｎｔｅｌｌｉｇｅｎｃｅを扱うＣＯＭＩＮＴ（コミント）や、レーダー

等非通信用電波情報を分析するＥＬＩＮＴ（エリント）、テレメトリーやビーコンから得られる情報を主に扱うＦＩＳＩＮＴ（フィシント）など、さまざまにその専門性を問われる分野があり、情報そのものに職人的関わり方ができる人間にしか務まらないと言える。

「それから、あの窓際で新聞読みに没頭してるのが萩原さん。多分、彼女はここに君がいることにまだ気付いてない。朝の新聞猛読時間がおわるまで、気がつかないよ」
「モウドク？」
ルリが笑った。
「うん、ＯＳＩＮＴ（オシント）の萩原さん、コードネームは瑪瑙（メノウ）だけど、彼女、画数の多い漢字は面倒だって、いつも『Ａｇａｔｅ』ってサインするから、通称アゲちゃん。登庁して一番に、国連理事国各国の主要紙を全部チェックするのが日課で、そのときの集中力ってちょっとイっちゃってるわけ。隣で、コップが割れたって気付かないんだから。で、猛烈に読みこむからモウドクってわけ」

どうやら冷えきっているコーヒーカップを横に、いわゆる「電ペ」を広げている女性は、知的を絵に描いたらこうなるという雰囲気だ。「電ペ」というのは、受信装置がついている形状記憶液晶シートのことで、サイズはユーザーの好みで選べるが、雑誌や小説だの、あるいは新聞だのといった紙面を投影してくれるものだ。廃棄物を処分するのが容易でない宇宙では、１ウェイの紙媒体で毎日毎日流れてくる、殆どが無駄な情報を垂れ流すことは有り得ないことだ。
紙媒体に近い体感で読める手軽さと、ごみを出さない機能性がうたわれているこの電ペだが、総合端末というものが普及していて、なんでも手軽に写してくれる（景色でも、ニュースでも）巨大画面があらゆるところの壁に埋まっているご時世では、電ペなんてものは、学校の教科書と縁がきれたら「それまでよ」になる人の方が圧倒的に多いに違いない。

「あ、ロシア語だ……」
　瑪瑙こと、アゲちゃんの電ぺを覗いて、ぽっつりと、斉藤が口にする。各国の主要紙は一般大衆向けの情報発信源としての矜持からか、初等教育を受けることしかできてない低所得層の大衆に向けて、軒並みGCL（コミュニケーションのための簡易言語）版を、国内向け以外に発信している。港（ポート）という機能は、雑多な民族が否応なしに吹き溜まって、否応なしに営まれていく場所だから、確かに、GCLは便利だ。けれど、簡便であるということは、無駄な豊かさを犠牲にしてしか生まれない。
　管制業務を学ぶ上での素養として、斉藤は主要言語といわれる国連常任理事国5カ国の主に使われている言語での「日常会話ぐらいは」と、積極的に学んできたが、読むとなるとどうしてもGCLにの楽さに落ち着いてしまう。
　横でコップが割れても気がつかない筈のアゲちゃん萩原が、片眉を気持ちつり上げて斉藤に視線をやった。微笑みと、会釈。とりあえずのニュートラル・ポジションを斉藤がとる。受け止めて、反らさないで、だけど失敬にも視線を跳ね返すことがないように、制御する。
　アゲちゃん萩原がふいに破顔した。
「なるほど、親分が目をつけるだけのことはありそうだね。斉藤君だっけ、これ、ロシア語だってことが分かるだけ？　それとも、何となく読めるの？　それとも、読みこなせるの」
「真ん中より、ちょっと手前よりぐらいですね」
「オッケー。とりあえず、あとで電ぺ回すから、分かる言語のだけでいいから、要旨をまとめてごらん。どれぐらいのセンスがあるか見てあげるわ」
「センス？」
「そうよ、センス。悪いけど、情報に対する感受性ってのは、必死にがんばって磨いてもどうにかなるってもんじゃないのよ。これは、絵を描いたり、楽器を演奏したりするのと一緒で、どうしょうもな

くセンス、天賦の才に左右される。情報にふりまわされるだけの器量がしかないで、チーム岸の新人(ペーペー)張るなんて、土台無理があるからね。親分がなんて言おうと、器量がなかったら追い出してやるのが、長期スパンでみた愛情でしょ」
　ＯＳＩＮＴ(オシント)というのは、Ｏｐｅｎ　Ｓｏｕｒｃｅ　Ｉｎｔｅｌｌｉｇｅｎｃｅ、つまりオープン　ソース、秘密にも何もなっていない公文書や、マスコミ媒体に載ってくる情報から、情報機関のマル秘に匹敵する文脈を見つけ出すことをいう。軍事情報でさえなければ、実はこのオープン・ソースで九割五分から、九割八分までの情報を得ることができると言われている。古くさい日本語で、文書諜報と呼ばれるそれだ。つまり、優れたオシントであることは、別に軍や国家機関に属さないでも可能であり、他の大がかりなそれと違って、一人でなしうることができるという点が特異である。

「ああ、そうだ、最初に言っとくけど、私も金玉親分には一目置いてるけど、あんたたち軍人とは別口だから、敬礼も『あります』言葉も無用だから、そのつもりでいて」
　どう反応しようか迷う前に、ピンクＴシャツのシャコ氏が解説した。
「アゲちゃんは、ジ・アースの総合大学出てる、ピカイチの頭脳の持ち主で、国家公務員一種試験合格の強者で、外務省１種職員さんだよ。出身母体は総合外交政策局だから、バリバリのインテリジェント・オフィサーさん」
　アゲちゃんこと萩原は肩をすくめた。
「国際テロ対策協力室、つまり、Ｉｎｔｅｒｎａｔｉｏｎａｌ　Ｃｏｕｎｔｅｒ－Ｔｅｒｒｏｒｉｓｍ　Ｃｏｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｄｉｖｉｓｉｏｎが一番長く務めたから、専門はルナ自治区よ」

　ルナ自治区というと、悪友、高柳優美の訓練先だ。Ｔシャツ男のピンクの胸に書かれた文字は『月に願いを』であるし、どうも、怪

しい。斉藤はぶっちゃけた話月が苦手だ。あの灰色に輝く光りも冷たく人間を拒絶しているようにしか見えないし、あの地域の現在の在り方自体が、どうしょうもなく馴染みたくない。
　力が強いものが全ての得をとるなら、それほど不公平なことがあるだろうか。金というシステムを否定するつもりはないが、それだけが序列の目盛りになってしまえば、殺伐が当たり前になる。さもしい者への当然の卑しみが、負け犬の遠吠えに分類されていくことになる。あそこは、力がルールさえあっさりと変えていく。
　どこででも生きていけるはずの高柳でさえ、あんなところで持ち前の快活さを蝕まれないか、些か心配になるほどの一級の火種だ。というか、もう現役バリバリの活火山だ。
　はっきり言って、自分はへたれだ。こわいことは嫌いだ。痛いことも嫌いだ。血飛沫が飛ぶのも、痛みで支配しようとすることもされることにも、虫酸が走る。

――ルナだけは、行きたくないな。

　そこに、たかが1カ月も離れてないで、もう懐かしくて寂しくてならないほど親しんだ高柳の顔があったとしても、斉藤にとって拒否権が発動できるなら近寄りたくないリスト最高峰に位置するのがルナだ。
　大体、あそこには父親も住んでいる。住んでいるどころか、あそこでも声を大きくして物を言える立場を確保している、さもしい人間序列で行けば上位に名を連ねるのは間違いない。あそこで、あという立ち位置に行くことを選んだからこそ、斉藤を生んでくれた人は早々に人生という舞台から蹴りだされたのだ。血の臭い、血の臭い、血の臭い。

――まっぴらだ。

それに父親が住んでいるということは、瑠璃子さんも住んでいる。
うん、近寄るなんてとんでもない。桑原，桑原。

5. 行行重行行（前書き）

古詩十九首其一

行行重行行　　行き行き重ねて行き行く
與君生別離　　君と生きながら別離す
相去萬餘里　　相去ること萬餘里（ばんより）
各在天一涯　　各おの天の一涯に在り

【異訳】

今日も明日も　その次も　ずーーーっと重なる日々を行ってしまう
あなたと生きながら　別れてしまうのね（死別じゃないけど…）
お互いに　気が遠くなって数えられなくなるぐらいの距離が開いて
それぞれ天の端と端とで暮らしていくのね（溜息）

5. 行行重行行

ランニングマシーンを降りると丘揺れがするから、霧島飛竜（きりしまひりゅう）は、室内でチマチマ走るのが大嫌いだ。ただ、地球居住権を持つ家に生まれ、重力耐性の高い自分でも、地球の大気圏へ突入と離脱を繰り返すバージ（艀）シャトルライダーなどという、身体不可が大きい仕事に就くには、規定のフィットネス・メニューをこなさなければならないことになっているので、我が儘は抑えている。

宇宙に人類の大多数が移住するという巨大プロジェクトのどたばたに便乗して祖父が起こして、二代目の父が公共事業にくいこんで大きくした、まあ、個人が持ってるにしては巨大といっていいが、はっきり言って中堅という立ち位置の霧島運輸。

現在は、年がかなり離れている長姉が代表取締役を務め、さっさと隠居して趣味にでも生きればいいものを、なかなか仕事一途の人生を過ごしてしまった弊害で、会長の椅子を手放せない父がえらそうに居すわっている会社だ。会長・社長のツートップが神様なんていうスタンスの中小企業なんぞより、新天地というか、全く別の会社に殴り込みを掛けて、「御曹司」でない立場で評価されることにも魅力を感じたが、そんなことをするぐらいなら、違う業界にしとかないと、母親が泣くことは明白だ。

第一、全体としては中小だけれど、地球大気圏と宇宙とを往復する艀（はしけ）を運行する会社としては、極東アジア国軍御用達も務めるほどのトップ企業だ。霧島と同じような家族経営をしている、バージ綺羅（きら）社と、山峡運輸倉庫。なぜか理由はわからないけれど、このバージ・シャトル業界は、どっちを向いても家族経営ってところだらけだ。宇宙空間だけを自分の海としたいならば、大手さんは選びたい放題だけれど、自分がのりたいのはやっぱりシャトル・シップで、そうであれば、どこを選んでも結局、霧島の名前から逃げることは

無理だろう。

——いる親には甘えればいいじゃん。

童顔で、ぬらりひょんもかくやというほどに捉えどころがなくて、弱そうで、タフで、鬱陶しいぐらいに「甘えた」の癖に、究極は自分ごと突き放して物事を見つめることができる冷静で冷えきったところがあるという友人は、いつもにもましてニッコリ微笑んだ。

——親のいるところにいくなんて、ご苦労さまですね。

飛び切りの頭の切れと、しょがもないことまでよく知っていて、腹黒くて二枚舌でどんな人間がどう動くか、簡単に弁えてくれちゃってるみたいなスカした顔で、クールに見えて、実はだれよりも浪花節(なにわぶし)的な肌の感覚で、物事にぶち当たっていくという、もしかしたら頭が悪いんじゃないかと疑いたくなる友人は、厭味な角度まで極端に肩をすくめた。

飛竜は、子供のころから、バージ・シャトルという存在そのものが好きだった。打ち上げ時の事故に備えて、掘られた穴にわざと入って、轟音を立てて青空に吸い込まれていく白く輝く機体が見えなくなるまで見送るのも、ふいに青空に点となって見えた飛行機型のオービタ部分が、けたたましく出ていた時とは全く違う、恐ろしいほどの静けさで滑空してくるのを見るのも好きだった。

当然、操船学校に行っていた6年間で、名前として霧島運輸の地球本部バージ・シャトル運行課に所属する面子は、多少、新しい顔が増えて、古い顔が消えたことになっているが、基本、消えたはずの古い顔は、街の居酒屋に毎晩溜まっているし、昼間は整備ヤードに平然と出入りをしているから、消えたというには実在感に溢れている。新しい顔の半分ぐらいは操船学校でしかも同じ操船科を専攻

していて、他専攻の学生たちとは違って付き合いが濃かった先輩だったりして、フレッシュマンが感じなきゃいけない緊張感を維持するのは逆に難しかった。むしろ古巣にもどったような安心感があるのだから、どうしようもない。
　運行課に所属するバージ・シャトル・ライダーの中でも引退間際の大先輩達は、飛竜がほんのこまかいガキのころからの顔見知りで、猫をかぶろうとしたって今更というものである。
「キリーちゃん」
　五十近くだとは到底思えない、見事に引き締まった体をしている、運行課の最古参である三雲（みくも）が隣のドレッドミル（ランニングマシン）に、足どりも軽く飛び乗って、トントンという小気味いいリズムを刻みだした。マシンが低く唸（うな）り始める。御曹司なんて呼びやがったらぶっ殺すと突っかかっていった飛竜をひょいと肩に担ぎ上げて、「じゃ、霧島の霧でキリーなんてどうだ、外国人みたいでかっこいいだろ」と決めつけて以来、三雲は飛竜をそう呼ぶ。あのころ、三雲の肩は天に向かって聳（そび）えていたが、今ではどちらかというと、飛竜の肩よりも少し低い位置にある。
「何です？　三雲さん」
　一方、彼を「おっちゃん」と呼んでいた飛竜は、運行課の重鎮で若い者に睨みを利かせている三雲をそんなふうに呼ぶことはできず、会社がひけて飲みに行けばこそ「おっちゃん」が口から出てくるが、霧島の領土内ではそう呼ぶように心がけている。
「来週から、ちょっとしばらくの間、外（そと）いくぞ」
「外（そと）」と言えば、自分たちにとっては地球大気圏外の宇宙空間を漠然とそう呼ぶことが多い。別にバージ・シャトルというものの特性上、外に行くのは日常業務に過ぎないが、「しばらく」というのが気にかかる。
　何といっても、数少ない死亡事故のうち、その内訳をほぼ独占しているのがバージ・シャトル業務だから、霧島運輸の長男である飛

竜がこの部門にいることを、会長が苦々しく思っているのは周知の事実だ。宇宙船業務とちがって、バージ・シャトルの事故は、桟橋（ピア）にぶっつけてぶっ壊しましたけど、授業員は軽傷で済みましたなんて、中途半端な事態にはならない。事故イコール従業員数の葬式という方程式がきっちり成り立つ、思い切りすっきりとした後腐れだ。
経済学部も商学部も出ていない今更、経営に関われとは言わないが、せめて死亡事故例がない惑星間運輸部門にという親心を滑稽だと踏みにじるつもりはないけど、いい加減に諦めてくれないものかと、溜息混じり飛竜は思う。
父親には、従業員が死んでも仕方ないが、愚息の危険は耐えられないなどと間抜けた耄碌ぶりをさらしていないで、「キリシマのバージ・シャトルを沈めやがったら、葬式もしてやらねぇぞ」と啖呵（たんか）の一つもぴっしりと切ってもらいたいものだ。

「どこいけっていうんですか」
飛竜の声が、自然に剣呑になる。ドレッドミルを快調に飛ばしながら、まだ、体温さえ上がってこないのか、まるで散歩してでもいるようなのんびりした口調で三雲がいう。
「月」
「……月ぃ？」
自然に声が裏返る。月にあるのは銀色の砂と、地下を浸食して広がり続ける地下迷宮と、砂（レゴリス）由来の豊富な酸素と、天然の地盤という強固なシェルターの上にあぐらをかいて無法に蔓延（はびこ）る、豪勢に火器を使ったドンパチだ。剥き出しの自分だけよければの欲望をよしとして恥を知らない連中と、国家というものの幼稚が露呈しているあんな血と火薬の臭いが立ち込める街は、愛しい愚息を危険な業務から隔離するために送り込む先としては、かなりずれている。とすると、自分をシャトルから引き剥がそうという悪意の持ち主はどこにいるだろうと、自然、肩に入った力が抜けた。

「何しにですか？」
こちらは、随分息が上がってきている飛竜の声だ。
「レディ・サヤコの尻撫でにさ……」
にやりっと三雲が笑う。
「げっ、俺がなんで」
「うちの新人研修のルーティーンに入ってるんだから、しゃーないなぁ。俺も若い時分は毎年行かされたもんだ。第一、キリシマの飯食ってる限りは、何年かに一度は回ってくるぞ」
「嫌ですよ、俺は」
飛竜が文句を言うと、三雲は人が悪そうにニヤニヤ笑った。
「親父さん怒らせて、一般枠でうちの就職試験受けてきてんだから、特別扱いは無理だろ、今更。諦めて行ってくるんだな」
レディ・サヤコの尻撫で。それは、丸地にラインが入った霧島のバッヂを持っていないものには、全く通じない名称だが、霧島に所属すれば、事務職だろうが、専門職だろうが避けて通ることができない恐ろしく単純な労働を指す。

惑星などの資源を、その重力圏から打ち上げて、それらを必要としている消費地まで運ぶのに、最初に実用化されたシステムは、もちろんバージ・シャトルが持っていくなんてそんな少量運搬しかできないものではなくて、マスドライバーという、巨大砲でコンテナを打ち上げるという方式だ。
資源が無尽蔵であるならば、ロケットで打ち上げればいいのだが、そんなコストを掛けていては、スペース・コロニー建造時に必要な大量の物質を輸送するのに間に合わない。というわけで、その代替案として研究されてきたマスドライバー・システムには、各国でさまざまなものが開発されている。高圧ガスを段階的に注入して炸裂させて加速していく多薬室砲という原理で動いているマスドライバーもあるし、電磁石の反発力を段階的に掛けていくリニアモーターガン方式など、それぞれの国の持ち物はそれぞれに個性的だ。

旧アメリカ合衆国を中心に、カナダを飲み込んで成り立った北アメリカ連合国のレールガンは、もとアメリカ空軍と一企業がタイアップして作り上げたローンチ・リングと呼ばれるもので、こいつが地球からコンテナを放り出すときにコンテナにかかる加速度は２００Ｇを軽く超える。こいつでは、生物どころか精密機械ですら耐えられない。もっぱらグレインズと呼ばれる穀物資源や、バルクと呼ばれる原糖や間伐材などを砕いたチップなどを打ち上げてくる。

他にも宇宙開発では何かとリードを取っていたアメリカには、精密は無理として、それほど精密でない機械の類ならなんとか打ち上げられるスリンガトロンというものもある。こちらは空軍由来ではなく、旧アメリカ陸軍由来のシステムだ。

そして、我等が日本県には、その開発構想を打ちだした女性の名前が冠せられた、マスドライバー・システムがある。かの２０００Ｇローンチ・リングと同じ電磁石を使ったものでだが、向うは二本のレール間に高電位をかけるために、弾体、この場合は巨大コンテナになるわけだが、こいつ自体が伝導体となる。つまり、そういう意味でも機械類の搬送には全く不向きだ。片や、我が国のマスドライバーは、ソレノイド・アクチュエーターという巨大なコイルの内でストライカーを移動させることによって、弾体をはじき出すのだ。ぶっちゃけ、バネを使った巨大パチンコというか、銀弾鉄砲というか、ごく単純な原理でコンテナは飛ばされる。

このコイルガン方式では、弾体に電流が流れないため、精密機器ならまかせておけということになる。工作機器などを地上で組み立ててから打ち上げることが可能な唯一のマスドライバーといって過言でない。

その開発の途上において、乱暴でイケイケどんどん、理論上は電力さえ確保できれば、光速まで可能というレールガンは、電源開発がネックだった。

それとは別にこちらのコイルガンが解決すべき課題は、コイルというものがもつ電気抵抗の大きさで流せる電力に制限があるということだった。電流の量が弾体の初速を決定するという単純な法則から、地球の重力圏から離脱できないという致命的な欠陥があった。日本県発、コイルガン方式マスドライバーは、そのまま頓挫するしか行き先がなかった。それを、そもそも重力自体が地球と比べて限りなく宇宙に近い月面に持って行って使えばいいじゃないかという、単純な発想の転換を、そのプロジェクトを指揮していた男に与えたのが、何とかサヤコという名前の女性だ。

月面上に領土を持つ全ての国の先駆けとして、コイルガン・マスドライバー・システム・サヤコは誕生した。入力される電流の少なさから、動作音もそれほど大きくなく、隣接させる必要がある運転従事者の仕事場となる気密ドームの騒音も至ってしずかである。レディ・サヤコ――貴婦人というあだ名はこんなところに由来するのかもしれない。

ちなみに、テラ・マスドライバー・サヤコというのも現在では存在して、地球の資源をがんがん宇宙に打ち上げているが、そちらはエレガントなコイルガン方式ではない。あちらのサヤコにレディは普通付けない。

マスドライバーはその性質上、それなりの質量と自らの確固たる軌道をもつ、最低限星と名乗れるだけの物体の上にしか作れない。そのうち、技術が進化すればマスドイバー基地を持てる人造物もできるのかもしれないが、現在のところ、マスドライバーをコロニーに登載したら、一発打ち上げるだけで、その軌道が変わってしまうに違いない。

このコイルガン方式のマスドライバーシステムを、地球から月まで運んだのが、霧島運輸の創業者にして、初代社長の霧島豊、飛竜の祖父だ。そして、レディ・サヤコという、一種の伝説化している

女性とも面識があったという彼は、はた迷惑にも、競合他社を出し抜くために、オファー（条件呈示書）に、「マスドライバー輸送後のメンテナンス業務に作業員を派遣する」という一文を入れてしまっていた。レディ・サヤコの尻撫でとは、霧島では初代社長の尻拭いと同義語である。なんで、運送屋がそんなことをしなきゃならないのだ、というのは、飛竜でなくても当然言いたくなるに違いない。

　実は、これについては豊の方にも言い分があって、霧島豊は、輸送設置直後のメンテナンスという意味合いで、かの一文を入れたらしいのだ。その証拠に「継続的に」などと書いてはいないのだ。しかし、「いつまで」と「どのぐらいの期間」という一文も入れなかった所為で、コスト削減が錦の御旗の軍に言質を取られた形で訴訟をおこされ、見事に敗北。以来、霧島は継続的にマスドライバーの保守・点検に人を派遣している。多分、レディ・サヤコが引退するまで霧島の若手が、研修という名目で、月へ単純労働に駆り出され続けるのだろう。

　もっとも、高度な技術の要る、専門的なメンテナンスができるわけもない。本来、宇宙と同じく大気がなくてごみも漂わない月面で、マスドライバーに供給する太陽光発電のソーラーパネルには、その発電効率に影響を及ぼすほどの汚れは付着しないと想定されていた。しかし、宇宙船やコンテナの発着で舞い上がる銀砂（レゴリス）が、ソーラーパネル面に積もってしまうのだ。細かい砂というやつは、機械の敵であることは時代が進んでも変わらない。いろいろ清掃ロボットが研究されたけれど、故障が絶えず、結局一番安上がりなのが定期的に人海戦術で太古の昔から存在する道具、箒（ホウキ）で砂をかき集め、巨大掃除機で吸い込むという方策が取られている。霧島に丸投げされているメンテナンスはこの部分だ。

　掃除機のロボットアームを操作するのは、操作司令室というところで行うが、箒で掃くという作業は、流石に大気もなく重力も低い

という生物の生存には向かない場所で行うために、宇宙飛行士（アストロノウツ）になるための最低単位として、学生時代に宇宙遊泳を訓練してきている操船課の人間にお鉢が回ってくることになる。

「あんなにお尻の硬いレディじゃ、その気になれないっすよ……」

思いっきり溜息を一つ。人間にとって月は遠くにあって冴々としているのが丁度いい。金属製のガチガチな尻には、金属製のアームがきっと相応しいのに。

三雲が声を立てて、一際快活に笑った。

6. 宿題

ロシア語表記ではあるけれど、知らない単語が余りに多い。相変わらず、伝統の国語に拘りを捨てず、ついでに一辺境の島国の英語が元になったGCLを嫌って第二共通語とよばれるラテン語に軸足を置くようになった連合ヨーロッパと違い、北欧連合国においては、断然、ロシア語の一人勝ちだ。しかし妥協案というわけでもないだろうが、周辺諸国の単語をかなり取り込んで語彙数は爆発的なまでに増えてしまった。物凄い量の他音同義語が溢れる新生北欧語（一般的にはロシア語と呼ぶ）は、環境大破壊による国家統合以降の現代では、もっとも習得が難しい言語の一つとされている。

斉藤は、基本的にロシア語の文章を読むとき、一つ一つの知らない単語にいちいち拘らないことにしている。引っかかるたびに辞書に頼っていたら、数ページの文章を読むのに一日かかってしまう。論旨となっているテーマに対する基礎知識を武器に、文脈で何を話しているかに当たりを付けて、傍らに置いたメモにそれでも全く見当がつかない単語や、何となく分かるけれど頻出してくる単語を軽く書き留めていく。

流れからいってほぼ、これで間違いないと確信ができた単語と、全く見当もつかない単語だけ、文章の最後まで無理くそ読んだ段階で辞書に当たる。ほぼあっていたら、その単語に対する理解はそれでいいとして忘れることにして、全く見当外れだった単語と、微妙に意味が違っていた単語のコラムだけ、単語覚書専用のノートに、複数の辞書の記載を丸写しにする。

昔はデータベース化しようと試みたこともあったが、不思議とコピペで作った美しいファイルにまとめた物よりも、直接手を動かしての書き留めた物の方が記憶にすっきり残っていく法則に気付いて、あっさり無駄な作業だった方のデータベース化を放棄した。

例えばアラビア語のように、全く学習したことがない言葉は、流石に太刀打ちできないが、ある程度がんばって勉強した言葉であれば、人とのコミュニケーションに当たっての繊細な言い回しに精通するのにはまだまだとして、一般にニュースとして流される情報さえしっかり把握しておけば、逆に新聞記事程度なら速読に困らない。導入部分や解説的な部分は知ってる情報と大差なければ流し読み捨て、論旨の展開の部分だけ、独特の解釈はないか、その国のソースに基づく広くはまだ知られていない情報はないか、その部分には丁寧に時間をかける。ロシア語の電ぺの一面と社会面論旨を何とか、些か乱暴にまとめたところで顔を上げると、ほぼ目の前に、あと20年若かったら斉藤の煩悩が暴走しそうな、ほどよく整っているアゲちゃん萩原の顔があった。

記事に集中していて気付かなかったけれど、彼女はどうやら、自分の作業を見ていたらしい。萩原が仲間うちからからかわれる新聞猛読モードとほぼ同じことをやらかしていたのだと思い至ると、ちょっと照れ臭い。持っていたペンで耳の後をコシコシと掻いて、斉藤は中途半端な会釈をした。

「ほぼ終わったみたいね」

萩原は斉藤の会釈を素通りしてそう言った。萩原は自分の手元を覗きながら、終わるのを待ち構えていたのだろうか、斉藤はいぶかった。自分としてはそこそこの速度でやっつけたつもりだったけれど、そんなに待たせてしまっただろうか。

「一面と社会面だけですけど、時間掛かり過ぎですか」

萩原はあごを軽く左右に揺らして、そうでもないと斉藤に軽く示すと続けていった。

「気付いてなかったようだから教えて上げるけど、ボス来たわよ。さっさと着任の挨拶にいった方がよくなくて？」

(……そっちか)

自分の読み進む速度に苛ついていたのではなくて、噂の岸二佐が出現したのをシカトしていた自分を心配してくれて、萩原が声を掛けてくれたのなら、さっさと岸のところに行かなければならない。声を掛けてくれればよかったものを、と思う一方、もしかしたら声を掛けてくれたのを、こっちがシカトしていたのかもしれない。何かに集中しているときに、周りがどうなっているのかを、うっかり放り投げてしまう悪癖には、自分でも自信がある。

「あ、ありがとうございます。すぐに行ってきます。で、二佐はどちらに」

途中まで言い掛けたところで、萩原は斉藤の頭のてっぺんを掌で鷲掴みにして強制的に回した。首が痛い。

「そこのドアだよ、親分の執務室は」

成人した男であれば、自分の子供に対するようなそんなやり方に、腹が立っても良いはずなのだが、斉藤の場合、集中力が中途半端に意識を乗っ取っている状態では、通常の現状把握力が激減しているという自覚がある。言葉でドアの位置を説明されても、多分とっさに把握するのに時間が掛かったはずだ。目線を強制的にターゲットに合せられれば、間違いようがない。萩原はよくわかってるなと妙に感心してしまう。同類項の臭いがぷんぷんする。

すたすたとドアに向かって二、三歩進んでから、萩原に何も言わないで移動を始めたことを思い出し、斉藤は立ち止まって振り返った。

「萩原さん、ありがとうございます」

そういう丁寧な言い回しに留めたのは、萩原は外務省の人で、上司かどうかも定かでなくて、本人からは敬礼等の軍隊方式は無用と言われているのだから、『さん』付け程度が呼ぶのに相応しいだろうという判断からだ。

「どういたしまして。」

萩原がちょっと復古調の匂いがする言い回しで、軽く頷いた。斉藤はもう一度会釈して、伏魔殿とやらの親分、岸二佐の執務室の扉へ向かっていった。

＊　＊　＊

「アゲちゃん、どうよ……斉藤君のは」
ピンクのシャコが、素っ頓狂な表情を翻した真顔で言う。伏魔殿の親分の棲家（すみか）に吸い込まれて行った斉藤が、まとめ作業をそのままに中断させているメモを眺めて、それから溜息混じりに四、五回、萩原は大きく頷いた。
「悪くない。」
息を詰めていたシャコが軽く噴き出した。
「アゲちゃんから、ファーストレポートにそう言う評価を頂けるってことは、相当じゃん、彼氏」
「あの子の学生時代のあだ名、何だったか知ってる？」
「スター斉藤」
萩原の質問にシャコが即答する。
「それは、歴代の青ジャケトップが、単にそう呼ばれてるだけってことでしょ。そっちじゃない方、通り名的なやつの方のよ」
「スター以外にって言われると、わっかんないな」
考える素振りも見せず、沖（シャコ）は両掌を肩の高さにそろえて上げて、あっさりとお手上げアクションをとる。
「データマンよ」
シャコが一瞬複雑な顔になる。
「それって、もの知りの野暮を蹴散らしてるあだ名？」

暫し、萩原は沈黙を挟んでから続けた。
「私もそう思って聞いたんだけど……これ見ると、多分揶揄とか含んでるんじゃなくて、文字通りなんだと……思うわ」
「文字通りって……」
お手上げアクションを崩さないままシャコが畳みかける。
「ちょっとしたことなら、自分でがんばって調べるより、彼に聞く方が速いし正確ってことだと思うわ。あの子の読解力と応用力は、一般の大学で新生ロシア語専攻してきた学生より、完全に上よ」

萩原の手放しの称賛などは滅多に聞くことがないコードネーム・シャコ、沖初音（おきはつね）は、お手上げアクション状態の掌の指先から、つるんと力が抜けた状態になって固まってしまった。
「あの子がね、ロシア語専攻の学生だったら、単語力低すぎるって尻（ケツ）を蹴飛ばしてやるところだけど、航宙管制業務を専攻してきててそこでトップを取るだけのことをしてきた上でしょう。宙港のタワーの人間とコミュニケーション円滑にするために、ロシア語まで手を伸ばしたんなら、対人センスは大ありで、HUMINT（ヒューミント）の現場に速攻投入しても、形にはなりそうね。金玉親父が新人（ペーペー）を月になんてほざいたときには、回し蹴りしたろうかと思ったけど、もう一回今、あの子を月にいきなり投入して大丈夫かって聞かれたら、ノープロブレムって答えるね、私は。ついでに、これだけの単語力で、一般紙をここまで的確に読みこなせるってことの方に、驚くわよ……。OSINT（オシント）としての素質も十分ね」
のっそりと手を下ろして、沖が腕を組む。
「手放しだな、アゲちゃん。そこまでだと、なんだか気持ち悪い」
気持ち悪いという片桐の感想に、萩原（アゲイツ）はニヤッと軽く破顔した。
「あの子もね、多分浮いて見える方の人間なんだと思う」
「浮いて、見えるって？」
意味深長な彼女の言葉に、沖（シャコ）が問いかける。
「文字通りよ。単に読みとばしてるように見えて、必要なキーワー

ドには無意識の勘が当然に働く人間ってこと。つまり、私がいつも言ってるセンスがあるってことよ」

＊＊＊

岸の執務室のドアを開けた斉藤は、いきなり正面にどっかりと居すわっていた物に完全に気を取られてしまった。一瞬、敬礼するのも、着任の挨拶も忘れはてて、そのものを呆然と見つめる。
「これは？」
子供用の玩具にしか見えないが、一応聞いてみる。

大きさは、一人用の食卓程度。正面のボードにはスコア表示の電光掲示窓があり、素っ頓狂な表情の犬が「ＢＡＮＧ」という擬音語を背負って踊っている。そして、傾斜は切ってあるものの、ほぼ床と平行になっているボードには穴が幾つも開いていて、そこに埋まっているモノの平べったい頭だけが見える。そして、一番下の右端には、頭が不格好に大きいハンマーが立っている。
「いわゆる、モグラ叩きというやつだ」
岸が平然と応えた。
「犬に……見えますけど」
何故に極東アジア国日本県の情報本部の片隅に、こんなものがあるのかというまっとうな疑問は棚上げして、斉藤は重箱の隅を突ついた。
「ホッチキス、セロテープなんかと同じく、商標名が製品名になっている例の一つだな。第一、今どき、モグラをみたことがある子供なんて世の中に生息していると思うかい？」

――それもそうかもしれないけど……。

うっかり斉藤は受けてしまって、にやにや笑いが顔に浮かんできた。自分たちが住んでいるこの宇宙の大地にも、皆が愛する土はある。雑草も生えるし、ミミズだってちゃんと生息している。だけど、モグラを連れてこようという発想をするやつは居なかったに違いない。やっとこさっとこ擬似閉鎖系を営んでいる宇宙植民建造物の大地を豊かにするために連れてきたミミズを、連中に大量に食べられてしまっては恵みに乏しい土はますます痩せてしまう。

当然のことだけれど、宇宙の人造施設にモグラがいないことは、犬をぶっ叩く「モグラ叩き」という名前のおもちゃが存在することの説明にはなっても、この愛犬家が見たら卒倒しそうなコンセプトのゲームが、ここにあるという謎を解くためには、何の役にも立たない。

「斉藤、手」

楽しそうに促されて斉藤が半ば反射で手を出すと、岸はそこに子供が大好きな１０ユニバ・コインを１枚置いた。スーパーや自販機のジュースは、大体が２０ユニバで買え、空いた容器を回収箱に入れると１０ユニバ返ってくるのが一般的だ。スーパーで売っている、子供が小遣いで気軽に手を出せる程よいラインナップの菓子も、大体が１０ユニバで買えるようにされている。だから子供はこいつがなんだか分からない紙だのカードだのより大好きだ。しかもこれは、流通したてのはぴかぴか光っているコインだ。何人もの手に汚されて鈍色(にびいろ)になってしまっているそれではない。

それは、岸二佐からみたら、ほんのひよっ子かもしれないけれど、斉藤には自分がちゃんと成人した大人であるという自覚がある。何か１０ユニバコインを他人様から頂くのには、抵抗がある。

「はい？」
「やってみたまえ」
「今……ですか？」
「……もちろん」
　仕方なく正面に切ってあるコイン投入口に、１０ユニバを飲み込ませる。とたん、正面のボードについていたランプがてかてかと光りを発し、場違いに明るいスケーターズ・ワルツが響きわたった。
　穴からモグラ……もとい、犬（超絶ブサイク）がひょこんと顔を出す。ハンマーでつい思いっきりぶっ叩くと、「ミュフン」という、犬とはとても思えない悲鳴を吐き出して穴に戻っていき、スコア表示に見事「１」が表示された。
——ミュフフン。
　哀れな犬が、ちょっと今までとは違う泣き声をたてたとき、ゲームのレベルアップ・ファンファーレそのものの音がスピーカーから吐き出されてきて、正面のボードのランプが賑やかに点滅しだした。スコアは丁度「２０」。刹那、音楽が加速する。
　最初にぽっつりぽっつり出ていた犬が生きのいいワルツに踊らされるように、一匹ずつではなく大量にぴょんこぴょんこ飛び出してきて、ついむきになって叩いこうとしている斉藤をあざ笑うかのように、出たり入ったりを繰り返す。
——ひゅう〜　るるる　ちん。
　いかにも「残念でした、またどうぞ」的な音を、斉藤をからかうように吐き出してから、犬どもは静かになった。穴から見えている頭が小憎らしい。
　これでよかったかという思いを込めて岸の方を見ると，岸は腕組みをして、しばしニヤニヤ笑いが張り付いた顔を、そのまま斉藤に向けてきた。

「酷いもんだな。５割未満というと、幼稚園の子供と同じレベルだな、うちの定番なんだけど、この課題は君にはハードルが高すぎるかな」

重力さえ、学校並に確保していてくれたら、もうちょっとマシなスコアだったと思うのだが、力を入れて叩きすぎると反動で体が浮いてしまいようになる低重力では、惨憺たるもので、ここまで悲惨だと、自分でも腹が立つというより笑えてくるから不思議だ。

まあそんなことより、今岸は、いったい何と言った？　課題？

「さてと、君がどういう種類の人間かみるための課題を出そう。せいぜい頭と体を使いたえ。斉藤、手」

岸が斉藤の掌に可愛く折り畳んだ折り紙製の座布団を据え、それからその上にポテンと置いたのはパンダの人形だった。後頭部に穴が切ってあるから、どうやら貯金箱で、予測よりもずっしりと掌に重い。ここの重力レベルを考えると、その中にはコインがぎちぎちに詰まっているに違いない。全部、１０ユニバ・コインだろうか。

「さてと、斉藤。これはうちの恒例行事になってる課題だ。軍だとか外務省、警察とかいう所属組織に関わらず、僕のチームメイトにはここんところ同じ問題をだしている。だから、うちに所属する以上、拒否権はないと思ってくれたまえ。言わずもがなだけど、念の為に言っておく。ゲーム機も僕の私物だしそのコインは僕からのお小遣いだ。官費は使ってないから、いらぬ心配はしないように」

岸はカツカツと靴音を立てて（低重力なのに、鋲でも打ってあるんだろうか）自分の執務机の方へもどっていく。何が課題なのか、さっぱり……。もしかして。

斉藤はパンダの人形をモグラ叩きの台にとりあえず置くと、その座布団になっていた四角い紙をまざまざと観察する。やっぱりそうだ。女の子たちが、手紙をやりとりするのに、色とりどりのメモ用

紙をチマチマと折り畳んでいた。あれと、ほぼ同じものだ。封代わりになっている折り込みから畳まれたそれを解いていくと、折り線だらけになったしわくちゃの紙に、案の定、なにやら書き付けがある。

——8割のヒット率をキープしたまま、
——12時間、モグラを叩き続けろ。
——人間には、創意工夫したくなるって癖があるからね、
——斉藤君、せいぜい気張りたまえ。

へ？　8割のヒット率で12時間、これを？

「創意……工夫……？」
思わず呟いた斉藤の耳に、畳みかけるように岸が言葉を注ぎさした。

「辞令、本日から2か月間、HUMINT統括の池内三佐と、OSINTの萩原さんから、月についてしっかり基本情報を押さえたまえ。2か月後、3月1日付けをもって、国連部隊ルナ自治区の国境線公正管理チームに出向とする。僕からの宿題は回答を急がないから、ゆっくりと悩んでみたまえ」

（月か……。）
斉藤の顔が強張る。
「それは、僕が斉藤だからですか……」
つと、岸の瞳が斉藤をとらえた。獲物であることの自覚がある生き物が、ハンターのライフルのスコープで照準された時に感じるような、沈着で剣呑な雰囲気の瞳。
「もちろん、それもある」
「ぶちかまして、なぎ倒すだけが、トラウマへの対症療法ってわけ

でもないんじゃないんですか」
「かつての幼い君の不幸を足蹴にするつもりはないが、君はあの事件をトラウマとして抱えてはいないだろう。ただ駄々をこねている……違うか？」
「なぜ、そう思われるんですか。普通の子供であれば、生涯引きずっていかなきゃならないほどの痛手でしかないと、当然そうだとはお考えにならないんですか」
　つい、柄にもなく喧嘩腰になっていると、斉藤は自覚していた。名を轟かせているチーム岸のメンバーから追い出されようとも、月なんかにいくよりは断然マシだ。しかし、肝心の岸は全くどこ吹く風といった雰囲気で、あっさりと斉藤の突っかかりをいなした。
「斉藤、君は財布の中に金があるときに、高利貸しから借財するかい？」
　高利貸しといい、借財といい、古くさいすぎる言い回しだ。
「……いいえ」
「あそこの地表にある国の施設に行くことなど、だれにとっても難しいことなんかじゃないが、下の階層に潜っていくのは、並大抵の工作なんかじゃできないことは知っているだろう、十年ぐらい留守にしててもな」
　岸程度の年の人間の十年と、自分たちの年頃の十年を一緒くたにしてもらいたくないもんだと思いつつ、斉藤は渋々と頷く。
　多分、自分が月へ帰ると言えば、父親は喜んで大量の若い衆を迎えに寄越すはずだ。というか、さっさと自分の陣地に取り込まないと、攫（さら）われたりした挙げ句に交渉のネタにされかねないし、息子を見捨てるような情がない人間では、あんなところででかい顔なんかしていられない。
「それから、君は、隣町で派手な火事が起きたら、どうするかい？」
「近寄らないようにしますね、多分」

宇宙の施設で火事というのは悲惨のひと言でしか説明できないような事態で収束する。
「それじゃあね、自分が今居る建物が燃えてたら、どうする？」
宇宙にある都市で火事が起きた場合、遮断壁を下ろしてその区画を隔離するのが一般的だ。だから、逃げ出すというのは選択肢に有り得ない。
「消火活動に邁進しますね、多分」
「ということだ、説明は以上。この点について説明は受け付けないが、課題については、いつでも挑戦にきたまえ」
言葉に蹴飛ばされるようにして、斉藤は踵を返しながら岸の言葉を反芻する。

ルナで起きている火事は長い。ルナに住んでいる人間が、大地にいるという特別な環境であって火事即ち死という文脈が希薄な場所であるとはいえ、なぜ消火活動をしないのか考えてみろという趣旨なのか、それとも、ルナの火事の中に自分が投げ込まれれば、いくら自分だって消火活動の必要性を痛感して、そのように行動するだろうという意味合いなのか。
ルナの地表に張り付いている施設だけでなく、極東アジア国の領地内という制限はあるものの、奥の奥まで多分難なくいける自分。
——多分、どっちの意味も正解なんだろうな。
斉藤は深くため息をつく。
——月かぁ。

7. パンダのシッポ

斉藤は机の上に置いたパンダとにらめっこをしていた。岸二佐からもらった、貯金箱のパンダだ。コミカルな表情は可愛いし、申し訳程度にふくらんだ状態のシッポは、本物のパンダを真似ているものとしては、まあ悪くない。問題それが黒いということだ。さまざまな毛色をもつ猫じゃあるまいし、毛色の出方がワンパターンなパンダにおいて、シッポが黒いのはどうにもこうにも気に障る。受けねらいだったとしても横縞(よこじま)のシマウマの人形を見たら、だれだって落ち着かない気分になるはずだ。

これが逆なら黒マジックで塗り潰せば良いが、黒いのを白く塗るのはただでさえむずかしい。そこへきて工作やお絵描きを想定して揃えられていない官給品の事務用品を使って、黒いものを白く色塗りするのは、ありていに言って大変だ。

「気に入らないなぁ……」

思わず漏れた呟きはひとり言のつもりだったものを、たまたま、それを聞きとがめたのか、近くにいた萩原(アゲイツ)が突っ込んだ。癖なのか、肩こり対策なのか、丸めた電ペで肩たたきをしている。

「モグラ叩きの話？」

それはもちろん気に入らないけれど、宿題をやりたくないという種類の我が儘は、あまりにも子供じみていてはっきり嫌だというのに抵抗がある。課題が子供じみているということは、あるにしてもだ。

「いえ、パンダのシッポですよ。これ、どうやったら白く塗れますかね」

「白く？」

「……ええ、パンダのシッポ、普通、白じゃないですか」

「そうなの？」

「え？　そうでしょう、普通」
気が抜けるような萩原の応（いら）えに、斉藤は却って驚く。
「普通って、斉藤君は本物のパンダ見たことあるの？」
見たことがあるかと言われれば、映像でしかない。
「図鑑の類でしか、見たことないですけど」
「自信タップリのだけど、正確な情報なのか、疑わしいわね、そんなんじゃ。本当に白なの？」
そこまで疑われては、面白くない。
「ちょっと貸してください。」
年長者に対する礼儀をわきまえない無礼な強引さで、斉藤は萩原の電ぺを取り上げた。スタイラスペンを引っ張りだす手間を惜しんで、指先でちょいちょいと操作部分を弄る。フォーキッズを選択すると、百科事典へのリンクアイコンが案の定出現したので、そのまま手で抑えて認識されるのを待つ。

——どこに行きたい？
動物園。

——何を見たい？
３Ｄ模型。

ぽっぷんと電ぺの上にパンダの立体映像が結ばれる。
「あら、ほんと。白だわ」
萩原が、パンダのお尻に指を伸ばして言った。もちろん、ただのホログラムなので触ることはできないが、触られたと映像が判断すると、飛びのいたり威嚇してきたり、甘えたり、それぞれ何か反応するようにできている。虚像のパンダは、萩原に突つかれてもパンダというものがもつのんびりとした属性を断固保持して、極端な反応はせずにごろりと横になった。
「パンダってよく見ると目つき悪いのよねぇ。模様が垂れ目効果を

演出してるから、のほほんとした顔つきに見えるんだけど、これって、なんかに役に立つのかしらね」
「野生でどう役立ってたかは別にして、少なくとも、人間の保護欲はかき立てましたけどね。こんな、冗談みたいな色彩になんでなったんでしょうかね」
　萩原が『エサをあげる』アイコンを抑えている。子供だましの機能と思ってばかにしてはいけない。ちゃんと本物を撮影したものが投影されるので、食餌の時の習性をその気になればのんびり観察できるのだ。
「あれってミルクじゃない？　何で牛乳飲んでるのよ。パンダって笹しか食べないんじゃなかったの」
　パンダが平たい皿に入ったミルクらしきものが入った器を両手で抑えて、結構長い舌で皿を舐め回している。傍らには林檎まで転がっている。
「結構、雑食みたいですよ。竹林に住んでて、竹はそれを奪い合う敵もいませんからね、氷河期に竹偏食を余儀なくされて、勢い主食にした竹食を継続しちゃってるだけで、熊とほぼ近縁ですから、虫とかだけじゃなくて小型哺乳類とかも食べるそうですよ」
「パンダって、熊の一種なの？　レッサーパンダと一緒で、一種一属じゃないの？」
「そう思われていた時期もあったんですけどね、殆ど熊と一緒らしいです。もっとも、寒冷地にいる癖に冬眠をしないとか、だれも食べなかった笹を食うことで氷河期をあっさり乗り越えちゃっただけあって、相当個性的ですよね。そういや小動物を食べるってのの追加で、連中、そんなんの死骸とかも食べるみたいですよ。新鮮じゃなきゃ嫌だなんて我が儘言わないらしいです、感心しませんか」
「パンダって、死んだ動物、食べるの？　えーーっ、イメージ思いっきり変わっちゃうじゃない〜」
　中年というのすらも、そろそろ通りすぎたぐらいの萩原にしては子供のような反応で、斉藤はちょっとほほえましく、可愛いと感じ

てしまってから、はっと我に返った。いけない、中高年の女性に弱いのは、完全に瑠璃子さん後遺症だ。

「しっかしまあ……」

萩原が口調を変えた。

「良くもまあ、そんなどーでもいいことまで、よく知ってるわね」

「……図鑑は、男の子のロマンですからね。僕にだって、子供の頃ぐらいはありました」

「そう言えば男の子って結構、コレクションするの好きよね。コレクター本能って、言われてみれば性差がある部分かもね。うちの子も、そう言えばガキの頃、結構、くだらない石ころ集めて並べてたわね」

「……うちの……子？」

聞きとがめて思いっきり思考がそこでストップした。切れのいい頭と、広い視野と、鋭い分析力は、一週間も隣に座っていなくても十分実感できる。外務省畑のエリート官僚である萩原がおなかが大きかったり、ふにゃふにゃの赤んぼを抱き取っている姿が、想像力を駆使してもピンとこない。妙に半端な表情の斉藤が、そういう失礼なことを考えているのが手にとるように分かったのか、萩原がころころと笑った。

「やだね、来たばっかりの斉藤君にまで、そんな男にもてそうもないって思われちゃったわけね」

斉藤が首を慌てて振る。

「違いますよ、おなかが大きかったり、赤んぼ抱っこしている姿が、想像力の彼方にいただけです」

言ってみてから、全然フォローにもなっていないなと自分で思う。

萩原は勢いよく斉藤の肩をどやしつけた。

「正直は美徳っていうのは、５歳まで。いい年こいてたら、思ったことをそのまま舌に乗せるなんて愚かだよ。これからＨＵＭＩＮＴ（ヒューミント）の卵として、紛争地区に行こうってのに、暢気（のんき）なんだから。ああ、

そうだ、これでも、４人とも母乳だよ」
４人……。
「外務省キャリアで、４回もですか。よくそんなに産休とれましたね」
「あほ。産休堂々と取れるのが公務員ってやつでしょ。大体、産休中は雑用をしなくていいからね、却っていい仕事できたような気がするわ。それに、これいうと、みなさん派手に仰け反るんだけど、うち双子が二組だから、２回しか産休取ってないし」
「そりゃ、すごい」
何がすごいのかよくわからないけれど、とにかくすごいという言葉が思い浮かんだんだから、仕方がない。もう一度、萩原が斉藤を小突いた。
「でも、世の中、美男美女だの、才人、甲斐性持ちなんてのは含有率少ないんだから、普通に生きてりゃ、物好きの一人や二人に出会えるわけよ。あの、岸さんだって、女房持ちだったことぐらいはあるんだし、私に連れ合いがいたって、そこまで驚かなくていいでしょうに」
「へ？　岸二佐もご結婚されてるんですか」
人の不幸をあげつらう楽しさを満喫している表情で、萩原が否定した。
「されて『いた』よ」

――本当に大切なことはね、えてして会議室じゃなくて、レストランとトイレで決まるものさ。覚えておくんだね。君とこうやって食事をしているのも、一種の取り込み作戦というわけだ、遠慮せずに好きなものを選びたまえ。君なら、大丈夫だと思うが、メニューの中身が見当つかなかったら、私にまかせてくれてもいい。

着任日当日、夕御飯を奢ってくれるという岸に付いて行ったレストランは、問答無用に『高級店です』という雰囲気をかもしだしていて、恐ろしいことに、渡されたメニューには名前しか書いていなかった。押して知るべし。値段は、きっとどんなに安く見積もっても、斉藤の普段の食生活よりもゼロが二つは余分についているに違いない。

シンプルな白磁の皿は、多分硬質プラスチックの贋物ではなく、本物の白磁なんだろうし、シャンパンが入っていたグラスも落とせば割れる代物だろう。舌をたぶらかすような複雑な味付けのソースがのった肉を咀嚼しながら、ごく普通の当たり前の母親の愛情を注がれて育った友人が作る、ごくごくシンプルな家庭的な料理がたまらなく懐かしくなった。今、彼は古巣でもある家族がいる場所に帰って、どんなふうに毎日を過ごし始めているのだろうか、そんな感傷も湧かせつつ、話題が豊富で、どんなことも面白くしゃべる岸の話術に乗せられて、随分楽しい時間を過ごした。

斉藤に定まった岸の印象は、紛れもなく浮いている男ということだ。非現実的なまでに贅沢な空間で、そこそこの立場にいる自覚のある人間たちが、干渉し合って作られていくコンセンサスに、まじめに日々過ごしている人間が振り回されるのだと思うと、庶民の側の肩を持ちたい斉藤としては、多少面白くない。

その岸に家庭の匂いなど毛先ほどもない。だから、岸なんぞの奥さんをやっていた人間がいるというのは、つくづく割れ鍋にとじ蓋じゃないけど、人それぞれ、好みそれぞれということなのだろう。

そんなふうにして、斉藤が無理矢理納得しようとしていたとき、萩原が話題をまた変えた。

「で、どうするの、そのパンダのシッポ」
気にはなる。だけど、あるべきものがあるべきところにないと不安だというのは、完全に自分のトラウマだから、座りが悪いものを座りが悪いままに近くに侍らせるのも一興だろうと無理に思うことにしよう。斉藤は机の上にいたパンダ貯金箱をクルリと壁に向きあわせて、シッポを態々見えるようにした。
「気持ち悪いと思っているのは僕だけみたいなんで、この際……慣れることに、します」
萩原が一瞬止まって、それから派手に吹いた。

「……斉藤、お前、面白過ぎ」
さんざん笑ってから、ふと思い出したように萩原が付け足した。
「例の岸さんの宿題、どうするの？」
「萩原さんは、どうやったんですか？」
質問に質問で返すのは頭が悪い気もしたが、萩原になら別に構わないだろう。
「……ギブアップにしても、早過ぎない？」
こころもち憮然とした表情になって萩原が言う。
「多分……」
パンダがコインを欲する場所を指で何げに撫でて、斉藤は言った。
「課題をどんなふうなアプローチでやっつけようとするのかが、岸二佐の見たいところでしょう、できるできないは別として、可能性としてできることをどうやって見つけるかっていうね。だったら、二番煎じは不格好ですからね。萩原さんたちのやったやり方だけは、最初から除外しとこうと思いまして。さんざん考えてから、『前にも見た、つまらん』と言われるのも癪（しゃく）ですしね、くだらないことにエネルギーを使い果たす前に聞いとこうかと思いまして……」
萩原の顔がいっそう険しさを増して、それから一瞬で緩んだ。
「……私は、特注の鉄板作ってあそこにおいて、その上で半日新聞

読んでたわよ。もちろん、ヒット率１００パーセントね。トイレに駆けてくのが大変っちゃ大変だから、アレ女性トイレの前に移動させてね……」

女性用トイレの前にでででんと居すわるもぐら叩き台。その上で（斜めで座りが悪いに違いない）コインを入れながら、半日もすわりこんで新聞を読む萩原の図を想像すると、それだけで可笑しさが込み上げてきて、ぷっと軽く斉藤が噴き出した。

「大気圏突入時のアストロノウツみたいに、おむつでよかったんじゃないですか。だいたい鉄板なら座ってなくてもいいような……」

萩原が斉藤の頭を軽く叩いた。

「あのね、それじゃあモグラ叩いてるのは鉄板になっちゃって、私じゃないでしょう。第一、８割キープすりゃいいんだから、マトモな神経の持ち主なら、おむつよりトイレを選ぶに決まってるでしょ」

萩原がまともな神経の持ち主かどうかはおくとして、なるほどと思う。一応、岸の宿題には創意工夫できる余地がかなりありそうだ。萩原がご都合主義にもトイレに行っている間に鉄板に叩いていただいた分も、自分の仕事と都合よく解釈して１００パーセントと言っても、岸は特にクレームは付けなかったようだ。

鉄板に叩いていただいても、ヒットとカウントしてくれるなら、何も下手くそが証明された自分が叩かなくてもいいということでもある。要は誰に、どうやって叩かせるかなのだ。

萩原は話を続けた。

「シャコは、プログラムを改変して、どれだけコインを投入しても、１クルー１回しかワンコロが出てこないようにした。彼も１００パーセントでクリアね。瑠璃が何をやったかは、彼女の方が私よりここに来た時期が早いから知らないわ。以上、参考になって？」

斉藤は、ゆっくりとコイン投入口をなぞるしぐさを続けながら軽く頷いた。

「なるほど、二人ともソロプレイですね……」

「ソロって、こんなもんチームで何とかするってもんじゃないでしょう」

「……でも、チームタワーで学んできたことは、人間だれだって一人でできる事なんか、たかがしれてるってことですからね。僕はだから、基本的に一人で何とかしようなんて考えないんですよ、いつだって」

自分の能力だけで何とかするより、能力を持っている人たちに何とかしてもらう方が、自分のスタイルだ。それだけは確信できる。

——人海戦術でいくとして。

さてと、と斉藤は考える。手駒が手駒として自分を認識すれば、行動が鈍るのは常識だ。どうやったら、多くの人間が、叩かされている意識を持たずに、半日もモグラを叩くというアホな行為に意義を見つけてくれるか……難題であることだけは間違いなかった。

8．帰去来兮（前書き）

歸去來兮辭（ききょらいのじ）　陶靖節

歸去來兮　帰りなんいざ
請息交以絶遊　願わくば交わりをやめ　交わりを断たん
世與我以相遺　世と我とは互いに背けるに
復駕言兮焉求　又迎えの車に乗りて我は何をか求めんとする
?親戚之情話　親戚の情ある言葉を歓び
樂琴書以消憂　琴と書とを楽しみつつ　もって憂いを消す

【異訳】

さあ　帰りましょうや（自分）
上っついた世間付き合いは　もう沢山　願い下げ
自分が背を向けりゃ　世の中も方もそっぽを向くけど何ぼのもんよ
迎えの車にのっちゃえば　これからの方に気が向くものよ
親戚の言葉は情たっぷり　（鬱陶しいってこともあるけんどね）
音楽と本　これさえあれば、憂さ晴らしには十分でねぇの？

8. 帰去来兮

月を銀色に輝くと表現する人もいるけれど、自分には血色に見える。

展望桟橋の仮想窓に大きく映し出される、ずんと迫り来るほどに近い月の大地を、無邪気な観光客の歓声を聞きながら、それでも目は否が応にも吸いよせられながらも、斉藤は普段は日常に紛れて失念しているが、結局のところ忘れることができないあの光景が容赦なく襲ってくるのにまかせていた。普段忘れていることができる自分は、冷たいのだろうか。それとも、そこに関しては、冷たく凍らせてしまわなければ、自分を保つことが難しいのだから、普通に生きるためのなけなしの知恵なのだろうか。

重篤なショックを受けた子供は、そのことがなかったかのようにすっぽりと記憶から追い出したりすることも珍しくないようだが、自分はそんな器用さを持ち合わせていなかった。だから、そのことで心が痛み続けないようにするには、感じないようにするしかなかったのかもしれない。

クレーターだらけ。あばた面の月は、一度できた傷は、それを撫でてくれる何かがなければ、決して消えないということを教えているようだ。

月には血塗れの記憶しかない。

月の周回軌道上には、あまり人造物は浮遊していない。というのも、月にはその低重力を武器として鉱物などの資源を打ち上げる巨大砲にも似たマスドライバーが犇(ひしめ)くようにして、とまで言うと大げさだが多く存在する。

それよりも何よりも、地球に設置されたマスドライバーの凶悪加速は、精密機械や生命体を弾体に含有することを許さないが、月ほどの重力圏から離脱するには、それほどの加速はかからないし、むしろ、火力に頼らない安全な方法として旅客機等も殆どの場合、月からはこの方式で打ち出されるのだ。

その弾たるコンテナだの旅客機だのと衝突するのを防ぐには、はなから何も置かないに限るということが一つ。

そうは言うものの、相当の人口を擁する月も、資を受け入れる必要がある以上、その重力圏から程よく離れた周回軌道上に、荷受けの施設を持つことになる。キャッチャー・ポート（捕手港）と呼ばれる、その施設に待機した捕手が、キャッチャー・ボート（捕手船のことで、捕鯨船とは関係ない）を使って、月目掛けてやってくるものをとにかく捕まえる。そこから先は、人間なら大気もなく、つまり捕まえるべき気流もないので羽を持たない、どんぐりのような形状のシャトルシップで各仕向け地に発進するし、コンテナは仕向け地の着弾点というとんでもない名前がついている地点に向けて、打ちだされる。月は地下にある都市部は派手にどんぱちが繰り広げられているが、上空では荷物やシャトルが、打ち上げられたり、打ち下ろされたり、激しくすれ違っている。

一通りの研修期間を終えた斉藤がいるのは、そのキャッチャー・ポートの観光客向けの展望桟橋だ。月に行こうと思ったら、だれだってキャッチャー・ポートにいったんとっ捕まえられてから、仕分けされて、行き先ごとに違うシャトルシップに乗り継ぐものだ。しかし、このキャッチャー・ポートというのは、はっきり言って、どうしようもなく揺れる。大きな物量のものを受け入れるとき、それから、打ちだすときに、当然のように衝撃がくるのだ。人間以外の愛玩動物も多く植民している月ならではの雑菌対応性により、他のところにある緩衝施設にしては検疫の留め置き期間が設けられてい

ないのも特徴だ。月に入るのは、そのとばっくちのインフレータブル・ドームまでなら、他のスペース・コロニーなんかへいくよりも数段階気楽だ。ただし、月は紛争地帯ということと、外からの干渉を極端に嫌うという風土上、毎日数便もシャトルが行き交っているというわけではないので、どうしても待ち時間が生じてしまう。

斉藤がキャッチされた時間と、極東アジア国のインフレータブル・ドーム向けのシャトル便の出発時間との関係は、宿泊施設を探すほどでなし、しかし2食分の時間はあるといった中途半端なところで、彼としてはのんびり新聞でもさらえたかったのだが、何せ施設の性質から言って、ほぼ間欠泉並に揺れている。細かい字を読んでいると酔いそうで、斉藤は諦めて展望桟橋にやってきたのだ。行く前に、心の準備をするためにも、故郷である月を見ておこうと思ったのだ。

微細重力で営まれる施設だから、ものは当たり前に固定されているようだけれど、それでも人間は揺れるたびに面白いぐらい翻弄される。斉藤もうっかり手摺りから手を離しているときに、けっこう強めの揺れが来て、うっかり飛ばされる慣性飛行状態になってしまった。無様に漂いながら、しかし、きょろきょろ移動していく前方を見回して、適当な場所に手摺りがないかどうか探す。と、目の端につい先だての学生時代に、いやというほど見慣れた顔を見つけて、ちょっと驚く。

「……飛竜」

その呟きが届いたのか、前方にいた男が、その顔を斉藤の方に向ける。その直後に、なぜかもう一段階強い揺れが斉藤の背中を後押しして、斉藤は飛竜の方へいっそう激しい勢いで押し出された。

友人といって吝かではない存在ではあるものの、野郎の胸に飛び込むのは嫌だなと思っていると、飛竜はちょっとだけ身をかわして斉藤の直撃を避けてからその手を捕まえて、斉藤が無様に流れていくのを阻止した。

「どうした？　こんなところで、早速会社クビになったか？」
と斉藤が言うよりはやく、
「左遷か？」
と飛竜が呟いた。お互いに、月に来るのは嫌々ながらというので
なければ、こんなに否定的な文脈で語られることはなかっただろう
に。お互いに、暫し見つめ合って、そして軽く苦笑い。
「左遷だな、国連軍の国境線公正管理チームに配属だ」
「へぇ、国連軍に出向なら、左遷というほどでもないんじゃないか
？」
一応、飛竜は無難な意見を言う。確かに、余りに能力が低い人材
を国連軍に派遣することは、各国の名折れだから、国連軍にはそこ
そこの人材が集まってくるものだ。
「一級紛争地区だぞ、『逝ってよし人事』以外の何もでもないでし
ょう」
一瞬だけ考え込んでから、当てはめるべき漢字に思い至った飛竜
は、吼えるように笑った。
「相変わらず、ひねくれた表現するから、一瞬まごついたじゃない
か。大体、バージ・シャトル・ライダーなんて単純で、ついでに語
彙能力低いやつしかいないからな、久々に斉藤節を聞くと理解する
のに時間がかかるよ」
斉藤はちょっと苦笑する。そんなに受けを狙ったつもりはなかっ
たのだけれど。
「で、飛竜は？」
「新人イジメで、レディ・サヤコのお尻撫で撫で」
「へ？」
斉藤が怪訝顔になると、飛竜は会心という雰囲気の笑みを浮かべ
て親指を立てた。
「やったね、俺が知ってて、歩が知らないことなんて快感～」
飛竜が斉藤にいかにして、霧島運輸の新人研修に、国が持ってい
るマスドライバーの掃除なんかをさせられるのかのレクチャーを始

める前に、館内放送が、日本県のインフレータブル・ドーム、KAGUYAに向かうシャトル便のゲートが開くという旨を告げたので、珍しくも飛竜が斉藤に蘊蓄をかますという珍景に突入する前に、その話はそこまでになった。

斉藤も、霧島飛竜も、はっきり言って普段、ゼロGと呼ばれる微細重力で動くことはない。GアップよりGダウンの方が体自体はちゃっちゃと馴染むものだから、しんどさはそれほどでもないが、当然所作が洗練されるには程遠い。どっちが上か下かもはっきりしないような混沌とした空間を、壁に設置された勢いをつけるためと、流されないようにするための手摺りを頼りに、目的地の方向に進むのを、ひっきりなしに、しかも不規則に衝撃がやってくるキャッチャー・ポートの中でするには結構な大仕事で、壁などの構造物や、人などの浮遊物にひっきりなしにニアミスというよりもぶつかりながらということになる。

飛竜が何回目かで、同じ方向に進もうとしている見ず知らずの青年に、またしてもぶつかったことに対する軽い謝罪をしようとしたとき、後ろから斉藤が突っ込んできて、その常識的な動作は発動されないまま前方に対して勢いよく移動を開始した。

「あのね、もうちょっと優しくできないの」

「無理」

飛竜が文句を言うと、斉藤は悪びれた様子もなく即答する。飛竜はちょっと苦笑する。それにしても、キャッチャー・ポートにいる数少ない職員の印である制服を着用した人間が、軽快に手摺りを使って体を自分で打ちだすような感じで、ひょいひょいと移動していくのを見ると、さすがだなあと思う。

「ところで、国連軍の駐屯地って、日本県だったっけ?」

途中まで、同じシャトルに向かっていることに、特に何の疑問も持たずにいた飛竜だが、ふとまっとうな疑問が湧いて、そんな質問になる。

「いや、配属前に、ちょっと家に顔を出していこうかと」

「家？　歩ってルナ出身だったのか？」

お年頃の青少年たちにとって、家族の話題などそんなに優先順位が高いものではないし、しかも、近くに住んでいて顔を合せるのでもあれば自然と身近になっていくものなのだろうけれど、自分たちが住んでいた部屋の提供主であった飛竜の長姉なんかはさておき、余りそのことに触れたことがないことを、飛竜は今更ながらに驚いた。

飛竜自身は、幸いなる少数とよばれる地球居住権を持つ家に生まれた、いわば特権階級みたいなものだ。彼が自身で選んでのことではないが、それでも何か必要なものを得ることに苦労をしたり、不足をしたりという経験はない。もう一人、よくつるんでいた仲間である高柳優美は、初等教育さえ「マトモに受けてない」と、「今日食うものの心配するのは沢山だったから」などという理由で軍に志願したそうだ。彼はそのことを宣伝もしていなかったが、特に隠してもいなかったから、皆が知っていて余り触れない事実だった。違いすぎる生い立ちを障壁にしないためには、自然とそれぞれが育ってきた環境については無口になっていたのかもしれないと今更ながらに思う。

斉藤歩は特に育ちが悪そうでもなく、かといって高柳優美――タカほどにも苦労していないことは、若くしてというより幼くしてコンピュータをおもちゃとして扱っていたらしいことからも窺われる。ただ、少なくとも、地球に居住権を持つものは、いろいろな意味で専門家とその家族が多いが、月の居住権を持っている人間は、ほぼ例外なく金持ちだ。どうも、制服と寝間着以外は持っていないのではないかと思われる斉藤に、金持ちという肩書は似合わない。

「歩さ、お前、在学中に帰ったことあるか？」
「……ないよ。そうだな、なんだかんだで十二年帰ってないことになるのかな」
「……十……二年？」
飛竜の声が裏返る。記憶違いでなければ斉藤はまだ二十二、三歳で、二十五までにはいってないはずだ。その十二年前といえば、まだ十やそこら、飛竜が我が身を思い返せば、間違いなく初等教育真っ最中だったはずだ。そんなころから家に帰っていないというのは、少し異常だ。
「……家ってことは、家族がいるんだろう？」
「うん、父と、父の奥さんがいるね……」
「親父さんの奥さんって、歩のお袋さんじゃないのか？」
「母は、もう亡いから」
「……悪いこと、聞いたか？」
斉藤の表情はまるで変わって見えなかったけれど、つい飛竜は聞いてみた。斉藤がちょっとだけ微笑んだ。
「もう十二年になるからね、いい加減、気を使われるような話題じゃないさ」
少し、飛竜はそこに引っかかる。十二年ぶりの帰省。お袋さんが亡くなって十二年。法事なんかも全部すっぽかしてということは、義理のお母さんと引っ掛かりでもあるのだろうか。ただ、気にはなるけれど、気軽に聞いていいこととも思えない。常識人を自認する飛竜は、聞きたい幾つもの質問を飲み込んで、慣れない微細重力下での移動に意識を集中させた。

シャトルシップがキャッチャー・ポートから打ちだされる瞬間、体に丁度心地いい加速感があった。いつもの大気圏を離脱するために容赦なく襲ってくる加圧感とは全く違い、遊園地にあるスリル系

の乗り物よりもたるいくらいの緩いものだ。僅か三十席ほどの座席だが、それすらもほぼガラガラで、指定された座席の番号は無視して、飛竜はちゃっかり斉藤の隣に陣取った。乗務員も多分操縦士と副操縦士ぐらいだろう、態々客席に茶々入れになどやってこない。第一、長時間どころか座席が温まるほどの時間さえないショートトリップだ。スペース・コロニーで街と街を結ぶバス・カートなんかの方が余程、移動に時間を要するだろう。

「その……さ、歩」

言いにくそうに、それでも飛竜が中途半端になった話題を蒸し返した。

「ん？」

「親父さんには、ちゃんと連絡したのか？」

斉藤はあっさり首を振る。

「十二年ぶりとか言ってなかったっけ、いきなりで、大丈夫なのか？　それとも、ほんとうは帰るつもりなんか……ないとか」

めっちゃくちゃ心配しているといった飛竜の言い方に、斉藤は軽く噴き出した。

「家のこと、いわない方がよかったか？　ほんと、鬱陶しいやつ……」

「あ、その言い方、冷たくない？」

ひとしきり可笑しそうに込み上がってくる笑いを押さえつけている様子だった斉藤が、何とか真顔を取り戻してから、飛竜を見た。

「あそこは、他の街とは全然違う」

観光という需要から完全に外れているのか、月とキャッチャー・ポートの渡し船であるシャトルシップの客席には、窓もスクリーンに外のカメラが拾ってくる映像を写す仮想窓もない。ただ、重力の掛かり具合と座席の向きからそれと分かる進行方向に向かって、斉藤は人指し指を突き出した。

「……どういう意味で？」

「閉鎖することに、執念深いってことだよ。だから、月に向かいさ

えすれば、連絡の必要はない。向うで勝手に了解してくれる。あばた面を撫でてるぐらいの来訪者には冷笑を、切り込んでくる者には選別を勝手にしてくれる、そういうとこだ」
「……なんじゃそりゃ」
「徹底的に閉鎖しているってことだ」
「徹底的にって」
取りつくしまもないといった言い方の斉藤だが、彼が別に怒ったり構えたりしていないことは、伊達に長く付き合ってはいない飛竜にははっきり分かって、だからこそ、よく知らない銀色の円盤の奥深くに張りめぐらされた迷宮が、本当にそう言うところなのだと、事実として言い渡されたようなものだった。

「厄介なところか？」
「めちゃくちゃね……」
斉藤がちょっとだけ口の端を持ち上げて微笑む。喜怒哀楽の表現の幅が薄い友人にとっては、結構最上級に近い笑顔だ。飛竜は大人の男である友人が、家族だの故郷だので、幼子みたいに傷ついていないのだと、がんばって主張しているように見えて、ちょっと引っ掛かりは残っていたけれど、敢えて忘れることにした。

「もうすぐ着弾だ、シートベルトしとこう」
斉藤が言うとほぼ同時に機長の肉声によるアナウンスが聞こえた。
「間もなく、着弾点に墜落しまーす。みなさん、シートベルトしっかりしめてや〜」

——墜落……って。

縁起でもない。地球を行き来する旅客機や、コロニー間を結ぶ定期航路にはない野蛮というか、ジョークにしても完全に人を喰ったアナウンスに飛竜は力が抜ける。

「なに、これ」
「実際に、墜落ってのが、正確な表現だし……。大気がないってことは、自然減速無しだからね、軽く逆噴射してあとはターゲットポイントに向かって」
斉藤が手近に何もなかったから、指先で何か掴むような素振りをして、腕を大きく振りかぶって放物線を描き、指先をどんと飛竜の太股に墜落させる。
「逆噴射しすぎると……」
もう一回、斉藤はひょいと放物線から始まって、同じ軌跡を描いたが、飛竜の太股に着地する前にすいいっと元来た道を戻す。なんじゃそりゃ。
「でもって、逆噴が足りないと……」
斉藤の手につかまれているらしい何かは、再び飛竜の太股重力圏にとらえられたらしく、斉藤の手という重量を武器に飛竜の太股に激しく墜落した。飛竜の顔は一瞬で引き攣った。
「……」
「パイロットさんがベテランなことを、天に祈りましょう」
絶句した飛竜をどこ吹くといった体で、斉藤はクリスチャンの様な形に両手を組み合わせて、静かに黙祷の姿勢となる。飛竜は叫びたかった。もう、月は何もかもがイレギュラーだ。
緩やかに減速しているのが、速度計で読み取れる。計器がなければ分からないほどの減速だ。もしかして、逆噴が足りないバージョンの運転手さんか？　飛竜があんまりのんびりした速度計の動きにそう思ったとき、只事でないレベルの衝撃がやってきて、それからゆっくりと体に馴染んだルナGの感触がやってくる。
実は、斉藤はルナから飛び立ったことはあるが、帰って来たのはこれが生まれて初めて、経験の総量としては、まったく飛竜と大差ない。とはいえ、机上でゲットした知識だけで武装して、はったりをかませるのは彼の十八番(おはこ)だ。無事に月の表面ついたことを重力で実感しながら、飛竜に気が付かれないように、こっそり少し息をな

で下ろす。

シートベルトを外して軽く伸びをしてもどこまでも漂うようなこともなく、体がぐるぐる回転し始めることもなく、上と下はきっちり区別がつく、それでいてずっしりと自分の体の重みを感じることがない、浮遊感。まさしく、ルナG圏だ。

「……ホンマもんのルナGだぁ」

隣で、斉藤と同じようにシートベルトの束縛と、激突事故の恐怖から解放された飛竜が、そんなふうに心持ちはしゃいだ声を上げる。

当たり前のことだけれど、当たり前に感動している飛竜に、斉藤はもうちょっとだけ、微笑んだ。

9. イカサマ博打

「で、これからどうやって、ルナの居住区に移動するんだ？」

「全く下調べ無しでぶっつけ本番ですか。さすが、突っ込み飛竜だけのことはありますね」

「厭味か」

慎重を足蹴にするつもりはないが、曲がっていると思うことに素直に添えない性分の霧島飛竜は、学生時代に恐怖のトラブル・バーゲンとして記憶に残る事件の山場で、斉藤が無理矢理捻り出した幾つかの回避策のうち、一番凶悪だと彼自身が思ったものを採用して、その特攻一番手にあっさり自らを投入した実績の持ち主だ。何か行動をするとき、ちゃんと下調べをしないと初めての事に挑戦する気が起きない斉藤などから見れば、思いつきで行動できるというのは、すごいことだ。

斉藤が応えようと思った矢先、飛竜の携帯端末がぴいひゃらとすっとぼけた音を立てる。

「いい、センスの着信にしたんですね」

「俺はお前と違ってマメなんでね、友人にはテーマ曲を設定してるの。これだれだと思う？」

ルームメイトだったけれど、専攻科も性格もまるで違う自分たちは、それぞれに学生としての生息圏が別にあって、共通している友人ときたら、まあ高が知れてる。その少ない選択肢の中で、この間抜けた音に相応しい奴といったら、あれしかいない。

「……タカ」

「ぴんぽん、ご名答」

飛竜が携帯端末をパチンと開くとかわいいサイズの立体映像に押し込められた高柳優美が立っていた。斉藤が横にいるので、子供が爺婆と会話するときのような立体モードにしたのだろう。かわいい

サイズの飛竜は、耳に端末を当てているから、向うは普通にトークモードのようだ。つまり、こっちに斉藤が増えていることは、飛竜が率先して言ったり、斉藤が声を立てたりしなければ気がつかないということだ。悪戯心がムクムクとせり上がってきて、飛竜はにんまりとほくそ笑む。リトル・サプライズだ。飛竜は今の段階で、斉藤の存在を高柳に言わないことにして、唇の前に人指し指を立てて斉藤に目配せをした。

——着いたか、飛竜君。月へのアプローチはどんなだった。
あれをアプローチと言うんだろうか。飛竜は独りごちだ。どう考えても、墜落という言葉が似合う。けれど、恐かったなどとは、重力圏に突っ込むのが商売のライダー稼業をしている矜持が言わせない。強がりも習い性。
「いい感じ、刺激たっぷり。3歳は若返ったよ」
——お前が3つも若返ったら、赤ん坊通り越して、母ちゃんの腹の中もどらなきゃならねぇだろうが。

相変わらず、ああいえばこういう形式の会話での基礎体力は十分だ。基礎教育を全うに受けてこなかった弊害と、彼自身が自分は勉強嫌いだと思い込んでいるせいで、高柳という男の成績はアホそのものだったが、発想の豊富さと、手持ちの材料をどれだけのやり方で回せるかというような場合の考えつくのに要する時間の短さと、斉藤がちょこちょこ語る蘊蓄話をしっかり覚えている事辺りから見て、本当のところは多分間違いなく優秀なのだ。
「迎えにきてくれたのか？　暇ってとこはそんなに暇なのか？」
——普段有休使うことないからね、申請すれば一発許可なんよ。だけど、飛竜、お前本当にしょーもない便で来たみたいだな。
「しょーもない？」
えらい言われように、頭が悪い証明として飛竜がオウム返しになる。

——なんか、ここのＶＩＰが、それに乗ってるみたいだぞ。ここ、物凄い、ものものしい感じで、なんかすげえの。警官とか、ヤクザ屋さんがウゾウゾいるぞ。

飛竜が閑散とした客室を見回す。別に、自分たち以外には、不幸な霧島の社員ですというバッヂをつけている幾つかの若い顔と、どういう用か知らないが、堅気（かたぎ）にしか見えない、サラリーマン風の中年の男の二人連れがいるだけだ。ＶＩＰは普通こういう民間シャトルシップに単身で乗り込んだりしないだろうし、『うぞうぞ』というタカの造語くさい形容で語られたヤクザ屋さんのカテゴリーのＶＩＰなら、もうちょっと、やばい雰囲気を持っているはずだ。

「別口じゃないのか？　別にそれっぽい人はいないぞ」

別に後ろめたい話題ではないはずだけれども、常識人を自認している飛竜としては、ちょっと声を顰（ひそ）める形になる。

——飛竜君の目が悪いだけだよ。次のシャトルシップなんて、いつ飛ぶか分かんないし、そんなんのためにこれだけの人間、動員されてないって。

「じゃ、パッセンジャー（乗客）にヤクザ屋さんのＶＩＰが乗ってるか乗ってないかで、賭けようぜ。負けた方が今日の飯代全持ちね。どうせ、そっちも稼いだ分使い切れてない甲斐性なしだろう？」

なんでも賭け事に持って行きたがるのは、出てきたばかりの母校の、いわば校風というやつだ。

——決めつけんな、でもノッた。お前の財布なら、さぞかしイジメ甲斐がありそうだ。

「お互いサマ。じゃ、あとでな」

電話で話しているのに、律儀に手を振っているかわいいサイズのタカを、飛竜が携帯端末をパチンと閉じて挟み込んだとき、ぼそっと隣にいた斉藤が呟いた。

「……飛竜、今日は、ごち」

＊＊＊

いかにもお座なりという簡便さの入国審査を終えてゲートをくぐると、出発待ちをしたり、見送りや出迎えで人間がたむろしているはずのロビーは、制服の警官や、その筋の人という看板を背負っているようないかつい男たちが、確かに『ウゾウゾ』居る。

と、ゲート正面の、見過ごしは断固許しませんという毅然とした意志が感じられる場所に立っていた、一際背が高い青年が、子供のように大きく手を振りかけて止まった。

「どうした？　斉藤、お前も軍辞めて、霧島にでも入ったのか？」

怪訝そうな言葉を紡ぐが、予期せぬ親しい顔があったことの喜びが、無邪気なほど素直に滲んでいる。大人と言っていい年になっても、こういう表情ができるのは単純に希有なことだと斉藤は思う。

「優美（ゆうび）ちゃん、相変わらず、きついね～」

斉藤がにこやかに言うと、にやっと高柳も笑い返した。

「歩（あゆみ）ちゃんこそ、相変わらず、物覚え悪いね、名前で呼ぶなって何度言わせる」

「そっちこそ、女みたいな呼び方は止めてくれって、いつも言ってるだろう」

斉藤が何時もの定番の言葉をそこまで言いかけたとき、背後で甲高い女の声がフロア一帯にきんきんと響いた。

「歩ちゃーーーーん」

斉藤の顔が上気する。彼が声のする方に向き直ろうとした刹那、彼の記憶では大きかったはずの小さな体が斉藤に向かって突進してきてから、彼の胸にどすんとぶち当たった。ルナGの常で、慣性に

乗っ取られて、斉藤の体はその女を抱き留めるような形のまま、後方に流されそうになるところを、間髪入れずに伸びた高柳の手で引き止められた。
「よかった〜。すっごく久しぶりなんだもん、歩ちゃんのこと分からなかったらって、それだけが心配だったのよ。歩ちゃん、随分育っちゃったけど、ちゃんと分かったよ。よかったぁ」
よくよく見れば、目尻に刻まれたしわといい、ちょっとみっしりとした下半身といい、そこそこの年齢を重ねた女性であることは明白なのだが、その幼い少女のようなしゃべり方は、そのふっくらとした造作の顔に不思議と似合って、奇妙に不思議な存在感をかもしだしていた。
「……瑠璃……子さん……どうして？」
切れ切れに、やっと斉藤が口からそれだけの言葉を紡ぎだす。饒舌が売り文句のこの男らしくもない。
「だって、二度と帰って来られないと思ってた歩ちゃんが、ここに向かってるって事は、無事におツトメがおわったということなんでしょう。だったら、迎えにこなきゃ、ハルカ姐さんに申し訳が立たないわ」
「……おつとめ？」
瑠璃子さんと斉藤が呼んだその女性の、その言い方に引っかかった飛竜がそこに突っ込む前に、ふと危険を察知する野生の本能が警報を立て、飛竜は目線だけ動かして周囲を素早く見渡した。と、いかにも『そのスジの』というしかない風体の恰幅がいい男が一人、小面憎いくらいの悠々とした足どりで近付いてくるのが分かった。警官も溢れているから、まあ、何か起こる可能性は薄いのかもしれないけれど、中の連中が買収されていたりしたら、目も当てられない。
斉藤がその女性の抱擁から逃れようとしているのはどう見ても明らかだったが、いかにも肉感的といった風情の年増におもちゃにさ

れるのは、同じ男としては羨ましいと断じていいシチュエーション
なので、飛竜は取りあえず放っておくことにして、近付いてくる男
がどういう行動に出るのか油断なく身構えた。
ところが、身構えた飛竜を思いっきり嘲るかのように、男が深々
と丁寧なお辞儀をくれる。
「ボン、お帰りなさいまし……」
斉藤が顔だけでがんばって声の主を探して、そして、その頭を下
げた男に行き当たると、ちょっと見たことがない種類の複雑な表情
になった。
「……樺崎さん……」
「覚えていてくださいましたか」
斉藤をがっちりロックしていた女性が、すっと抱擁を解いて横に
避けると、そのヤクザ屋といった男の方へ斉藤を送り出すようにし
た。面と向かい合うと、特別大柄ではない斉藤は男より一回りは優
に小さい。
「若頭に御足労頂いて恐縮です……って、若頭は、さすがに卒業さ
れてますよね、いくらなんでも」
「それは、わしがロートルになってるって厭味ですかい。ボン」
「その呼び方はいい加減、いくらなんでももう勘弁してください」
「ボン、お前、呼び方を決めるのは呼ばれる方じゃないっていって
る割に、いつも文句つけるよなぁ」
タカの暢気な声が響く。いつもながら、この男はどんな雰囲気だ
ろうと自分の調子を崩さない。超絶マイペースは、ここまで行くと
芸の域に入る。
「優美ちゃん、お前にだけは、旧イギリスの観光名所呼ばわりされ
たくない」
「そっちはベンでしょ」
「ご名答」

この二人の会話のペースの速さに付いて行けないのはいつものことだ。飛竜は回答が出てから、最初の斉藤が言った意味に気付いたが、蒸し返すのも今更なので黙っていることにした。

「それにしても、大げさじゃないですか、これ。スプレー行為ですか？」

耳慣れない単語を口にして、斉藤が、どこを指すでもなく、掌を上にむけてさらっと周囲を満遍なくなぞる。大げさなのは警官たちなのか、それともその筋の人の集団なのか、どちらともとれる仕様だ。

「派手でないカマシなど、しない方がマシですよ」

「……それも、そうだね」

「スプレーなんちゃらって何？」

疑問に思ったことを何時もそのままにしないで、ついでに剛速球で聞いてくるのは、相変わらずのタカだ。

「縄張り主張と自己アピールに、おしっこなんかを吹きつけて臭いつけする動物の習性の一つですよ。マーキングともいいますね」

「じゃ、このおっかなそうな強面の人がオスで、歩ちゃんが壁？」

文句なく強面の人間に、面と向かって強面と断言するとは、タカは流石だ。

「こちらは？」

大物の貫禄十分に、男が斉藤に促す。

「僕の友だち、で、今日は彼の奢りで騒ぐことになっているんだ」

これはきっぱりと指さされて、飛竜は先だての賭を思い出した。なるほどという気持ち半分、卑怯者を弾劾する気分半分だ。ヤクザ屋さんのカテゴリーのＶＩＰとかいう人間が乗っていたかいないかが賭けの対象で、それを投げかけたのは自分で、それは間違いない。だけど、こいつにその自覚があるのだとしたら、何でそこで無謀な

博打を止めなてくれいいんだ。しかも、ちゃっかり便乗しているし。
「悪いけど、俺はタカとは賭けたけど、お前とは1ユニバだって賭けちゃいないからな」
1ユニバ。その響きが気が重かった宿題を斉藤に思い出させた。けれど、斉藤はそのことは取りあえずおいて、多分この二人が自分にとって何者なのか気になっているだろう友人達に、家族みたいなものである彼らを紹介することにした。
「えっと、で、この人が瑠璃子さん。僕の父の内縁の奥さん。僕の亡くなった母も、父とは夫婦ではなかったから、瑠璃子さんは義母にもならないんで、名前で呼んでる。僕の初恋の人」
「えーっやっだぁ、歩ちゃんったら、もうふざけて。全く、いつのまにそんなヨイショな科白吐けるような大人になっちゃったのよ」
軽くいなしつつ、女はまんざらでもないといった嬉しそうな顔をしている。全く無表情に近いいつもの斉藤の顔が、緩く微笑んでいるのをみて、タカは何となく、今のひと言は全く斉藤の本心なのかもしれないなと、何となく思った。
「で、樺崎さんは、一般名称がいわゆる暴力団ってやつの、僕の父がトップとってる青山会ってとこで、僕がここに住んでたころは若い衆を束ねてた人。今、何してるのかは、知らないけど、亡くなった母の妹、つまり僕の叔母の連れ合いだったから、えっと、僕との関係は……えっと、やっぱり他人かな？」
同意を求められた樺崎がどう応えようか一瞬迷ってから、軽く何回か頷いた。何を数えているのかしらないが、指を一生懸命折って考えていたタカが途方に暮れたように凍りついている。ええい、もう面倒だ。飛竜は決めつけた。
「叔母さんのご主人だったら、親戚でいいんじゃない？」
「……もとご主人」
律儀に斉藤が訂正したので、飛竜は引っかかった。生別にしろ、死別にしろ、連れ添おうと決めた相方と別れたという事実は、誰に

とっても愉快な思い出でも、事情を知らない初対面の人間の前で話題にされたい思い出でもないだろう。なのに、わざわざそこを論（あげつら）った無神経は、らしくもない。人には触れられたくない過去があることも十分承知しているし、何もかもを白日の下に曝そうというのは愚かな行為ということをわきまえているはずの斉藤とも思えない。

「ボン、その話は、止めときませんか」

　樺崎の声が1トーン低くなる。飛竜はちょっと背筋がぞっくりとする。

「樺崎さん……腰抜けの……ままですか」

　斉藤が、言い捨てるようにして歩きだした。彼がどこに向かおうとしているのか分からない飛竜と高柳は、ちょっと樺崎や瑠璃子と斉藤の背中を交互に見ていたが、樺崎も瑠璃子も歩いていく斉藤を追うでもなく、ただ見送るように立ち尽くしていた。

　飛竜は仕方なく、ちょっと無礼な言葉を残して去っていく友人の尻拭いの思いも込めて、に二人に頭を軽くさげると斉藤の背を追いかけた。

10．夜光杯（前書き）

涼州詞　王翰

葡萄美酒夜光杯　葡萄の美酒夜光の杯
欲飲琵琶馬上催　飲まんと欲すれば　琵琶馬上に催す
醉臥沙場君莫笑　酔うて沙場に臥す　君笑（わろ）うこと莫かれ
古來征戰幾人回　古来征戦幾人か回る

【異訳】

美味しいぶどう酒は、おしゃれにガラスの器じゃなくっちゃね
飲もうとしたら　馬の上から琵琶の音。これまたちょいと粋じゃござんすね
酔っぱらって　砂漠の戦場で倒れても、笑うのだけはご勘弁
戦争なんかに行っちゃったら、何人帰ってこれると思ってんのさ
（そうそう、飲も飲も～）

10．夜光杯

「まずそうだなぁ」

呆れたように高柳が斉藤を評する。

「……美味しいですよ」

「全然見えない」

「そうですか？　美味しくいただいてますよ」

くいいっと猪口（ちょこ）を傾けて、中に入った冷酒を一気に流し込む。美味しいと本人は言うが、斉藤の飲み方ときたら眉間に深くきつくしわを寄せ、飛び切り濃く煮出した漢方薬でも流し込んでいるといった表情なのだ。普段の斉藤といえば、飲み会でも酔っ払うのは嫌いだからと、アルコールは付き合う程度のペースでしか飲まない男なので、今日のスタートダッシュの速さに驚いて、普段は先にさっさと酔っぱらって後は知らない主義の高柳は、逆にペースを落としていた。

斉藤としては、よく冷えたまろやかに心地良い液体が、胃袋にストンと落ちたとたんに、どういうわけか周りをかっかとあったためる、ちょっとアンビバレンツ（二律背反）な感触をそこそこ楽しんでいたのだが。

「そんなに飲んだっけ？」

しつこく言い募る高柳を無視して、斉藤はもう一回猪口に酒を満たした。度を過ごしていることは分かっている。けれど、さっきは、腕の中に瑠璃子さんがいたのだ。彼女を抱き取っていた感覚が、生々し過ぎる。

――十二年か。

あの人は老（ふ）けたなと思う。ほんの子供だった自分が、もう、どこ

にもいないのと一緒で、あの時、自分を抱きしめて、泣き方さえ思い出せなくなっていた自分に代わって号泣してくれていたあの人は、もう、過去のあの瞬間にだけ存在している幻の人なのだ。分かっている、分かっていた。時間は戻らないのだから、思い出の中にしか、自分がどうしようもなく惹かれるあの人は生きていないのだから。

老けたという言い方は、まだ五十にはならないはずの瑠璃子さんに失礼かなと、斉藤は律儀に思いなおす。十二年前にあの人のふくよかな胸の感触に、焦燥にも似た奇妙な感情も乱れを覚えた少年の日、自分はあの人にすっぽりと包まれる程度の質量しか持っていなかった。そして、十二年分を足し算した挙げ句の今日のあの人の胸は、やっぱりふくよかで柔らかかったけれど、その肩は斉藤の友人たちに比べれば随分と貧弱な彼自身の腕の中にすら、すっぽりと収まるほどに小さかった。

「ねぇ、優美ちゃん」

斉藤はおっつけで猪口をさっさと空にすると、手をのばして高柳が飲んでいたワイングラスを取り上げて、その中身を自分の小さい器にちょっと取り分ける。

「ワインが飲みたいなら、追加で頼めばいいじゃん」

高柳がグラスを取り返す。しばらく、珍しく酔っぱらいモードに突入しつつある斉藤を見つめていた高柳は、言わなくていいことという気もしたが、子供みたいなもので、彼は持ち前のもやもやした疑問をおいておくのが嫌いなのだ。子供で結構、それが自分だ。

「あれ……、本気だった？」

もともと見掛けほど繊細でも心配りが利く方でもない飛竜は、高柳が言った「あれ」の意味するところが見当もつかなかったので、話に加わらずにビールには似合う枝豆の殻を行儀よく並べながら自分もちょっとだけ酔っぱらっていることを楽しんでいた。

自立心旺盛というよりは、究極のところで自分と周りとの一線を

くっきりと引きたがる斉藤の臆病が、不快というよりは単に寂しかった飛竜にしてみれば、珍しく乱れたがって頑張って乱れようとしているかに見える斉藤が、自分たちの前でなら安心して崩れることができるほどには、信頼してくれているのかなという単純な事実が、何となく嬉しくかった。

　斉藤みたいな、さりげなく人を支えるばっかりで、甘え下手な男が甘えたがっているのは、珍しいけれど悪い気分ではなかった。それなら、やり方が不器用だろうがなんだろうが自分だって「受け止めてやれる分だけはきっちり受け止めてやるからな」とどんとこいモードに入らなければ、甲斐性なしと言われても仕方がない。

「ん？」

鈍い飛竜のように、高柳が何を聞いたのか分からないからの応(いら)えか、単純にいつもの水臭さ全開ではぐらかしているのか微妙だけれど、そこのところ、大人の対処ができない病気の高柳は容赦なくストレートに聞き直した。

「るりこ……さんって人……」

「……ああ」

その時のちょっと間抜けたような斉藤の表情を見ると、やはり相当酔っぱらってしまっていて、いつもの切れすぎる回転速度がかなり鈍っているようだ。

「僕はね……好きだったよ。あったかくて、大きくて……いつだって泣き虫な瑠璃子さんが……ね。だけど、あの人は……親父の女だから……」

「親父さんの女じゃなかったとしても……ちっとマセすぎじゃない？　ガキのころの歩ちゃんってば……」

　ぷっと軽く飛竜がふきだす。多分、オスの本能がぞろぞろっと目覚めだす十かそこらのお年頃のかわゆらしい斉藤少年だったころ、さっきのあの人は、あんなふうに熟れ切った豊満な肉体と、奇妙に

幼い印象はそのままの、二十歳かそこらのメス盛りだったに違いない。
　教室に並んでいる同じようにそういう意味で不器用な年頃の子供たちが、硬い蕾をくすぐりあうような蒼い関係を一足飛びに抜かして、父親の恋人に、ほの暗く煩悩していたのだとしたら、なかなか見かけによらず、「やるな」というところだ。

　しかも、切れ切れの少ない情報から察すると、そのころに亡くなった斉藤の母親という人も、かの瑠璃子さんも、斉藤の親父さんの正式の妻では無いらしい。金と暴力を沢山持つものが勝ち抜いていく世知辛い月の地下で、相当の力を持っているようなのは、ほんの手下にすぎないらしい、樺崎と呼ばれた男のただならぬ迫力だけで押して知るべしだ。
　あの男も、多分そのひとりということだろうが、斉藤の父親という男には、彼のためになら命を喜んで投げ出す、愚かな男が一人や二人でなく存在していることだろう。瑠璃子と斉藤の母親のことをさっすると、多分女も。

「ねぇ……優美ちゃん」
「タカ……」
「うん、どうでもいいや……タカ。で、パンダのシッポの色って、白？　黒？」
「へ？」
　なんで、この文脈でパンダになるのか分からないまま、高柳はなけなしの知識を総動員してみた。ゾウ、キリンと負けず劣らず子供たちに人気な動物園のスーパースターのパンダだけれど、どんなに考えても目の周りを垂れめ演出している黒と耳の黒しか即答できない。腕のどこまでが黒か、肩が黒だったか、足は黒だったか、尻は黒だったか。尻が黒なのはマレーバクか。
　腕組みをしながら、確かに見たことがあるはずのパンダの尻を思

い出す。うん、確か汚れて茶色だった。黒は汚れても茶色にはならないから白に違いない。顔と同じパターンが応用できるなら、白が濃い場所にはクッキリとした黒だ。

「黒」
「……なんで？」
「なんでって」
くだらないことまでよく知っているし、本当に百科事典が組み込まれているんじゃないかと疑いたくなる、データマン斉藤のデータバンクに、パンダのシッポの色は間違いなく入っているのだろう。だったら、斉藤が知りたいのはパンダのシッポの色ではないんだろうし、じゃあ正真正銘の支離滅裂全開酔っ払いだったとして、何を彼は知りたいのだろう。高柳は、もともとアルコールに強いということも、普段からよく嗜んでいるということも手伝って、まだまだ頭はノーマルモードのままだ。
「凄くよくできてるアース・アフリカのジオラマにさ、横縞のシマウマがいたら、どう思う？」
高柳は、じっくりと考えてみた。アース・アフリカといえば、サバンナの大地。ンゴロンゴロに闊歩する動物園でのスター達の故郷。視覚を騙す光の魔法が、巨大な太陽を大地に蕩（とろ）けさせる夕方。ライオンがうっそりと横たわる。ハイエナたちが甲高い泣き声を立てる。黒いシルエットになって並んで歩いていくゾウ。全てを見下ろして、悠然と高木の葉（は）を食むキリンの長い首。うん、イメージは完璧。そこに、えっとパンダじゃなくて、おくのは横縞の……シマウマの群。

「……変」
「でしょ？　なのに、なんで、みんな、パンダのシッポが黒で平気なんだよ」
くいっと猪口入りワインを煽る。それから、タンッという小気味良い音を響かせて斉藤が猪口をテーブルに着地させる。

「面積の問題じゃないか？」
「そういう問題か？」
斉藤がすぃっと目を細めて、枝豆のさやの行列を延長しつつある飛竜を指さし、そのまま、ずぃと高柳にスライドさせて凄むような声で言った。
「パンダのシッポが黒で平気なら……、横縞のシマウマだって平気なはずだろ？　横縞のシマウマが平気なら、首の上に頭がなくたって、平気なはずだろ？」

普通、平気じゃない。そう言う当たり前の突っ込みをする前に、斉藤がけたけたと爆笑し始めた。完全に、酔っ払い一丁上がりのようだ。そのままの勢いで徳利目掛け（とっくり）て伸ばされた斉藤の手の先から、ひょいと徳利を奪って高柳が醒めた顔で断言した。「今日はここまで、それ以上呑むの禁止」
「なんで、まだ酔っぱらってないけど……」
酔っていると言っているうちは良いが、酔ってないと言う時点で酔っ払いは自制心とさようならしているものだ。大体、良識のある大人の飲み会では、羽目を外した酔っ払いが一人出ると、速攻でしらふに戻る人間がいるものだ。まだ、枝豆のさやを並べている飛竜はおいておくとして。高柳は、斉藤の前に氷がすっかり溶けて汗さえ殆ど垂れた水入りのグラスをついと押しやった。
「はいはい、まだ酔っぱらってない。大丈夫。分かった。だから、飲む」
水はアルコールを冷ましてくれるはずなのに、斉藤は、そのままコップいっぱいの水に溺れて沈んだ。

１１．夢李白（前書き）

夢李白　　杜甫

死別已呑聲　死別（しべつ）は已（すで）に聲（こえ）を呑（の）めども

生別常惻惻　生別（せいべつ）は常に惻惻（そくそく）たり

【異訳】

死に別れた日にゃ　泣くしかないが

生き別れた日にゃ　毎日地獄

11．夢李白

「紛い物でも……空を作ればいいんだと、思うんだ……ここ」
起きているのか、寝ているのか、そんなことをもごもごと斉藤がしゃべる。
「そだね」
　酔っ払いには逆らっても無駄だから、何も考えずに飛竜は相槌を打った。それに確かに、月の地下都市は、壁と天井と床と、壁と天井と床でできて、しかも全体が人工なのではなく天然の形にまだらに人手がはいっているので、どこもかしこも十分に高いとはいえない天井は独特の閉塞感がある。確かに余り居心地が良い空間ではない。

　高柳が育ったいわゆる番付き（ナンバーズ）コロニーも空がなかった。天気は何時も基本的に晴れ。それは、余り生き物が住環境に対して感じる本能の部分に快適ではないものだ。
　しかも壁や天井がどういう原理かで発光しているこの月の街並みには、暗闇さえないかのようだ。時計だけが、昼と夜とを切り分ける街。オーダーストップで追い出されなければ、今が夜中とは思えなかっただろう。脳味噌の健康には、シマウマのようにツートンカラーで闇が挟まれているのが丁度いいのだ。そんなこんなで月で暗闇を求めるなら、個室（コンパートメント）にこもって明かりを消すしかないようだ。

「俺もガキんちょのとき、ずっと、空ってのに憧れたな」
　高柳が誰にとでも言うのでなく呟（つぶや）く。月の重力は宇宙生活には相応しい。重力の軛（くびき）から軽く解放されているけれど、モノが地面に当然と落ち着くぐらいの整然はある。体格的には、一番でかい高柳より、基本筋力が一番充実しているのは、バージ・シャトル・ライダーである飛竜だ。

閉店で店から追い出されたとき、だから最近はちょっと微細重力下作業が多いとかで力仕事には自信がないと言う高柳でなく、まだルナGシフトしていない飛竜が、完全に酔いつぶれて呼んでも叩いても起きなかった斉藤を仕方なく肩に担いで歩いていた。テラG上がりにはふらつくほどに足どりが軽くなりすぎてしまうルナGだから、斉藤程度の加重はむしろ有り難いぐらいだ。寝言に限りなく近いひとり言のような色合いで、空が見たかったという斉藤をどこに連れて行くべきか悩む。

飛竜が今日帰る予定の宿は、この地下と地上の境目にある上の世界と、下の世界が混じり合うこの界隈にあるホテルにあるし、高柳が帰るべき部屋は、上の世界のインフレータブル・ドームへより近い宿舎だ。里帰りと豪語していた斉藤の家は、多分容易に外からの人間を受け入れないより深い層にあるのだろうし、そこへ自分たちは多分たどり着けない。

飲み屋でも、こうして歩いている街並みでも、自分たちを邪魔しないようにという配慮を利かせてか遠巻きではあったけれど、ずっと確かに樺崎の気配があった。というのは、ずっと樺崎の手下の男共が自分たちをさりげなく囲んでいたのは飛竜には分かっていた。ここが、悪名高い銃火器類の無法地帯でさえなければ、地球仕様の飛竜は、大柄なヤクザ屋さんとタイマンを張ることになぞ、毛先ほどの恐怖もないのだけれど、この街では勝手が違う。

「……樺崎……さんっておっしゃいましたっけ……」

タイミングを図りきったように、自分たちのところに黒塗りのカートが横付けされる。開いたドアから、忘れようにも印象深すぎる樺崎の巨体が吐き出された。

「ボン……いえ、歩さんをお預かりしましょう」

飛竜は樺崎という男をじろじろと観察した。ヤクザな商売をしているのだろうに、きっちりと筋が通ったものを感じさせる。この月という場所で、こういう見事な体型でいるためには、しっかりと意

志を持って体を作り上げているということだ。だから、そういう美学を持った人間というものは、多分、刃物を鞘に納めることの大切さを知っているはずだ。飛竜が軽く頷くと、運転席から出てきた別の男がカートから下りて扉を開ける。斉藤の体をカートの後部席に押し込めながら飛竜は、樺崎に問いかけた。

「どうして、斉藤は十数年も前にここから出ることができたんですか？」

樺崎が不思議そうに聞き返した。

「出ることが『できた』、ですか？」

飛竜は、樺崎の方は向かずに、暢気につぶれている斉藤の寝顔を見たままで言った。

「大人なら……分かるんですよ。樺崎さん。僕も……自分の育ったところから逃げたかった。だから。だけど、子供は普通逃げることができない……でしょう。斉藤が実の親父さんだの、義理のお母さんだの、さっきの瑠璃子さんやあなた方との関係から逃げたかったとしても、多分、普通は無理でしょう。自分の力で自分の行動を決めることができないのが……子供だから」

大人はどこにいても、自分の責任でどこかにいるのだと思う。子供はどこにいても、その子の責任ではない。幸福であったとしても、不幸であったとしてもその意味で変わりなく均等に弱者である。

だからその環境を自由に自らの意志でかえようとすることができるのが大人であって、それができないまま環境にへつらうしかないのが、子供なのだというふうに飛竜は思っている。

不幸な場所に生まれたら、どんなに理不尽に踏みにじられようと、最悪が当たり前の日常だろうと、そこに居場所を捻り出すことしかできないのが普通の子供だ。だから、斉藤歩がどれだけここにいることを呪っていたとしても、十歳やそこらの少年のころに、ここか

ら一人旅立って、軍という場所を選んだというのは納得できない。どう考えても不自然だ。大人の意志がこの街から斉藤をはじき出したことだけは間違いないのだ。
「なんか、勘違いしてらっしゃいますね。歩さんは好んでここから出られたわけじゃありませんよ」
飛竜がとまどう。
「誰が追い出したんでもなく、たった十歳のガキが軍人に志願したのだとでも？」
樺崎が仕方ないというように苦笑いして首を振る。
「確かに、歩さんが決めたことじゃなかったですよ。だけど……ここは、歩さんには辛すぎる場所になっちまってたでしょう。それも、なんかの采配かなと思ったりもしましたね、あの当時は。ハルカ姐さん……歩さんのお袋さんのお葬式でね、ほんのちんまいガキだった歩さん、泣かなかったんですよ。瑠璃子さんが、歩さんに代わって頑張って沢山、沢山泣いたんですけどね……一粒の涙も結局……」
樺崎が難しい顔になって、少し逡巡するふうにしてから、口をかすかに動かして言葉を絞り出した。
少しだけ二人の会話を聞いていた高柳がぽっつりと口にした。
「もしかして……全然違うかもしれないけど……歩のお袋さん……って、頭……」
一瞬で、樺崎の顔色が変わる。
「……歩さんが、話したんですか？」
高柳が首を振る。
「黒いパンダのシッポ、横縞のシマウマ。これ何だか分かりますか？」
「……なんですかい、それは」
飛竜の疑問でもあるその問いかけを、樺崎は高柳に投げた。
「……そこにあるはずの、あるがままの形でない……、または、あってはいけないものがある……ってことかなと思ったんだ」

　そのときの高柳の瞳は、ちょっと周りが怯むような、何時もの真実をありのままにしか見ない峻厳な色を宿していた。
「……そうなんですか？」
　樺崎が曖昧に相槌を打つ。
「多分だけど……。で、歩はその勢いで言ったんですよ。それが平気なら、『首の上に頭がなくたって、平気なはず』って……」
　そういう文脈で、斉藤の言葉をとらえることができていなかった俗人である飛竜は、返す言葉を失って、その少し品位に欠ける天使の瞳に吸いつけられた。高柳が飛竜に拘りがないといった、いつもの飄々とした表情のままで続けた。

「俺には、首の上に頭がないのは嫌だ……、横縞のシマウマも気持ち悪い……、パンダのシッポは白じゃなきゃ許せない……って、聞こえた。だからなんとなく」
　特に構えたようでもない高柳の言葉に、どうしようかもっと激しく葛藤しているような様相をしていた樺崎が、諦めたように、自分に言い聞かせるように頷いた。
「ほんの青二才みたいなふうでも、歩さんが友だちしてるだけのことがあって、怖い人だ。あんた」
「俺が恐かったら、世の中に怖くないものがなくなっちゃって大変ですよ」
　樺崎が諦めたように、歪んだ表情を更に歪ませる。
「ここは外の人が考えているよりも、ずっと暴力が蔓延してるんですよ。歩さんの親父さんを潰したかった人に、あの時、歩さんは、お袋さんのハルカ姐さんと攫われたんです……」
　樺崎が苦く微笑む。
「昔の歩さんは、こまっしゃくれたやたらと物覚えが良すぎる気味が悪いガキでね、わしは苦手だった。一度見たことは、滅多に忘れないし、わしらにはさっぱり分からねぇ、学者先生が研究するような難しい本を、普通のガキがマンガでも見るみたいにニコニコしな

がら読んでるのは、はっきり言ってなかなか気持ち悪かったですよ」
遠い目つきになって、樺崎が誰かの口真似をしているようなしゃべり方をした。

「そんなに簡単に、何もかも忘れて、カバさん、怖くないの？」
「げーっ、かわいくない」
高柳が即答する。樺崎が力が抜けたのかくすっと笑って、そのままの口調で続ける。多分、自分たちが出会うことができない、少年の日の、かわいくないデータマン斉藤。

「ねぇ、みんなが忘れちゃったら、最初からいなかったのと、どう違うの？」
高柳が眉間にしわを寄せる。
「めちゃくちゃ、難しいね、それ、樺崎さんはちゃんと、斉藤少年が納得いくように応えられたの？」
「できるわきゃ、ありませんよ」

それから、樺崎は穏やかになっていた微笑を納めて、冷たく苦い表情に戻って、続けた。
「警察が、瀕死の歩さんと、冷たくなっちまったハルカ姐さんを見つけたんですけどね。命こそはめっけましたけどね、歩さんは、相当酷いことでしたよ。幾ら天才でもガキはガキでしょう。女子供を平気でいたぶれるような奴ぁ、外道ですよ。歩さんがあのとき、どんなに怖くて、辛くて、痛い思いをしたのか考えると、とっくにぶちのめしてやった連中ですが、少なくとも、あと百編ぐらい殺してやりたいと思いますよ」
飛竜は拳を握りしめていた。俺もそいつらをぶちのめしてやりたい。樺崎はまだ続ける。
「だけど、ハルカ姐さんも酷かった。手も足も爪が全部剥がれちま

って、つぶれちまってた……。白くてそりゃあきれいだった手足も、殴られたどす黒いあざと、焼け焦げた跡があってね……。親父さんを苦しめるためにやるだけなら、さっさと命だけ取ってくれたら、まだ感謝の仕様もあったかもしれませんけどね、ありゃあダメです、人間ができることじゃねぇ。挙げ句の果てに首から上が、整形できねぇって言われるほど見事に吹っ飛ばされちまったら、幾らヤクザの女になったのが罪だって言われたとしたって、幾らなんでも割にあわねぇですよ……。歩さんは、半年以上も何もしゃべらなかったから、多分見ちまってると思うんですよ……ハルカ姐さんが、女としても人間としてもいたぶられんのも、頭が吹っ飛ばされる瞬間も、自分自身も痛めつけられながら……」

　飛竜が絶句する。握りしめていた拳が、逆にだらしなくほどかれる。高柳が流石に眉間を苦く歪ませる。あの口から絶えず紡ぎだされる怒濤のおしゃべりは、最早斉藤という男のイメージを確固と彩っている。しゃべりだしてこの方、ずっとおしゃべりだったとしか思えない斉藤が、幼いころに受けた余りにもの痛手のために、長期間をしゃべらずに過ごしたというのは、それほどの恐怖と衝撃が、幼かった斉藤を押しつぶしたということだ。樺崎は、ぽっつりと呟(つぶ)くように続けた。

「気でも失ってってね、ハルカ姐さんの頭が吹き飛ぶ瞬間だけは見てないで済んでたとしたら、神様って奴に感謝くれてやってもいいと思いますよ」

　高柳は自分でそう話をふったものの、世間話のようなあっさり加減で血なまぐさい悲惨な出来事を語る樺崎に突っ込むこともできずにただ、聞いていた。自分の周りにいた、優しかった女たちも、無力に人生に押しつぶされていたけれど、幼かった斉藤を痛めつけただろう暴力にも、今更怒ることもできず、無力感をかみしめることしかできない。今の自分の手を、幼かった日の彼にさしのべることができたなら、どれほど嬉しいだろう。けれど、そのころは自分も幼くて、自分も今ある場所にただあるしかなく、月は存在すらも遠

かった。

「瑠璃子さんはね、生ける屍ってのがまさにどんぴしゃなボンを、ずっと介抱してたんですよ。ハルカ姐さん、歩さんのお母さんへの恩返しとでも思ったんでしょうかね。あの瑠璃子さんとハルカ姐さんの関係ってのは、本当に傍から見てても、けったいでね。普通は一人の男を複数の女が一緒につかかってりゃ、酷い仲になって当たり前だと思うんだけどね、ハルカ姐さんは、凄く瑠璃子さんを可愛がってたし、瑠璃子さんは歩さんを、めちゃめちゃ可愛がってたんですよ。あの通り、瑠璃子さんってのは、ちとばかし頭が足りない分が色気に行っちまってるような人ですからね、歩さんを可愛がってるってたって、女の子の人形遊びみたいなやり方でしたけどねぇ。だから、怖いぐらいに頭が切れる人だったハルカ姐さんが何で、あの人を可愛がってたのか、本当に今でも不思議ですよ」

話がそれてしまったというように、ちょっと照れ笑いのような表情をかませて、樺崎が続けた。

「体の傷が良くなるまで片時も離れないで看病したのも、瑠璃子さんですしね、退院したところで泣くことも、しゃべることもしなくなってた歩さんを、朝から晩まで、寝るときだって始終手放さないで寄り添って、赤んぼにでもするように抱きしめてたのも瑠璃子さんでしたよ。あの時も、ハルカ姐さんの葬式でもね、瑠璃子さんは、わんわん子供みたいに泣いててね、包帯だらけの歩さんを抱きしめながらね、ハルカ姐さんためにいっぱい泣いてあげようとか、泣いていいんだよってなことを、歩さんに言ったんですよ」

ありありと、飛竜の中で、見てきたようにその光景が甦るかのように想像できた。葬式であれば多分、黒い服を着ていたのだろう、あの怪しいまでに色っぽい瑠璃子さんが子供のように泣きながら、包帯だらけで表情がなく言葉も失っている幼い歩を抱きしめる。

――泣いてあげよ……。いっぱい、いっぱい泣いてあげようよ……。
――ねえ、泣いても……いいんだよ。

樺崎が、似ているのか、似ていないのか、少年の日の斉藤歩の言葉をなぞった。

「泣き方が、思い出せないや……」
もの問いたげになった飛竜の視線を感じてか、樺崎は付け足した。
「あのとき、歩さんが言ったんですよ。泣き方が、思い出せないって、そう……」

１２．天地悠悠（前書き）

登幽州台歌　　陳子昂

前不見古人　　前に古人（こじん）を見ず
後不見来者　　後（しりえ）に来者（らいしゃ）を見ず
念天地之悠悠　天地の悠悠（ゆうゆう）たるを念（おも）うて
独愴然而涕下　独（ひと）り愴然（そうぜん）として涕下（なみだお）つ

【異訳】

自分より前に生まれた人なんかに会えるわけがない
自分より後に生まれた人にだって会えるわけがない
天地は限りなく永遠につづくみたいに見えるのに（なのに人間は？）
独り　悲しくて　いたくて　泣いてるんだ　（笑えば？）

12. 天地悠悠

シャコというコードネームで呼ばれる男は、ぐるぐる椅子と呼んでいるコロ付きの椅子にふんぞりかえって、腕組みをしていた。眉間に刻まれたしわが、男が不愉快を感じていることを物語っていた。

男の前面にある総合端末のモニターに一つの部屋が映されている。そこは紛れもなく拘束されて取り調べを待つ被疑者を収監するための、殺風景な個室だ。小さい部屋の八割をしめているのはシングルのベッド。それだけで、部屋の凶悪なまでの狭さが推し量れる。隅に、使っているときも頭は完全に見える、申し訳程度の高さしかないパーティションで仕切られた便器。それから洗面のためだけのちょっと壁がくぼんだ程度の水場と、他人や自分を傷つける武器にならないようなフィルム製の鏡面シート。どこに壁にもありふれて存在している総合端末もなく、潤いを演出するための置物一つ、気を紛らわせるためのものが一つとしてない部屋。

モニターの向う正面、男が背中を向けている方にあるドアの扉が開いて、ルナG独特の間延びしてかすかな足音が聞こえる。

「シャコ、例のお客さんに変わった様子は？」

外出から帰って来たらしい、この部屋の統括責任者の岸が、羽織っていたコートを脱ぎながら何気に呟く。シャコは待っていましたとばかりに岸に突っかかった。

「この任務から外してください。幼児虐待の片棒を担ぐのは、趣味じゃない。腐っても鯛、じゃないけど、警察官として」

「火遊びをしていて、家を燃やして死人を出してしまったら、幾ら幼児でも罪がない（イノセント）と言えるのか？」

シャコは憮然と言い募る。
「家の中土足で上がり込んで、駆けずりまわった程度でしょう。死人どころか、被害の一つも出ていない」

＊＊＊

「近いな、この辺か？」
人造の構造物など比べ物にならない強度を誇る地殻というものを頼みに、火力が当たり前に使用されるルナ自治区では、基本的な防衛スタイルはやはり重火力対応にするしかない。地球以外では滅多に見かけることがない分厚い装甲を施した特殊車両に登載された、総合端末には、さまざまな電波情報データが流れ込んでくる。そのウェーブは、知らない人間には子供のなぐり書き以下の意味しか持ち得ないが、ＳＩＧＩＮＴ（シギント）と呼ばれる、彼ら通信、電磁波、電気信号などあらゆるシグナルを分析することを本分とする人間にとっては、意味がないどころか、宝の山にも等しい情報をふんだんに含んでいる。
コンピュータはその有史以来、常にハッカーという存在と寄り添ってきた。誤解されることも多いが、ハッカーというのは別に情報の破壊や愉快犯的にシステムそのものを破壊する工作をしかける異常者に冠される呼び方ではない。もちろんその手の、歪んだ方向に技術を駆使しようとする人間も、不在だったことはないが、そっちの方の連中のことはクラッカーと呼ぶのが通（つう）というものだ。
ハッカーという存在は、コンピュータシステムそのものや、それをただの箱ではないもの足らしめている機能そのものに詳しい人間のことを呼ぶ。そもそもが、少々雑だけれど、うまく動くように間

に合わせの仕事をしてくれる人間をそう呼んだのが語源であり、ハッカーという存在は、堅実堅牢なシステムを牛歩宜しくな足どりで、小さい粗を丁寧に駆除して巨大なシステムを築いていく種類の技術者を呼ぶものではない。

ちょっとした不具合を解決するまでの間、ちょっとしたパイパスをちょんとシステムに付け足し的に組み込んで、既に稼働しているシステムを、恒久を目指して稼働させ続けるために、正規の技術者が積み木を組み直すまでの間、取りあえず止まらないようにさせるというような場面で、彼らの面目は躍如される。

そんなふうに専門的かつ複雑かつ、フットワークの軽いやっつけ仕事ができる人間というのは、とにかく、コンピュータという、進化し続けて複雑なゆえに、脆弱性を常に根絶できないものが、最早捨てることとすら想定できないほど現実に食い込んでいる以上、必要不可欠なシステムであるとさえ言えるのかもしれない。

ここ数か月、ルナ自治区にある連合運営センターの情報保安室では、生命生息可能環境維持を司る制御を行っている大規模集約型コンピュータ・システムが頻繁に侵入されている形跡があることに焦れていた。トップセキュリティを誇るはずの、システムである。生命というものの基本ニッチである地球。そのニッチ圏外での生活を余儀なくされている地球外都市には必要不可欠なそのシステムに深刻な障害が生じれば、その結果は惨憺たるモノに間違いなくなる。

もちろん、都市維持の根幹に関わるシステムに、バイパスだのサブだのを用意していないわけではないが、それでも、システムのクラッシュというものは、いつだってささいな綻びから広がるのだ。小さい目のうちに摘んでおくに越したことはない。

今のところ、謎の侵入者は、悪さをしている気配はない。というより、侵入しているという形跡があるだけなのだ。システムに侵入してくるということ自体が、その者の並々ならぬ力量を物語ってい

たが、謎の侵入者はその形跡を隠そうとしていないようで、わざわざ侵入されたということを管理の人間が感知しやすいように、ことさらに足跡をのこしているかのようだ。

かつて人間というものの技術が地球上だけのものであったコンピュータというものの黎明期に、セキュリティーを突破できるということをシステム管理者に知らせるために、侵入した証拠だけも残していき、構築・管理側にその欠陥を知らせてくれる類のハッカーという者達が存在したらしい。今回のこの侵入者は、歴史を学んでそれに我が身をなぞらえている、一種の自己陶酔的使命感に酔っているナルシストなのか、ただの愉快犯なのか、それとも何かやらかそうとしている者の予告なのか警告なのかは不明だが、とにかくシステムの周りに堅固に聳えるウォールなど、穴をあけて突っ込んでくるのも、乗り越えてくるのも自由自在ということを、確かに誇示していた。

「シャコ……、キャッチ、何とかチェイスできそうです」

特殊車両のモニターに張り付いていた手下の技術者の声に、シャコは跳ね起きて技術者の肩ごしに確かに独特の波形が出ていることを確認する。

「リアルタイムか、アフターイメージか？」

「多分リアルです……」

「上々だ、どうだ、ラインか、エアか？」

「……どうやら、エアみたいですね」

「ミスターハッカーは、逆探も怖くないってことかな……。トラフィック・パルスは引っかかってくるか？」

「きてますよ、どうやら、つかまりたいんじゃないですか……」

「間一髪で逃げられるのか、楽しんでるってこともあるかな……チキンかよ」

「とにかく、慎重にな、やつがどこにいるのかブロックだけでも特

定するぞ。区画さえ絞れたら、後はローラー掛けちまって、容疑者を片っ端からとっ捕まえるのも、この際ありだ」
　シャコが、ハンドガンをカイデックス製ホルスターから引き抜いた。もちろん、官給品のホルスターは使用者登録がされているから、例えば悪意たっぷりの犯罪者がこの武器を奪おうとしても、ホルスターから銃が抜き取られることはない。
　月では、特別に好んで犯罪者になりたがっている種類の人間でなくても、ごく普通に銃を携帯しているところだから、ちょっとした諍い(いさか)が、殺人事件になることも珍しくない。冷たいハンドガンの感触は、ちょっと一発ぶっ放してみたいという衝動を、シャコのような男にもささやき掛けてくるほどに悪魔的ではある。この街に普通のコロニーみたいな犯罪率を実現させるためには、余程の強行権力が、銃廃止令でもぶちたてて、軍というレベルの圧倒的な火力差がある集団が、徹底的に蔓延する銃を刈り取らなければ難しいだろう。
「珍しいですね、シャコ。あなたが銃なんて」
「……月じゃあ、仕方ねぇだろう、どうだ、奴さん、まだ居るか」
「もちろん、気が付かれたら多分逃げられますからね、慎重にいってますよ」
　別の端末に取りついていた男がちゃかしてくる。
「親分みずから、捕り物に出張(でば)るんですか。アクション系は柄じゃないでしょうに」

——ミスター・ハッカー。奴が、どういう面をしてるんだか。どんなつもりか、顔ぐらい拝んでやりたいに決まってるじゃないか。

　謎の侵入者の散歩風景をウオッチしつつ、どういう径路でどう入ってきているのか、ゆっくりと慎重に辿っていた男が、豚でも踏んづけたような奇妙な呻きをあげた。

「やべぇ……」

「どうした？」
　シャコが聞く。
「……マジに笑い事じゃないですよ、シャコ、あんた、のこのこおでかけ準備している場合じゃないっすよ……」
「……だから、どうした？」
　心持ち青ざめて、男が、彩色された区画モデルが映された画面に、紅く点滅している一点をポインタで示す。

「そこか？　……えっと……？」
　広すぎる一角を占領している枠は、ルナ自治区の極東アジア領を、我が物顔で巣喰っている暴力団の一大勢力である望月組系の中でも、大所帯の部類に入る青山会（せいざんかい）の頂点にいる森本という男の居宅がある場所だった。
「じょ、なんかの冗談ですよね。なんだって、地下の連中が国にちょっかい出してくるんです？」
「三上さん、情報統括の岸さんに直通確保して。繋がったら、僕の携帯に繋いでくれ」
　シャコはショルダー・ホルスターに自分の銃を戻すと、その凶器を人目から遠ざけるべく上着を羽織り、特装車のドアノブに手をかける。
「シャコ……アクション系映画に、あんたみたいなゴム毬男の出る幕なんかありませんよ」
　声の主の方にチラッと一瞥をくれてからシャコは、そのトゲはあるけれど、我が身を思いやっての警告を発した主に言い訳した。
「ミスター・ハッカーの面、拝んでくるだけだ。岸さんとこに声をかけちまったら、二度とご尊顔を拝する機会がないだろうからね。どんな面してる奴が、写メしたる」
　シャコを止めようとした男が、ふふんと鼻で笑って肩をすくめた。
「好奇心が強いってのは、たしか死に至る病でしたっけね、シャコ。くれぐれも気をつけてくださいよ」

その言葉がおわらないうちに、車とドアは再び閉ざされたから、最後の気をつけろという、一番告げたかった言葉の部分が、内壁にぶち当たって砕けて落ちてしまった。

＊＊＊

することもないからか、少年はベッドに所在なげに横たわったまま、たまに寝返りを打つだけだ。この冷たく白い部屋は、屈強な大人の男でさえも、げんなりとやる気と精気をくじかれる。ましてや子供だ。狂わないでいてほしいという祈りなど、虚しく無力だろう。

眠っているときと、起きているときの区別は、その寝相にだけ現れている。起きて、最低限の身動ぎしかしない少年は、ぞっとするほどに虚無を湛えていて、少年が何百年も、不死を宿して生きていたのではないかと疑いたくなるほどに落ち着きくさっているが、眠ってしまったときは、逆に年相応の無邪気な元気さで、ベッドから落ちるのではないかというぐらい、寝相が悪い。

「イノセントだろうが、リアル・ブラックだろうが関係ない。ガキんちょをあんなところに閉じ込めて、岸さん、あんたどういうつもりですかい。しかも、履歴見たらわかるじゃないですか、お袋さん亡くしたばっかりで、自分だって酷い大怪我をさせられてる。体がどうにか動くようになったって言ったって、心は立ち直ってなんかいないですよ、絶対にね。そんな状態の子供を人気のない部屋に一人で閉じ込めるなんて、言い訳不可能、立派な虐待ですよ。そんな子にできることじゃない、恥を知りなさい」

　わざとらしく腕組みをした岸がいかにも面白そうに微笑んだ。
「なかなか、教科書的人道発言ですね。シャコ。こういうとき、警察官を目指した人と、軍を目指した人間との違いってのが、クッキリしますよねって、僕は思うんですよ」
「岸さん、今はあなたの世間話に付き合いたい気分じゃありません。いいですか、即刻あの子をあの白い檻から出してください。そうでないと、人権推進委員会に名指しでチクリますよ」
　岸は、モニターに映っている少年を、檻に入っている、例えばパンダのような珍獣でも観察しているような目つきで眺めていた。

「シャコが心配しているほど、堪(こた)えてないみたいですけどね。あの子は。もっとも、君の脅しに屈するからではなくて、あの子は早晩、客室から出すつもりです、ご心配なく」
　客室から出すという岸の言葉にちっと力が抜ける。岸はするつもりがないことを、その場しのぎで口にするような種類の人間ではない。有言も不言も全部ひっくるめて行動するような男なのだ。彼は言ったことも、言わなかったこともきちんと実行する。

「親御さんのところに、返すんですか」
「そんなもったいない。あの子は……ろくな教育も受けずに独学で」
「ろくな教育って、あの子は、教育をちゃんと受けてるって聞いてますよ、流石に大学までは行ってないみたいですけど、今高校生だって聞きましたよ」
　岸が首を振る。
「そっちの教育ではなくて、あなた方専門のコンピュータについてですよ。人の話は最後まで聞くものです」
　ごめんなさいというように、シャコが猫背になった。どうやら、お辞儀をしたもつりらしい。
「あの子は、独学で知り得たやり方だけで創意工夫して、システムに自在に侵入した。動機はなんだと思いますか？」

「ハッカーに動機なんてもんはありませんよ。河童が水があれば飛び込むのと一緒、山男が雪山に死ぬまで向うのも一緒。手ごわそうなシステムがあったら侵してみたい、そういう連中がハッカーになる。たとえこまいガキんちょだとしても、ハッキングに手を出した時点で、一人前のハッカーだ。普通に健全にコンピュータに惹かれる人間とは、そもそもの人種が違うんですよ。拳銃を手にしたとき的にぶっ放したいと思うか、イキモンにぶっ放したくなるかぐらいに違うんです。やつが百パーセントのハッカーだろうと、ガキはガキです。子供は守られるべきなんですよ。少なくとも法治国家ではね」

岸は真顔になって軽く首をふった。

「システムがあるから侵したくなるのがハッカー。流石、同じ穴に住んでいる人の意見は端的でいい。だけど、あの子はシャコが今言ったそういう種類の人間じゃない。あの子は警察のシステムに彼の知りたい情報があると思ったからやってみたまでだよ」

こんなガキがなんで警察にある情報が知りたいと思うんだ？　シャコは意表をつかれて考え込む。

そんなシャコの様子を見て、岸は微笑んだ。それから思いついたように、些か下品に、小指を立てた。

「たしかに、あの子は青山会の森本のコレだったお母さんと一緒に、対抗組織の百合根会の連中に拉致されて、一連の事件の中で、お母さんを亡くしている」

「コレっていうことは、嫡出子じゃないってことですか。だから姓が違うってだけで、森本が『倅』と呼んだのは、じゃあ事実ですか」

岸が頷く。

「あの子は……でも、シャコが同情するように、傷ついて、怯えて、泣きながら迷子になってるそんじょそこらのガキとはタマが違う。あの子はね、あの事件のときに、自分を痛めつけて、お母さんを殺

した人間を、割り出そうとしていた。あの子の端末の履歴を調べさせて分かったんだが、あの子が執拗に追っかけていたのは、警察の犯罪者リストのデータベースだったよ。実際に、もう幾人かをピックして、リスト化もかなり進んでいたようだ。一端を探り当てるまでのペースもなかなか子供には似つかわしくない」

シャコが呆れたというように肩をすくめる。

「どういうガキですか」

「そのままの意味で天才であるのは間違いなさそうだ。天才なんてね、滅多にいないからお目にかかったことはないが、あの子はきっちり間違いなくというべきだろうな。溢れ返る情報の中に落ちた針先ほどの真実を掴むってのは、それなりの訓練を受けた人間にでも、なかなか困難なことだ。警察の犯罪者リストの中から、自分が調べたい人間を割り出すのは、絞り込んでいくやり方に、相当な勘働きが必要だ」

シャコは苦々しくそうに額にしわを寄せた。

「岸さん……」

岸がシャコの、よくよくみればまだ若い顔を見返してくる。

「あの子は、自分とお母さんを酷い目に遭わせた人間を見つけてどうするつもりだったんですか。親父さんのやり方をまねして強引にというか、正当に殴り込みをかけるのは、幾ら幾らマセてても無理でしょう」

岸が軽く肩をすくめた。

「何をしたかはコンピュータに残っていても、彼が何を考えたのかまでは、残っていないですよ。だけどねぇ、シャコ、思いませんか。何をするつもりだったにしろ、そら恐ろしいガキだって……ね」

シャコが首をすくめた。

「とっくに棺桶まで朽ちてしまってる伝説の巨人や、未来に世の中を救済してくれそうな神様がどんなに素晴らしくても、一緒の時間にいられなかったら、それでおしまいじゃないですか。そう思いませんか？　だからね、この子が僕の手許にあるってことを、僕はね……ラッキーだなぁって、凄く嬉しいんですよ……ほんとに。縁結びの神様にでも、感謝しなくっちゃいけないですよね……」

岸にそう説明されても、モニターに映る少年はやはり、化け物ではなくいたいけな子供にしか見えない。岸が蛇なら、役どころはカエルに過ぎない。判官贔屓、弱いものに肩入れしたくなるのは日本人の習い性だ。

蛇がカエルを狙っていたら、狙われているカエルに同情して何が悪い。カエルにだって、自分の心地良い場所でぬくぬく生きる権利はある。幸いにして、岸は合法の中で泳ぐことを自分のルールにしている人間だ。ほんガキに過ぎないこの少年が、岸という存在にであってしまったのは、幸運なのだろうか、運の尽きなのだろうか。

世の中にカエルがなくならないのは、ちゃんと蛇から逃げて人生を全うする連中はいるからだ。モニターの向うの白い部屋にいる少年が、ウワバミである岸に飲まれずに成長できるかどうかは、運の要素にもかかっているだろうが、蛇の血肉ではなく、立派なカエルとして、蠅だのトンボだのを美味しく食ってる未来を、シャコは心の底から祈ろうと思っていた。

祈るという言葉に思い至ったそのとき、場違いにも、シャコの脳裏に大昔に学校で習った文章の一節が思い浮かんだ。

——前（まえ）に古人（こじん）を見ず
——後（しりえ）に来者（らいしゃ）を見ず

意味するところは、過去に存在した人間にも、未来に存在する人間にも逢うことはできないというほどのことだったように記憶している。

岸ではないが、自分も、電算機（コンピュータ）という技術の興亡史の中で燦然（さんぜん）と輝いている伝説のハッカーたちと同じ時代に生きていなかったことは、自らの力ではどうにもならない失態だが、この天才（グル）になりうる素質をもった逸材が、卵のうちに出会えたことは紛れもない幸運だ。

シャコには、その、脈絡もなく甦ってきた短い文章の続きのことばが、どうやっても思い出せなかった。

ふと、モニターの向こう側で、小さい体がベッドからはみ出す勢いで、大きく寝返りを打った。

どうやら、退屈の当然の結果として、眠ったようだ。

コードネームでシャコと呼ばれる男は、運命が許している限りは、こうやってずっとこの少年を見守っていこうと、このとき、自分自身の心に誓ったのだった。

１２．天地悠悠（後書き）

すみません、タイトルの意味するところまでたどり着けませんでした。
間に合わせのために、無理矢理風呂敷畳んじゃいましたが、はっきり言ってこんなところでおわってしまっては、かなり問題があります。（恥ずかしい～）

裕のありすぎるスケジュールをいただきましたのに、不徳のいたすところでございます。この場をお借りして、深く陳謝いたします。

空想科学祭り２００９としては、ここでいったん手仕舞とさせていただきますが、このお話は続きます。

斉藤君は、岸の宿題にどんな回答を提出するのか。
何となく雰囲気が見えてきたのではないかと思われる月で、どんな事件が起こるのか、是非是非、気長にお待ちいただけたらと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2400i/

モグラ叩き（一）　～課題提示編～

2011年1月26日06時47分発行